

福岡市早良区

原遺跡 2

(第9次調査の報告)

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第140集

1986

福岡市教育委員会

福岡市報告書 原遺跡 2 (140集) 正誤表

No. 1

頁	行	誤	正
序文	12	本報告が、	本報告を、
挿図目次	Fig. 17	3号溝土層図	3号溝断面土層図
	Fig. 18	4号溝土層図	4号溝断面土層図
	Fig. 26	1号溝出土遺物	1号溝、表土出土遺物
	Fig. 34	48頁	47頁
図版目次	PL. 12	(1) 2号溝1号鞋出土遺物 (2) 2号溝4号鞋土層状態 (3) 3号溝1号鞋土層状態 (4) 3号溝4号鞋土層状態	(1) 2号溝、1号鞋出土遺物 (2) 2号溝、4号鞋土層状態 (3) 3号溝、1号鞋土層状態 (4) 3号溝、4号鞋土層状態
	PL. 15	(2) 4号溝1号鞋土層状態 (3) 4号溝2号鞋土層状態	(2) 4号溝、1号鞋土層状態 (3) 4号溝、2号鞋土層状態
	PL. 27	4号溝、ピット出土遺物	3号溝、4号溝、ピット出土遺物
表目次	Tab. 2	30頁	29頁
本文 1	17	昭和59年11月24日～ 昭和60年1月31日	昭和59年11月21日～ 昭和60年1月23日
6	10	2月～3日に	2月～3月に
7	表 内	第3次…飯倉小学校 第6次…調査面積900m ²	…飯原小学校 …調査面積1,810m ²
11	1	(2) 土塙墓 (Fig. 8)	(2) 土塙墓 (Fig. 8、PL. 4)
16	7	14号土塙 (Fig. 10)	14号土塙 (Fig. 11)
	11	15号土塙 (Fig. 10)	15号土塙 (Fig. 11)
17	Fig. 12	17号～20号・24号・26号土塙	17号～20号・24号～26号土塙
18	3	16号土塙 (Fig. 10)	16号土塙 (Fig. 11)
	14	1号溝 (Fig. 13、14、PL. 10、 11)	1号溝 (Fig. 13・14、PL. 9 ～11)
21	Fig. 15	西壁土層名称10。 茶褐色土と黄灰色粘の混合土 …17. 暗灰色砂	…10. 茶褐色土と黄灰色粘土 の混合土 …17. 暗灰色砂層

頁	行	誤	正
23	Fig. 17	No. 3土層名称4. 灰色砂 No. 3土層名称8. 灰色砂	……4. 灰色砂層 ……8. 灰色砂層
24	Fig. 18	4号溝土層図 4号溝北壁土層名称 9. 暗灰紫色粘質土層、	4号溝断面土層図 ……9. 暗灰茶色粘質土層
		4号溝No. 2ベルト土層名称 11. 暗灰色褐色砂質土層	……11. 暗灰褐色砂質土層
26	Fig. 20	8号・13号溝土層断面図	8号・13号溝断面土層図
31	13	(1) 表土出土遺物 (Fig. 25)	(1) 表土出土遺物 (Fig. 25 • 26)
52	5	のちほどで検討したい。	のちほど検討したい。
55	26	やや強く。歯点を除いて	やや強く、歯点を除いて
56	2	短い外傾する	短く外傾する
57	2	当該期の短頸壺の	当該期の短頸壺の
	11	外来形土器である。いわゆる	外来形土器である、いわゆる
	17	註1	註14
	18	註2……註3	註15……註16
	23	註4	註17
	24	註5……註6	註18……註19
	29	註11	註20
58	4	ここでは古師器として	ここでは土師器として
PL. 12		(1) 2号溝1号畦土層状態	(1) 2号溝、1号畦土層状態
		(2) 2号溝4号畦土層状態	(2) 2号溝、4号畦土層状態
		(3) 3号溝1号畦土層状態	(3) 3号溝、1号畦土層状態
		(4) 3号溝4号畦土層状態	(4) 3号溝、4号畦土層状態
PL. 15		(2) 4号溝1号畦土層状態	(2) 4号溝、1号畦土層状態
		(3) 4号溝2号畦土層状態	(3) 4号溝、2号畦土層状態

福岡市早良区

原遺跡2

(第9次調査の報告)

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第140集



昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

序 文

福岡の歴史は、朝鮮半島や中国大陆に近い事から海外交渉史であるとも言われています。ここ数年、早良平野の埋蔵文化財の発掘調査は、公共事業や民間事業の急速に進められる開発によって質量ともに増加の一途を辿っています。その成果も、市民の目を見張らせる大陸文物が一部に含まれますが、古代史の謎を一つ一つ解明する手がかりとなっています。そこに埋蔵文化財行政の目的はあると信ずるものであります。

さて、原遺跡は昭和50年度に第1次発掘調査が始められましたが、昭和59年度で9次を数えます。それぞれの調査の成果が徐々に、原遺跡の歴史を明らかにしていると信じます。ひとえに調査に御理解と御協力を頂いた、地元・土地所有者のみなさんのおかげです。記して感謝申し上げます。今回の報告書の内容は、弥生時代から室町時代までの歴史的変遷です。

本報告が、学会・学校教育・社会教育に御活用して頂くと共に、埋蔵文化財行政の御理解に役立てて頂ければ幸いです。

昭和61年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例　　言

- (1) 本書は、福岡市早良区原地区に於ける住宅、及び宅地開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和59年度の国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 原遺跡では昭和50年度の原談議遺跡をはじめとして、民間開発、公共事業を併せて合計9ヶ所を調査している。今回の発掘調査は昭和59年11月24日～60年1月31日まで実施した。担当は井澤洋一、米倉秀紀である。
- (3) 本書掲載の遺構写真の撮影は井澤が行い、遺物写真の撮影は米倉・谷沢仁が行った。
- (4) 本書掲載の遺構実測は井澤、米倉、谷沢仁、宮田昌之、中村昇平、清原ユリ子、金子由理子が行い、遺物実測は、1号溝出土遺物及び小型品を井澤が行い、2号～4号溝出土遺物については米倉・谷沢が行った。
- (5) 本書掲載の遺構の整図は主として池田洋子が行い、深堀博子の補助を得た。遺物についても井澤、米倉、池田が行った。
- (6) 本書の執筆は以下の通りである。

第1・2章……………井澤

第3章 第1節……………井澤

第2節(1)……………井澤

第2節(2)～(5)…米倉、谷沢

第4章 第1節……………井澤

第2・3節………米倉

- (7) 本書の編集は井澤、米倉、谷沢、池田、深堀の協議によって行い、井澤、米倉が責任を負った。

本文目次

	本頁
第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と概要	5
1. 立地と歴史的環境	5
2. 遺跡の概要	5
第3章 調査報告	8
1. 調査の概要	8
2. 遺構各説	8
3. 遺物各説	31
第4章 まとめ	52
1. 中世の遺構と遺物	52
2. 弥生時代後期土器について	55
3. 古墳時代初頭の土器について	57

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)	2
Fig. 2 原遺跡地形図 (縮尺1/5,000)	3
Fig. 3 原遺跡旧地形図 (縮尺1/5,000)	4
Fig. 4 原遺跡第9次調査遺構配置図 (縮尺1/200)	折込
Fig. 5 1号・2号住居跡復原図 (縮尺1/150)	9
Fig. 6 1号・2号住居跡 (縮尺1/60)	10
Fig. 7 3号住居跡 (縮尺1/60)	11
Fig. 8 1号土壙墓 (縮尺1/30)	12
Fig. 9 2号・3号・6号～9号土壤 (縮尺1/30)	13
Fig. 10 10号～13号土壤 (縮尺1/30)	14
Fig. 11 14号～16号土壤 (縮尺1/40)	15
Fig. 12 17号～20号・24号～26号土壤 (縮尺1/40)	17
Fig. 13 1号溝土層図 (縮尺1/40)	19

Fig. 14	1号溝内遺物出土状態（縮尺1/250）	20
Fig. 15	2号溝土層図（縮尺1/40）	21
Fig. 16	2号溝遺物出土状態（縮尺1/40）	22
Fig. 17	3号溝土層図（縮尺1/40）	23
Fig. 18	4号溝土層図（縮尺1/60）	24
Fig. 19	4号溝内遺物出土状態（縮尺1/30）	25
Fig. 20	8号・13号溝土層断面図（縮尺1/40）	26
Fig. 21	1号・2号掘立柱建物（縮尺1/100）	27
Fig. 22	3号～5号掘立柱建物（縮尺1/100）	28
Fig. 23	6号～9号掘立柱建物（縮尺1/100）	30
Fig. 24	1号土壤基出土遺物（縮尺1/3）	31
Fig. 25	1号溝出土遺物（縮尺1/3）	33
Fig. 26	1号溝出土遺物（縮尺1/3）	34
Fig. 27	1号溝出土遺物（木器）（縮尺1/4）	36
Fig. 28	2号溝出土遺物（縮尺1/4）	38
Fig. 29	2号溝出土遺物（縮尺1/4）	40
Fig. 30	2号溝出土遺物（縮尺1/4）	41
Fig. 31	3号溝出土遺物（縮尺1/4）	43
Fig. 32	3号溝出土遺物（縮尺1/4）	45
Fig. 33	3号溝出土遺物（縮尺1/4）	46
Fig. 34	4号溝出土遺物（縮尺1/4）	48
Fig. 35	4号溝, pit 出土遺物（縮尺1/4）	49
Fig. 36	4号溝出土遺物（縮尺1/4）	50
Fig. 37	出土遺物（縮尺1/1）	51
Fig. 38	中世遺構配置図（縮尺1/1,000, 1/600）	54

図版目次

図版巻頭 調査員・作業員一同

PL. 1	(1)調査区北半全景（南から）	(2)調査区北半全景（北から）
PL. 2	(1)調査区南半全景（北から）	(2)調査区南半全景（東から）
PL. 3	(1)1号・2号住居跡（東から）	(2)3号住居跡（南から）

PL. 4	(1)上埴墓（西から）	(2)2号・3号土壤（北から）
PL. 5	(1)8号土壤（北から） (3)18号土壤（北から）	(2)6号・7号土壤（東から） (4)21号・22号土壤（北から）
PL. 6	(1)環濠、及び掘立柱建物群（南から） (3)1号掘立柱建物（東から）	(2)1号・2号掘立柱建物（東から）
PL. 7	(1)2号掘立柱建物（東から） (3)7号掘立柱建物（西から）	(2)3号・7号掘立柱建物（西から）
PL. 8	(1)4号掘立柱建物（西から） (3)6号掘立柱建物（西から）	(2)5号掘立柱建物（北から） (4)8号掘立柱建物（東から）
PL. 9	(1)1号溝（南から） (3)1号溝、4号畦土層状態（西から）	(2)1号溝、2号畦土層状態（北から）
PL. 10	(1)1号溝内松ボックリ出土状態（南から） (3)1号溝内漆器椀出土状態	(2)1号溝内松ボックリ出土状態
PL. 11	(1)1号溝内下駄出土状態 (3)同下駄出土状態	(2)同下駄出土状態 (4)同木製品出土状態
PL. 12	(1)2号溝1号畦土層状態（西から） (3)3号溝1号畦土層状態（西から）	(2)2号溝4号畦土層状態（東から） (4)3号溝4号畦土層状態（東から）
PL. 13	(1)2号・3号溝（西から） (3)2号溝遺物出土状態（西から）	(2)2号・3号溝（東から） (4)3号溝遺物出土状態（東から）
PL. 14	(1)3号溝遺物出土状態（北から） (3)P2内壺出土状態（西から）	(2)3号溝勾玉出土状態（北から） (4)1号土壤鉄製馬蹄出土状態（西から）
PL. 15	(1)4号溝北壁土層状態（南から） (3)4号溝2号畦土層状態（北から）	(2)4号溝1号畦土層状態（北から） (4)冲積地堆積状態（南から）
PL. 16	(1)4号溝（西から） (3)同底部Pit内壺出土状態（南から）	(2)同溝底部Pit内遺物出土状態（南から）
PL. 17	(1)4号溝上層遺物出土状態（西から） (3)同溝底遺物出土状態（西から）	(2)同上層祭祀遺物出土状態（西から） (4)同溝底遺物出土状態
PL. 18	1号溝出土遺物	
PL. 19	1号溝出土遺物	
PL. 20	1号溝出土遺物	
PL. 21	2号溝出土遺物	
PL. 22	2号溝出土遺物	
PL. 23	2号溝・3号溝出土遺物	

PL. 24	3号溝出土遺物
PL. 25	3号溝出土遺物
PL. 26	3号溝・4号溝出土遺物
PL. 27	4号溝、ピット出土遺物
PL. 28	4号溝出土遺物

表 目 次

Tab. 1 原遺跡第9次調査土壤一覧表	17
Tab. 2 原遺跡第9次調査据立柱建物計測表	30

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市の西部に位置する早良平野は、室見川とその支流によって形成された沖積平野であるが、この平野の博多湾寄りの微高地に原遺跡は立地する。金屑川を挟んで西側の台地上には有田・小田部の遺跡群が存在し、原遺跡とは密接な関係を保っている。原地域も又、有田・小田部の台地同様に202号線バイパス建設や福岡市営地下鉄開通の影響を受け、住宅化が著しい土地柄である。原遺跡の調査は現在まで9次に亘って行われているが、昭和50年に第1次調査を行い、昭和51年にオープンしたスーパーダイエーは周辺の住宅化に拍車をかけるものであり、そのため以後の発掘調査は全て高層住宅建設に伴うものであった。

当該地は県道558号線に面した水田であったが、昭和59年10月に福岡県労働者住宅生活協同組合による分譲住宅建設計画が申請されたため、昭和59年10月2日に試掘調査を実施した。試掘調査では、約170cmの客土の下に現水田面があり、更にその水田面、及び床土下の黄灰色シルト面にて中世の遺構を確認した。福岡市教育委員会は福岡県労働者住宅生協、及び土地所有者である佐々倉氏との間で協議を行い、一部国庫補助を受けて発掘調査に踏み切った。從来の調査については第2章に概略を記載しているので参考にされたい。

申請地 福岡市早良区原8丁目1,171番3外 面積 2,990m²

調査期間 昭和59年11月24日～昭和60年1月31日

2. 調査の組織

調査委託 佐々倉為成、福岡県労働者住宅生活協同組合（理事長 渡辺四郎）

調査主体 福岡市教育委員会

調査責任 福岡市教育委員会文化部文化課（現 埋蔵文化財課）埋蔵文化財第2係

庶務担当 岡崎洋一

調査担当 井澤洋一、米倉秀紀

調査補助 谷沢仁、宮田昌之、中村昇平、池田祐司

整理補助 池田洋子、深堀博子、大内士郎

調査・
整理作業 松尾和雄、合屋龍介、高浜謙一、吉村哲美、蜂須賀六三、有富いつ子、
板倉文子、緒方マサヨ、金子由理子、清原ユリ子、後藤ミサヲ、坂口フミ子、
佐藤テル子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、柴田幸子、西尾たつよ、日野良子、平
井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松尾玲子、松下節子、宮原邦江、吉岡田鶴
子、吉田祝子、内尾トミ子、仲前智江子、土妻崎初江、中村千里、永井和子



1. 西新町遺跡 2. 藤崎遺跡 3. 原遺跡 4. 原談議遺跡 5. 飯倉遺跡
 6. 飯倉原遺跡 7. 下戻遺跡 8. 鶴町遺跡 9. 原深町遺跡 10. 有田七田前遺跡

Fig. 1 周辺の遺跡 (縮尺 1/25,000)

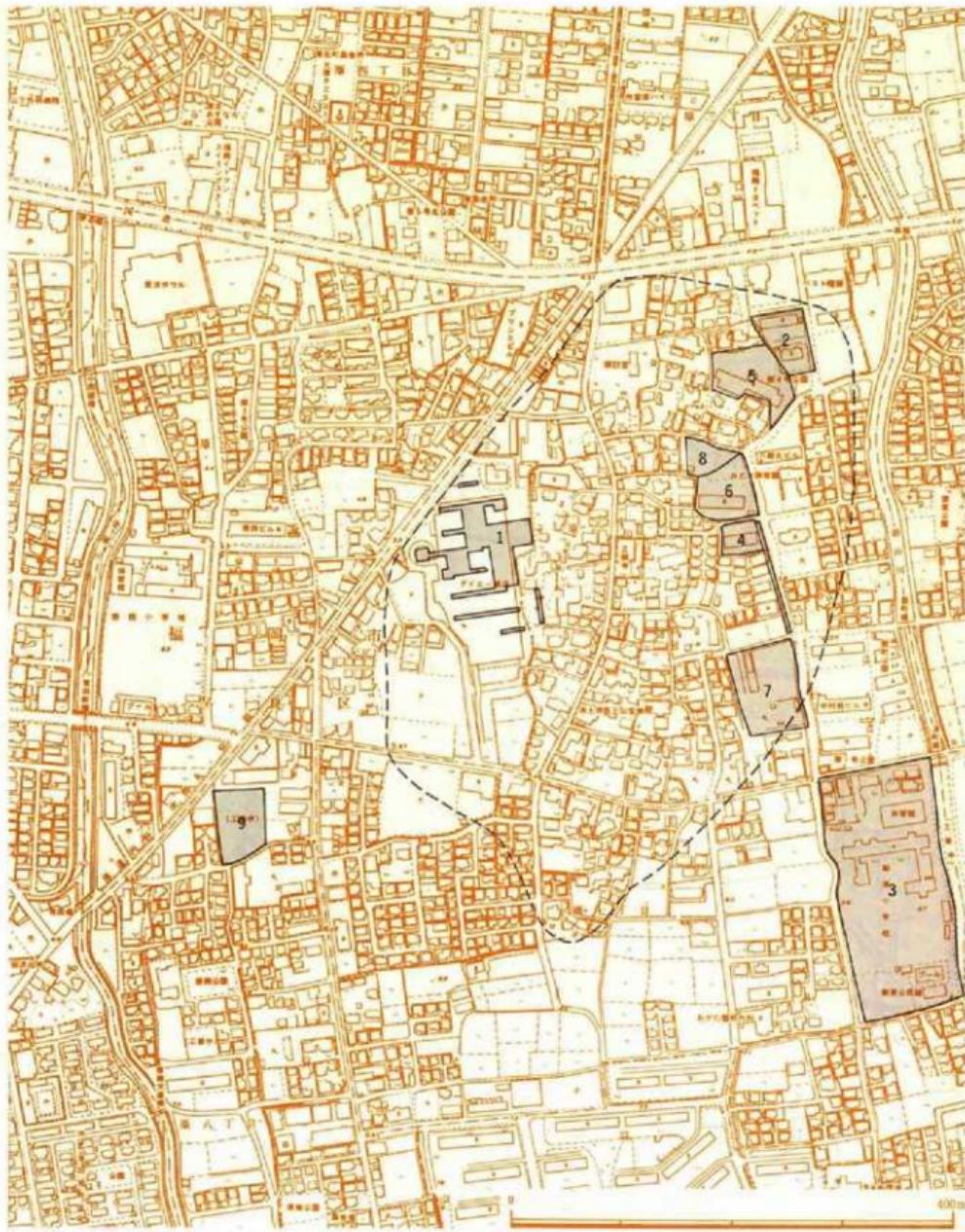
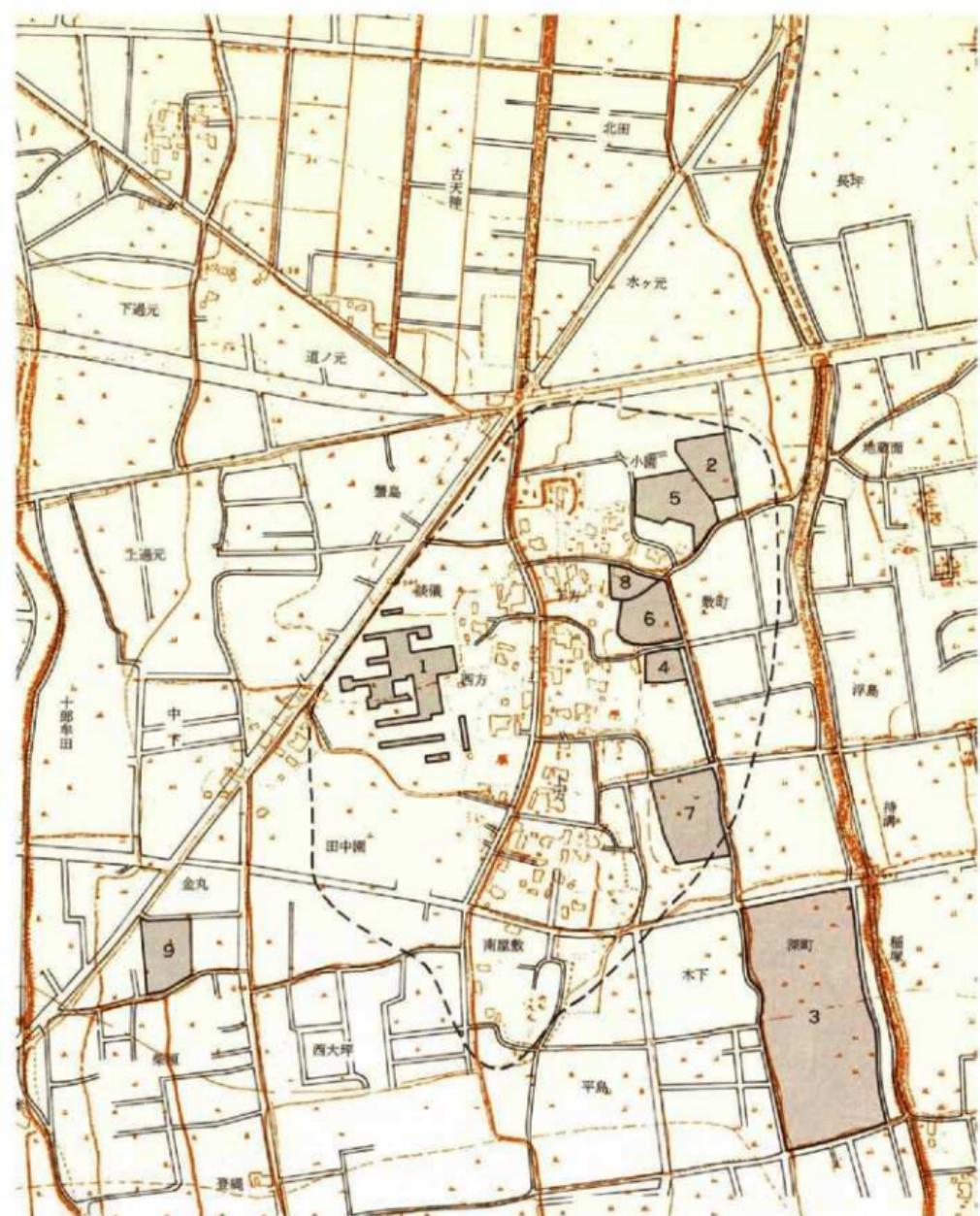


Fig. 2 原遺跡地形図 (縮尺 1/5,000)

1～9 各調査次數

1. 原試掘遺跡

3. 原深町遺跡



1~9 各調査次数

1. 原謨儀遺跡

3. 原深町遺跡

Fig. 3 原遺跡旧地形図 (縮尺1/5,000)

第2章 遺跡の立地と概要

1. 立地と歴史的環境

福岡市の平野部は油山山塊から北へ伸びる鴻巣山を中心とした平尾丘陵によって、狭義の福岡平野と早良平野に限られる。福岡市西部に広がる早良平野は室見川や金屑川等の大・小河川によって形成された沖積平野である。この沖積平野のほぼ真中には中位段丘である有田・小田部の台地が存在するが、この台地の東側には標高6~7mを測る原の低位段丘がある。この台地は東西長約550m、南北幅250mを測る狭長な微高地である。水田面との比高差は小さく、東側には稻塚川が、西側には有田・小田部台地との境に金屑川が流下する。微高地の北側は「塩入、舟底、浮島」等の地名が残っている。かつて河口が大きく湧入しており、藤崎・西新地区は砂嘴状を呈していたと考えられるが、特に南庄地区では「庄ノ浜」「中ノ浜」「上ノ浜」の地名などもあって、十二町ほどの塩田が存在した事が伝えられている。台地上は縄文時代から中世までの集落が營まれるが、特に弥生時代中期と古墳時代初頭の大集落が近年発見され、それに伴なう水田跡としては台地西端の原談儀遺跡^{註2}や台地南側の原深町遺跡^{註3}などがある。古墳は「大王塚」と呼ばれるものや後期群集墳^{註4}も存在したようであるが、現在は不明である。

周辺の遺跡では東側に細形銅劍を出土した飯倉原遺跡や古墳時代初頭の千限古墳、西側に細形銅戈を出土した堀棺墓^{註5}や弥生時代初頭の環濠を検出した有田遺跡^{註6}がある。又、北側の海岸には藤崎遺跡方形周溝墓群^{註7}や西新町遺跡^{註8}の古墳時代初頭の集落が存在する。水田跡としては弥生時代の鶴町遺跡や、弥生時代初頭の有田七田前遺跡^{註9}が知られる。総じて弥生時代~古墳時代を通じて有田遺跡との有機的なつながりは密接であり、有田遺跡の集落に対して分村的位置を示している。奈良時代は田部郷に属し、条里遺構は顕著に残っている。中世には在地豪族による名や屋敷の形成が著しいところである。

2. 遺跡の概要

原遺跡群の調査については、既報告分をも含めて9ヶ所の発掘調査がある。発掘調査の対象は1,000m²以上に限定されているため、木目の細い調査とは云えない。よって、台地周囲の水田地帯が主であるため遺跡の内容は乏しいものが多く、集落や墓地にかかわる調査例は少ない。台地上の住宅地の新改築に際してはほとんど手を加えていないため、遺跡の性格や変遷等の解明に至る資料となり得ていない。ここでは概要を述べ、更に各調査毎に付けられていた遺跡名を次数に整理し、原遺跡を包括的にとらえる資料としたい。今後の調査の在り方や方法について充分な検討が望まれる。

第1次調査（福岡市早良区大字原字田中園・談儀）

原談儀遺跡と称されている。遺跡調査会がスーパーダイエー建設に伴って発掘調査を実施したもので、調査期間は1975年（昭和50年）7月～9月である。調査面積は3,584m²である。

遺構は台地上と沖積地の両方に検出できる。縄文時代晩期には夜臼式土器を包括する自然縁層を擂鉢状に盛り込んだ井戸がある。弥生時代前期～中期初頭の杭列、奈良・平安時代の水田跡、鎌倉時代の溝状遺構などを検出した。遺物は、縄文晩期に伴う杵、弥生時代前中期～中期初頭のフォーク形の木器、スプーン形木器、杓子形木器、桶（一本作り）、三叉鉢があり、鎌倉時代では龍泉窯系青磁の出土がある。^{註2}

第2次調査（福岡市早良区原6丁目632-1）

原小園遺跡と称されている。福岡市教育委員会が1979年（昭和54年）2月～3日に発掘調査を行う。高層の賃貸住宅建設に伴うもので、調査面積は約2,280m²である。

遺構は弥生時代中期頃の溝、奈良・平安時代以降の溝、堀立柱建物等を検出した。

第3次調査（福岡市早良区原7丁目588-1）

原深町遺跡と称されている。飯原小学校の建設に伴い、福岡市教育委員会が、昭和54年8月21日～12月20日に亘って発掘調査を行った。調査面積は3,000m²である。

遺構は古墳時代前期初頭の溝状遺構と杭列（山河川）が検出された。遺物は縄文晩期から中世に至る土器、石器、瓦、陶磁器が出土しており、特に古墳時代初頭の山陰系上器や朝鮮系の赤焼上器もある。木器は鍤、鍬などの農耕具や臼、杵、紡錘車等の生活用具、建築部材が出土している。^{註3}

第4次調査（福岡市早良区原6丁目826-1・2）

原前田遺跡と称されている。福岡市教育委員会が1980年（昭和55年）7月4日～8月2日に発掘調査を行う。共同住宅建設にともなうもので、調査面積は850m²である。^{註4}

第5次調査（福岡市早良区原635）

福岡市教育委員会が分譲住宅建設に伴って発掘調査を実施する。発掘調査期間は昭和56年8月26日～9月30日である。調査面積は3,312m²である。

遺構は弥生時代～古墳時代の集落を主としている。他には中世の包含層が存在し、土師皿、壺等が出土している。^{註5}

第6次調査（福岡市早良区原6丁目825-2）

福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴って発掘調査を実施した。調査期間は昭和57年5月20日～6月31日で、調査面積は1,810m²である。

遺構は平安時代～鎌倉時代の堀立柱建物4棟、井戸4基、溝状遺構7条等である。遺物には須恵器、土師器、瓦器、青磁、白磁、滑石製品などがある。^{註6}

第7次調査（福岡市早良区原6丁目875-1）

福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴って発掘調査を実施した。調査期間は昭和57年11月15日～12月25日で、調査面積は2,000m²である。

遺構は弥生時代～古墳時代の溝状遺構3条、中世の井戸^{註12}2基、土壙などを検出した。

第8次調査（福岡市早良区原6丁目805）

個人専用住宅建設のため福岡市教育委員会が発掘調査を行う。調査期間は昭和59年7月18日～8月21日で、調査面積は600m²である。

遺構は弥生時代中期の甕棺墓7基、古墳時代の溝1条、中世の井戸10基、土壙墓1基、近世の井戸1基、溝1条が存在する。遺物は2号甕棺墓から鉄製鉢が1点出土した。他に青磁、白磁、瓦器、上師質土器、瓦質土器が出土している。^{註13}

註1 福岡県早良郡役所「早良郡史（全）」 1973

註2 福岡市歴史資料館「福岡平野の歴史－緊急調査された遺跡と遺物－原始時代～江戸時代」 1977

註3 福岡市教育委員会「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976

註4 福岡市教育委員会「有田遺跡－福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告」 1968

註5 福岡市教育委員会「有田・小田部第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986

註6 福岡市教育委員会「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982

註7 福岡市教育委員会「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 1982

註8 福岡市教育委員会「原源町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 1981

註9 福岡市教育委員会「原前田遺跡の調査」福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告Ⅰ 福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981

註10 福岡市教育委員会が昭和56年に発掘調査 現在整理中

註11 福岡市教育委員会「文化財だより第3号」 1984

註12 福岡市教育委員会「文化財だより第3号」 1984

註13 福岡市教育委員会が昭和59年に発掘調査 現在整理中

原遺跡発掘調査一覧表

調査次数	調査年度	旧名 称	所 在 地	中面積	調査面積	調査期間	備 考
第1次	1975年 昭和50年度	单段階遺跡	早良区大字原浦1番地、田中瀬	10,700m ²	3,584m ²	50年7月～9月	鉄メッシュ
第2次	1978年 昭和53年度	原小園遺跡	早良区原6丁目632-1	3,480m ²	2,280m ²		現塗設施
第3次	1979年 昭和54年度	原保町遺跡	早良区大字原浦町588-1	17,003m ²	3,000m ²	54年8月21日～12月20日	原保小学校、第71集
第4次	1980年 昭和55年度	原前田遺跡	早良区原6丁目826番地1-2	1,161m ²	850m ²	55年7月4日～8月2日	共同住宅、原塗設施 真鍋有志、第64集
第5次	1981年 昭和56年度	原6丁目遺跡	早良区原6丁目635	2,965m ²	3,312m ²	56年8月26日～9月30日	分譲マンション 高塚義典、第65集
第6次	1982年 昭和57年度	—	早良区原6丁目825-2	1,883m ²	900m ²	57年5月20日～6月31日	共同住宅 真鍋有志
第7次	*	—	早良区原6丁目875-1	2,902m ²	2,000m ²	* 11月15日～12月25日	共同住宅 真鍋有志
第8次	1984年 昭和59年度	—	早良区原6丁目805番地	1,027m ²	600m ²	59年7月18日～8月21日	専用住宅 大持洋三
第9次	*	—	早良区原8丁目1171-3	2,990m ²	2,900m ²	* 11月21日～1月23日	分譲住宅 佐々木義成

第3章 調査報告

1. 調査概要

当該地は金屑川の東約100m 沖積地上にあって、台地上に展開する原遺跡の南西側端に位置するものと思われる。試掘調査では溝のみしか検出できず、当初は約1,000m²ほどの調査範囲を考えていたが、表土除去の結果、全面が遺跡であることが判明した。そのため施工業者との協議を現場で行い、全面調査に踏み切った。当該地は水田であったが、近年に約2mの客土がされており、先ず、客土の約半分を調査区外へ持ち出す作業の円滑化を計った。残りの残土処理については調査区を2分し、重機によって残土の切り返しを行った。

遺構は著しい削平を受けており、本来の形をとどめてはいないが、中世の遺存状態は良好である。

遺構面は黄灰色のシルト層であるが、部分的にこの上に暗茶褐色の粘質土が乗る。これらの層は合せても30~50cmであり、下位は砂礫層になる。

遺構の時期は大きく、弥生時代後期、古墳時代初頭、中世の3時期に分かれる。弥生時代の遺構は溝2条（2号・4号溝下層）と円形竪穴住居跡2軒である。竪穴住居跡は幅約10~20cmの周溝を有し、柱穴は周壁、又は周溝に沿って円形に並んでいる。古墳時代の遺構は溝2条（3号溝・4号溝上層）、方形竪穴住居跡2軒、壠立柱建物2棟等である。溝はいずれも弥生後期の溝と同様の構造と機能をもつものである。3号・4号溝からは勾玉、ミニチュア土器等が出土し、祭祀を行ったことが判明した。中世の遺構は溝1条（1号溝）と壠立柱建物5棟等である。溝は矩形に曲るもので、溝の内側には主軸がほぼ同一の壠立柱建物4棟が存在する。又、溝内からは松ボックリや桃果等の自然遺物とともに、陶磁器や漆器碗、下駄、木札等が出土した。中世末期に領地を拡大していった名主層の館跡であろうと考えられる。以下に各遺構について詳細に説明したい。

2. 遺構各説

(1) 住居跡

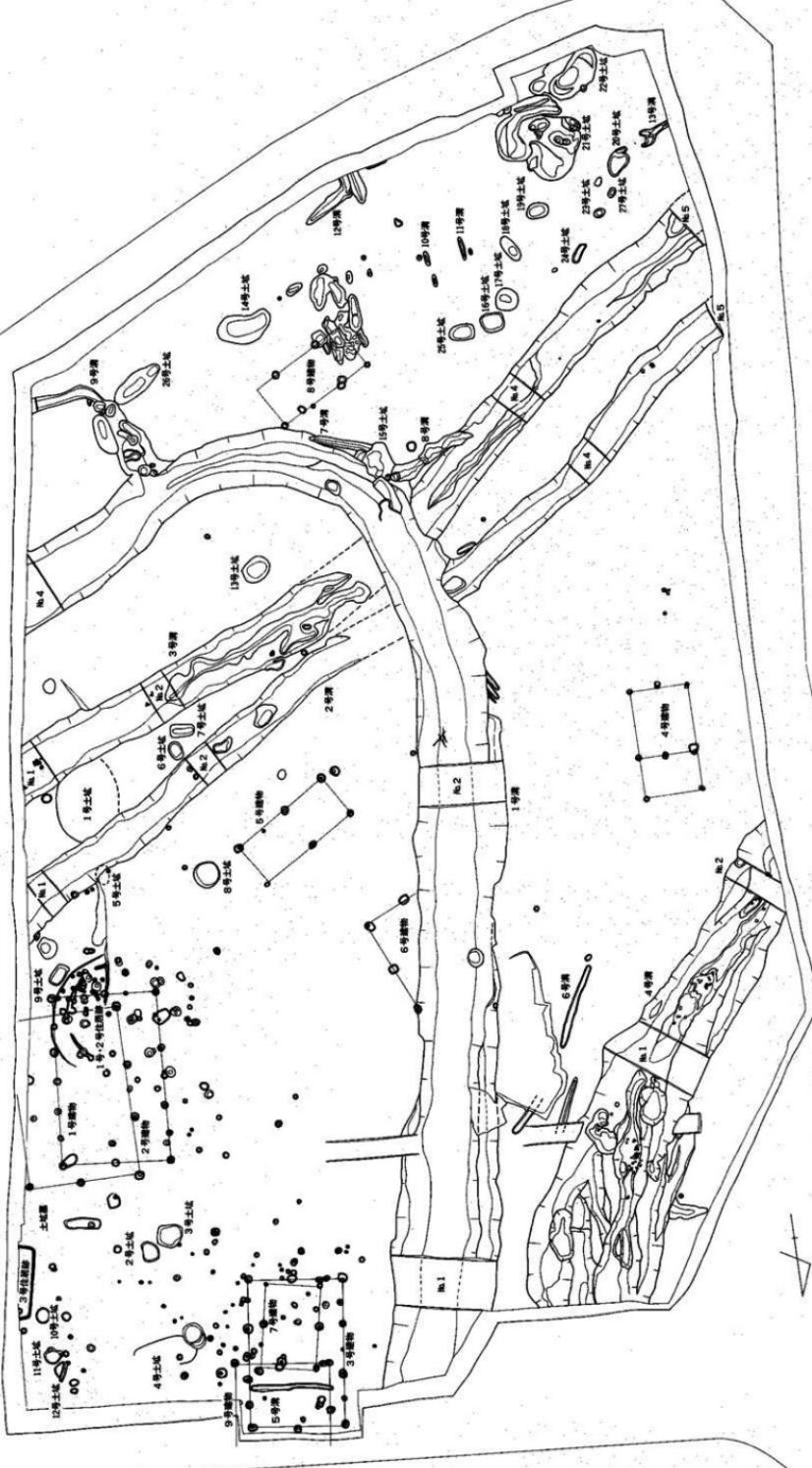
3軒検出したが、中世以降の削平のため遺存状態は悪い。遺構はシルト質の暗茶褐色粘質土に埋り込まれている。削平度合からみて、本来は西側にも住居跡が並がるものと思われる。

1号・2号住居跡 (Fig. 5, 6, PL. 3)

削平を受けているため周壁の遺存状態は悪い。覆土は黒色粘質土である。住居跡は小型と大型の2軒の切合關係にあるが、周溝状の小溝をP15・16・25が切っており、小型住居跡が先

1:200

Fig. 4 所谓新9次测光植物园 (图尺1/200)



行する。小型の住居跡は大型住居跡にすっぽり入り、中軸も同一であることから、建て替えたによる住居跡の規模拡大であると解釈できる。但し、宝台遺跡のB地区1号住居跡のように、周壁下にベット状遺構を付設する住居跡があるので断定はできない。小型住居跡を1号とし、大型住居跡を2号と呼称する。内側の住居跡、すなわち1号住居跡は東側に周溝を残している。周溝は連続しないが、幅15~23cm、深さ5~8cmを測る。この住居跡に伴う柱穴はP1~P7で、径35~55cm、深さ30~70cm、柱痕径12~18cmを測る。東西方向の柱間が南北に比べ長いことがわかる。各柱間の長さは、P1~P5間が4.2m、P2~P6間が4.5m、P3~P6間が4.3m、P4~P7間が4.3mを測る。住居跡の規模を復元すれば、P1、P2と周溝外側までの長さは85~95cmであるから、各柱間の長さに周壁までの長さを加えると、東西径6.6m、南北径6.1mを測る橢円形住居跡を復元することが可能である。出入口を構成する柱穴としては、P8~P14がある。径18~20cm、深さ5~30cmを測る。周壁外側のP10~14は浅いが、他は20~30cmの深さを保っている。P8~10、P11~14の両者は約1.85mの間隔で並行し、直線的に並んでいる。宝台遺跡C5号住居跡の出入口の柱位置関係とは相違があるので後程、整理したい。

2号住居跡は、やはり橢円形の平面形を呈していると思われる。柱穴はP15~25が伴い、径28~55cm、深さ38~72cm、柱痕径16~18cmを測る。P15~21間の長さ6.75m、P17~23間の長さ6.35m、P18~24間の長さ6.05mを測り、南北方向に比べ東西間が長いことが解る。周壁までの長さは70~90cmを測るので、住居跡の直径を復元すれば、東西径8.8m、南北径約7.9mの規模が考えられる。1号・2号住居跡の中央にはP26が位置する。規模から炉と考えられるが、いずれの住居跡に伴うのかは不明である。恐らく、拡張後も同一炉を使用していたのであろう。時期は住居跡の規模等から中期中頃から後半の間が考えられる。

3号住居跡 (Fig. 7, PL. 3)

東側の境界地に位置するため全形は不明である。方形を呈した住居跡である。南北壁は5.4m、深さ32cmを測る。覆土は上層が黒色粘質土（砂粒を多く含む）、下層が淡黄褐色砂質土を主体とするものである。床面には粘土等の貼り床はみられない。周壁内側には幅13~18cm、深さ2cmを測る周溝が巡る。遺物の出土は無い。古墳時代中期～後期の住居跡と考えられる。

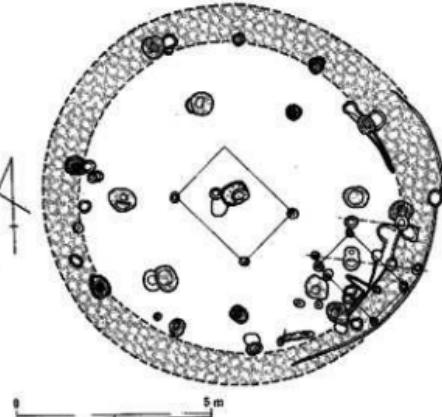


Fig. 5 1号・2号住居跡復原図（縮尺1/150）

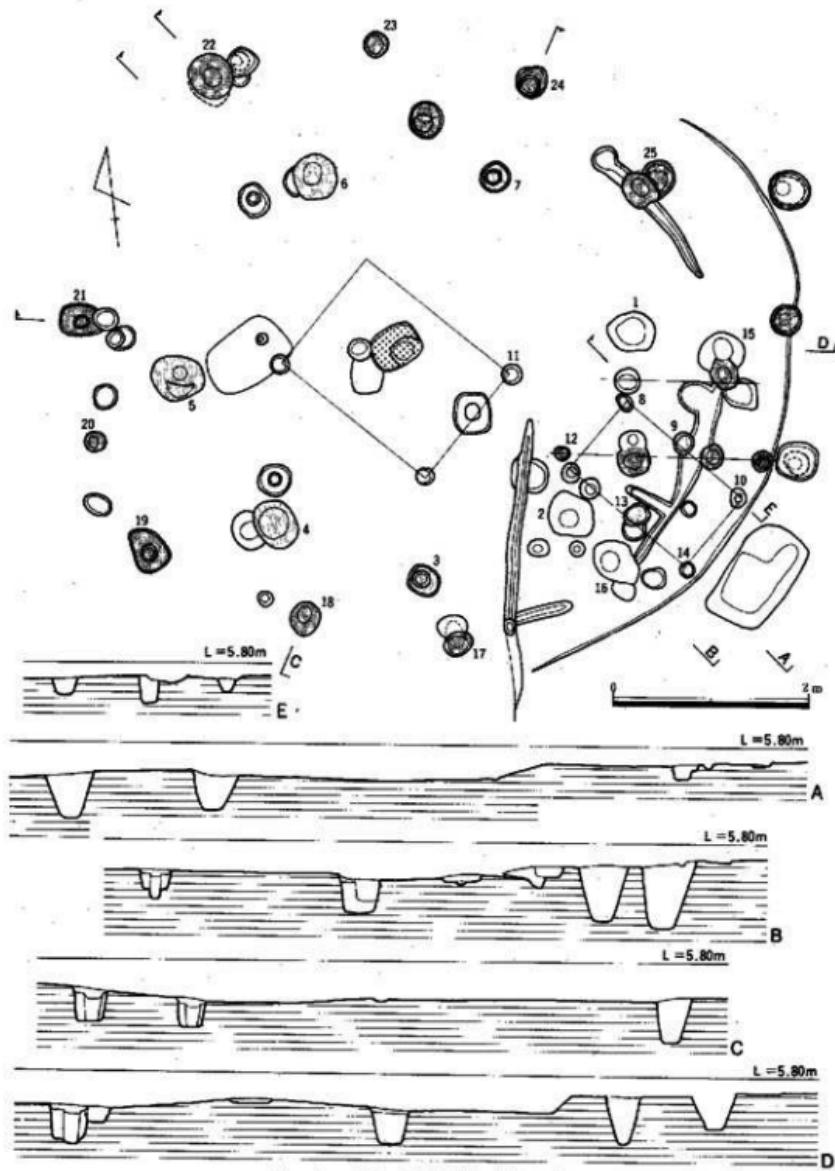


Fig. 6 1号・2号住居跡 (縮尺1/60)

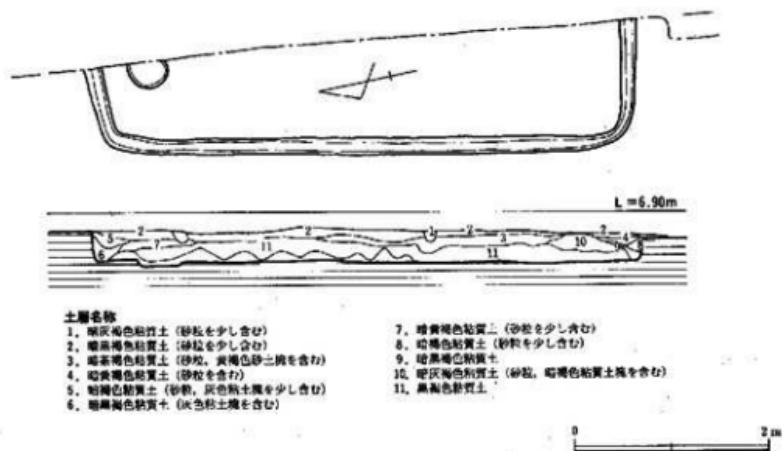


Fig. 7 3号住居跡 (縮尺1/60)

(2) 土 墓 (Fig. 8)

1号・2号堀立柱建物の北側で検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、西側の小口部が幅広い。長さ173cm、幅は西側で54cm、東側で42cm、深さ10cmを測る。床面は西側へ傾斜している。覆土は暗茶褐色粘質土である。床面の pit は土壤墓に伴わない。南西隅に土師器壙を1点副葬している。ヘラ切り底であり、器形より平安時代が考えられる。

(3) 土 墓

I・II区合せて27基を検出した。時期や機能について不明なものが多々、特にII区で検出した土壤のはほとんどは不定形を呈し、覆土は砂質土である。無遺物か、又は、細片しか出土しない。遺跡地の西南には稻塚川が流下しており、沖積地形成時や集落形成以降においても氾濫の影響はあったと考えれば、氾濫後の水溜り状土壤と考えた方が理解できる。

1号土塚 (Fig. 4)

2号・3号溝の間に位置する。現存長3.5mを測る楕円形の土塚である。削平のため残りは悪い。覆土は暗茶褐色砂質土である。塹内からは馬蹄が1点と土師皿細片が出土している。近代の土塚である。

2号土塚 (Fig. 9, PL. 4)

平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は浅い皿状である。最大長106cm、幅80cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で、第1層には黒色土と黄褐色粘質土のブロックを含む。第2層は第1層

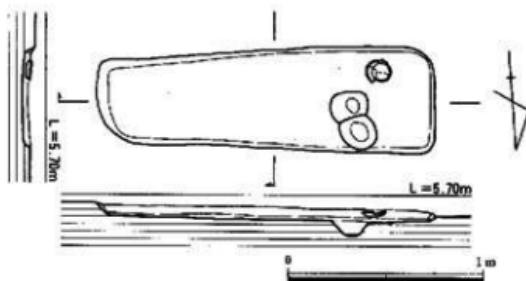


Fig. 8 1号土塙墓 (縮尺1/30)

に比べブロックが小さい。遺物は弥生式土器片が出土している。

3号土塙 (Fig. 9, PL. 4)

平面形は不整隅丸方形を呈し、断面形は逆梯形である。最大長125cm、最大幅120cm、深さ26cmを測る。覆土は3層に分かれ、第1層は暗灰色粘質土に黒色土と黄褐色土の大ブロックを含み、第2層には暗灰色粘質土が多く含まれる。第3層は暗灰褐色土である。遺物は弥生式土器片がある。

4号土塙 (Fig. 4)

調査区北側で検出した。著しい削平を受け、窪み状化している。平面形は隅丸長方形を呈し、最大長約320cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土に黄褐色粘土のブロックを含んだ土である。遺物の出土はない。

5号土塙 (Fig. 4)

2号溝を切っている。平面形は梢円形を呈し、断面形は船底形である。最大長100cm、幅70cmを測る。覆土は暗黄褐色粘質土である。

6号土塙 (Fig. 9, PL. 5)

平面形は梢円形を、断面形は逆梯形を呈している。長さ96cm、幅68cm、最大の深さ25cmを測る。覆土は第1層は黒褐色粘質土、第2層は淡黒色砂質土である。

7号土塙 (Fig. 9, PL. 5)

平面形は隅丸長方形を、断面形は舟底状を呈している。長さは125cm、幅は東側で65cm、西側で46cm、最大の深さ33cmを測る。覆土は暗茶褐色砂質土である。遺物の出土はない。

8号土塙 (Fig. 9, PL. 5)

平面形は円形を呈し、断面形は浅い皿状である。覆土は真黒色粘質土を主体としている。長径138cm、短径136cm、深さ17cmを測る。弥生時代の貯蔵穴の底部と考えられる。遺物の出土はない。

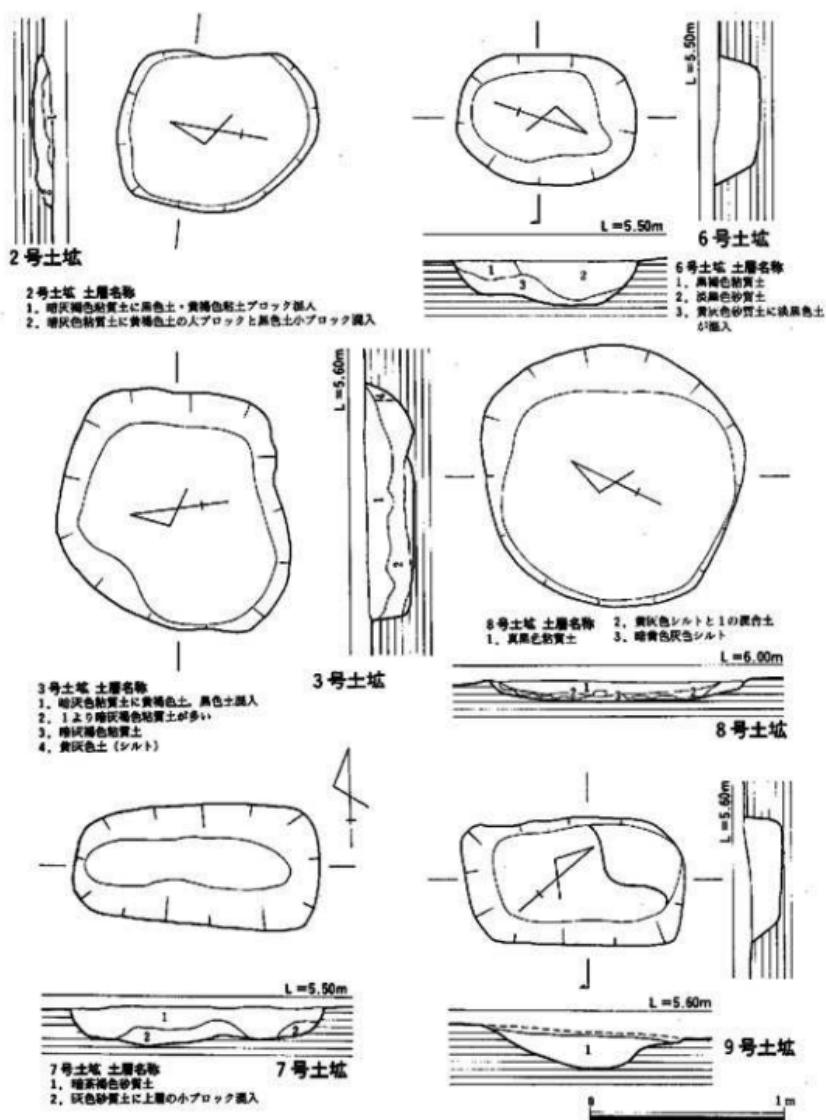


Fig. 9 2号・3号・6号～9号土壤 (縮尺1/30)

9号土塙 (Fig. 9)

1号・2号住居跡の東側に位置する。入口と考えられる柱穴群の外側に位置しているため、住居跡に付属する可能性をもっている。覆土は淡黄褐色のシルトに褐色土、及び黒色土のブロックを含む。平面形は隅丸長方形、断面形は舟底形である。長さ106cm、幅68cm、最大深23cmを測る。

10号土塙 (Fig. 10)

平面形は円形を、断面形は逆梯形を呈している。長径84cm、短径76cm、深37cmを測る。覆土は黒褐色粘質土に黒色土や暗黄褐色土の小ブロックを含む層を主体とする。11号土塙と同形

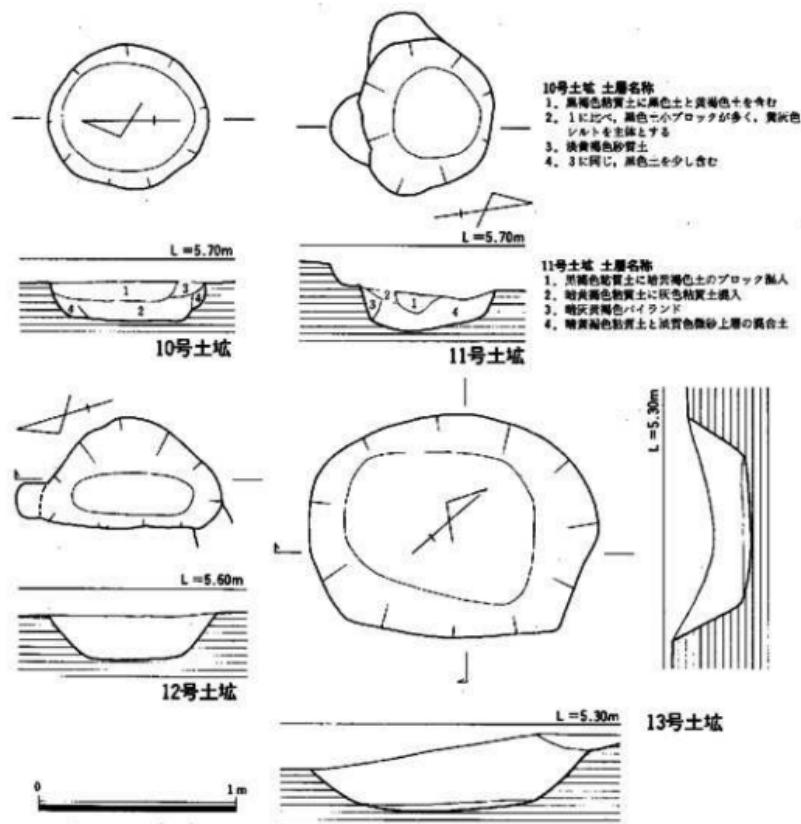


Fig. 10 10号～13号土塙 (縮尺1/30)

態で、柱穴の可能性をもっている。

11号土塙 (Fig. 10)

ふたつの pit と切り合っている。平面形は不整円形で、断面形は逆梯形状を呈している。長径 84cm、短径 72cm、深さ 55cm を測る。暗黄褐色粘質土を主体とする覆土である。第 1 層は黒褐色粘質土であり、柱痕かもしれない。10号土壤同様に柱穴の可能性がある。

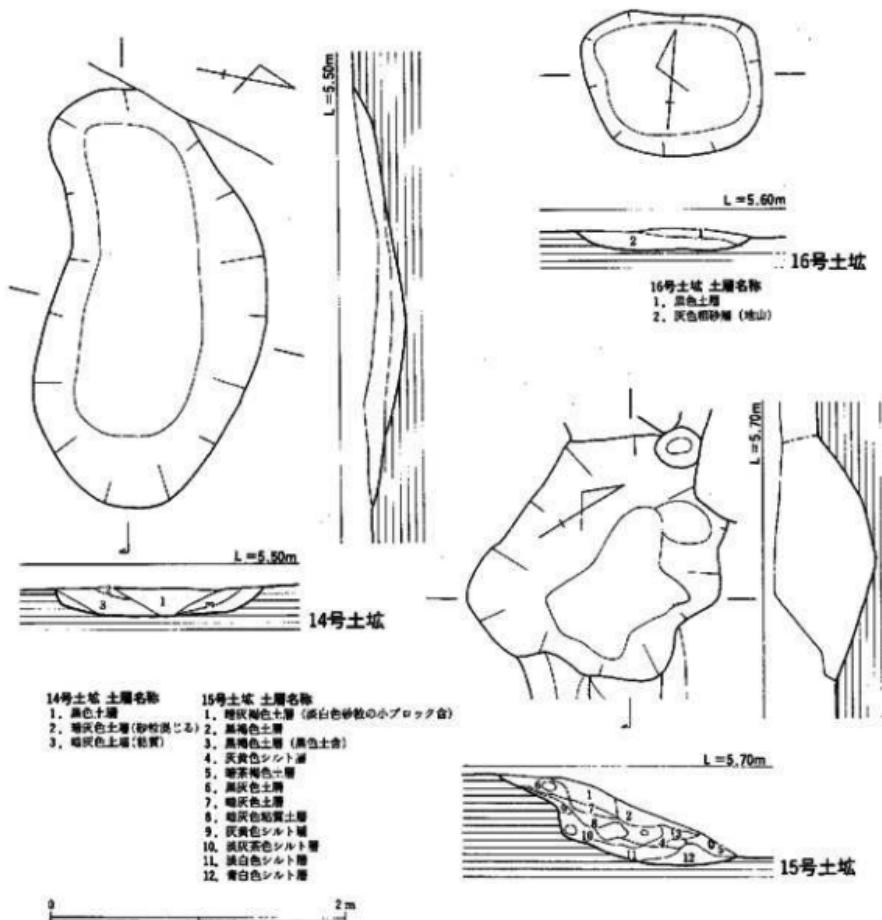


Fig. 11 14号～16号土塙 (縮尺1/40)

12号土塙 (Fig. 10)

平面形は不整形を呈し、断面形は逆梯形である。2つのpitと切り合っている。長さ104cm、最大幅58cm、深さ24cmを測る。覆土は、11号土壤と同様に暗黄褐色粘質土を主体とする。

13号土塙 (Fig. 10)

平面形は隅丸長方形を、断面形は逆梯形状を呈している。長さ152cm、幅118cm、深さ42cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。時期は中世であろう。

14号土塙 (Fig. 10)

II区の東南側で検出した。平面形は長梢円形を、断面形はレンズ状を呈している。上層は黒色粘質土、下層は暗灰色粘質土で、レンズ状に堆積している。II区に多く分布する水溜り状の遺構かもしれない。

15号土塙 (Fig. 10)

1号溝のコーナー部分に接しており、1号溝より先行する遺構である。平面形は不整形を、断面形は二段掘りで浅い壠鉢状を呈する。覆土は黒褐色粘質土、暗灰褐色粘質土を主体として

Tab.1 原遺跡第9次調査土塙一覧表

土塙番号	平面形	断面形	大きさ(cm) 奥行き×巾×深さ	方位	遺物	時代	備考
1	梢円形	レンズ状	350×	N 5°40'W	土師皿、馬蹄	近世	
2	不整隅丸方形	皿形	106×80×10.5	N 10°30'E	弥生式土器片	弥生時代	
3	不整隅丸方形	逆梯形	125×126×26	N 82°W	弥生式土器片		
4	隅丸方形	皿形	320×	N 82°30'W		中世	
5	梢円形	皿形	100×70×	N 8°30'W			
6	梢円形	逆梯形	95×68×25	N 18°30'W		弥生時代	
7	隅丸異方形	舟底形	125×65×33	N 87°W		中世	
8	不整円形	皿形	138×136×17	N 26°W		弥生時代	
9	隅丸長方形	舟底形	114×68×23	N 41°E		弥生時代か?	
10	円形	逆梯形	84×76×37	N 1°E			
11	不整円形	逆梯形	84×72×55	N 81°30'W			
12	不整形	逆梯形	104×58×24	N 17°30'E			
13	隅丸長方形	逆梯形	152×118×42	N 42°E		中世	
14	長梢円形	レンズ状	282×144×33.5	N 79°E			水溜り状
15	不整方形	壠鉢状	170×166×68.5	N 57°30'W	土師器細片		H
16	隅丸長方形	皿形	124×99×17	N 87°E			H
17	円形	レンズ状	118×118×32	N 83°W			H
18	長梢円形	壠鉢状	165×66×32.5	N 25°W			H
19	長梢円形	レンズ状	118×81×13	N 79°30'E			H
20	不整円形	逆梯形	160×94×26	N 33°E			H
21	不整梢円形	壠鉢状	422×320×47	N 18°E			H
22	不整梢円形	壠鉢状	311×192×60	N 49°E			H
23	隅丸長方形	レンズ状	59×43×11.5	N 34°E			H
24	不整隅丸長方形	皿形	116×44×24	N 45°E			H
25	不整隅丸長方形	レンズ状	130×80×20	N 85°30'E			H
26	長梢円形	皿形	292×106×40	N 35°E			H
27	梢円形	皿形	49×38×11.5	N 39°30'W			H

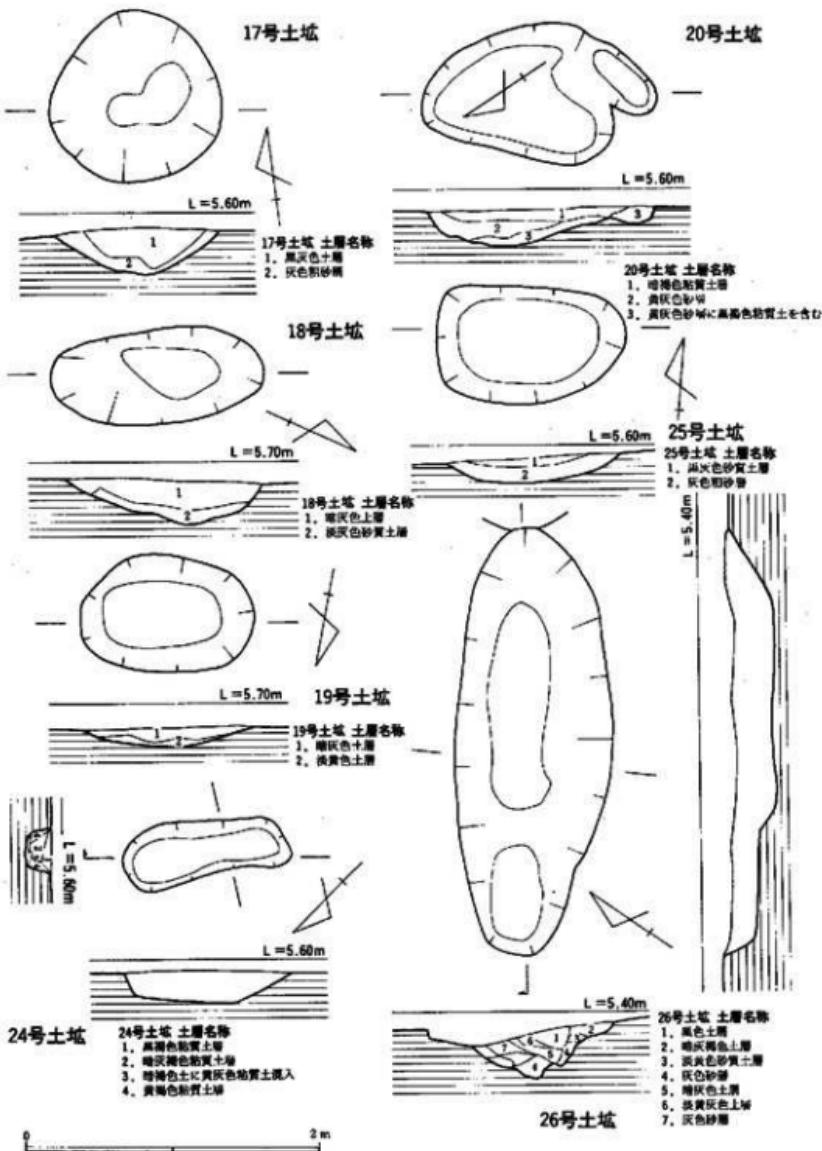


Fig. 12 17号～20号・24号・26号土壤 (縮尺1/40)

いる。遺物は土師器等の破片が出土している。この土壤には7号・8号溝が接続している。両者の覆土は暗茶褐色粘質土であるから、15号土壤とは時期幅があると考えたい。

16号土塁 (Fig. 10)

II区にて検出した。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は浅い皿状である。上層は黒色粘質土、下層は灰色粗砂層である。この土壤もII区に於ける土壤共通の覆土状態を示している。水溜り状の遺構であろう。同様な土壤には17~20・23~27号土壤がある。

21・22号土塁 (PL. 5)

II区の西南隅で検出した。土壤形状は不定形で、壠鉢状を呈するが壠底や壁体は凸凹が著しい。長径は21号土壤が3m、22号土壤が4.5mを測る。覆土は暗黄灰色土、茶褐色土、黒灰色土などさまざまである。遺物は土器細片が出土するのみで、人為的な遺構とは考えられない。

(4) 溝

溝、及び溝状遺構を含めて16条の溝を検出した。1~4号、9号溝を除いては溝状遺構の機能については定かでは無い。

1号溝 (Fig. 13, 14, PL. 10, 11)

東西方向から南北方向に鉤形に曲る溝である。この溝で区画した内側には、堀立柱建物等が存在しているので、本来方形区画を意図した溝と思われる。溝の幅は2.5~5.2m、深さ45~90cmを測り、断面形はレンズ状を呈している。溝底は東から北へ深くなると共に幅も広くなっている。覆土はFig. 13に示したとおり、上層は暗灰色粘質土を主体とし、下層は黒灰色の泥炭質であった。溝下層から底部にかけて各種の遺物が出土した。自然遺物としては松ボックリ、桃の核、菱の実、椿の実、女竹、数珠玉などがある。松ボックリはFig. 14のように溝内の3ヶ所のみに集中しており、3~4本の松が溝の内側に植えられていたことを示している。桃の核なども多いので、果樹として植わっていたものであろう。木製品には漆器椀、下駄、木札、板きれ、杭、槌の子がある。その他、土師皿、壺、明の青磁、李朝の青磁などが出土した。

この溝の南側では9号溝が接続している。切り合ひ関係が不明なことや覆土からみて、1号溝に付属する小溝と思われる。南側のみに二重構造をもつものであろう。

2号溝 (Fig. 15, 16, PL. 12, 13)

南西より北東方向へ流下する溝である。高低差は小さく、南西側が約10cm高い。1号溝と切り合う部分では削平のため消失している。溝の断面形は逆梯形を呈している。幅は1.4~2.1m、現存の深さ34~65cm、現存長約47mを測る。溝覆土の上層は黒色粘質土と暗灰褐色粘質土である。下層は茶褐色粘質土、灰褐色粘質土を主体としている。遺物は溝東側半分の溝底からまとまって出土した。壺、短頸壺、甕、鉢などがある。弥生時代後期前半の土器群である。

3号溝 (Fig. 17, PL. 12~14)

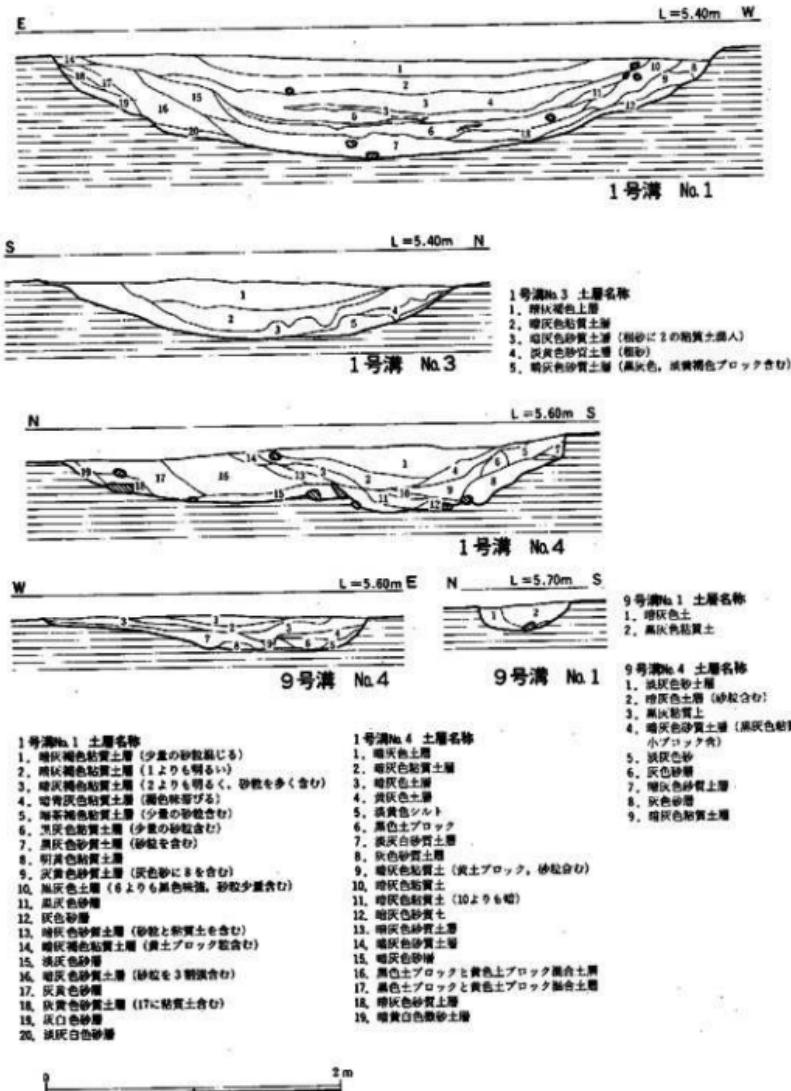


Fig. 13 1号溝土層図 (縮尺1/40)

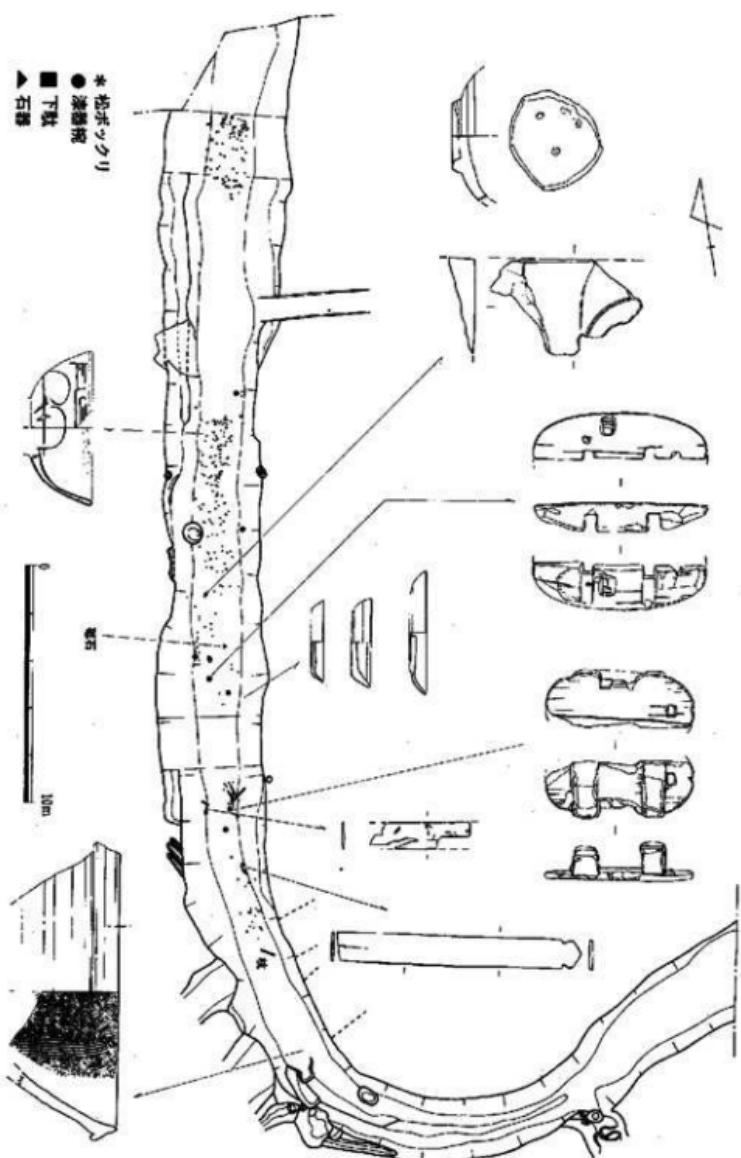


Fig. 14 1号溝内遺物出土状態 (縮尺1/250)

2号溝の南側に平行して走る溝で、やはり南西より北東方向へ流下する溝である。1号溝と交差する部分は削平のため消失している。溝の断面形は西側では逆梯形、東側では浅いV字形を呈している。溝幅は2.5~2.7m、現存の深さは30~55cm、現存長44mを測る。溝底は一定ではなく、水の流下を示す痕跡のため凸凹がある。覆土の上層は黒色粘質土であるが、中層以下は粗砂層や微砂層が大部分を占め、下底部は砂層と黒色粘質土の互層になっている。溝の中層の砂層は厚く約40cmを測るため、相当の水量があったものと思われる。遺物は上層、中層、及び溝底から出土する。中層の砂層からは、ミニチュア土器や勾玉が出土しており、祭祀が行われたことを示している。土器は山陰系の壺や壺及び布留式併行期の壺と器台等が出土した。

4号溝 (Fig. 18, 19, PL. 15~17)

調査区の北西側で検出した。南から北東方向へ流下する溝である。溝の断面形は一定しておらず、西側は片側が3段の逆梯形状、中央部は浅いV字形、東側は逆梯形状を呈している。溝幅は西側で3.45m、中央で5.05m、北側で7.0m、深さは西側で約55cm、中央で87cm、北側で78.5cmを測る。覆土は細く分ければ63層に分離できるが、大きく3層に分けると、第1層～第2層までは暗茶褐色粘質土、暗灰褐色粘質土系で構成される。それより下位は灰白色砂層又は、灰色砂層と黒灰色粘質土との互層になるが、北方向は砂層の厚さが増していく。溝底は一定して

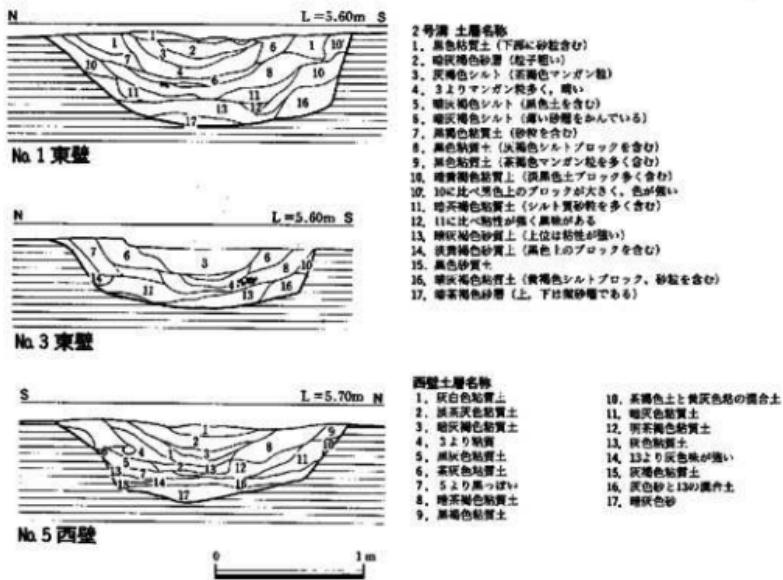


Fig. 15 2号溝土層図 (縮尺1/40)

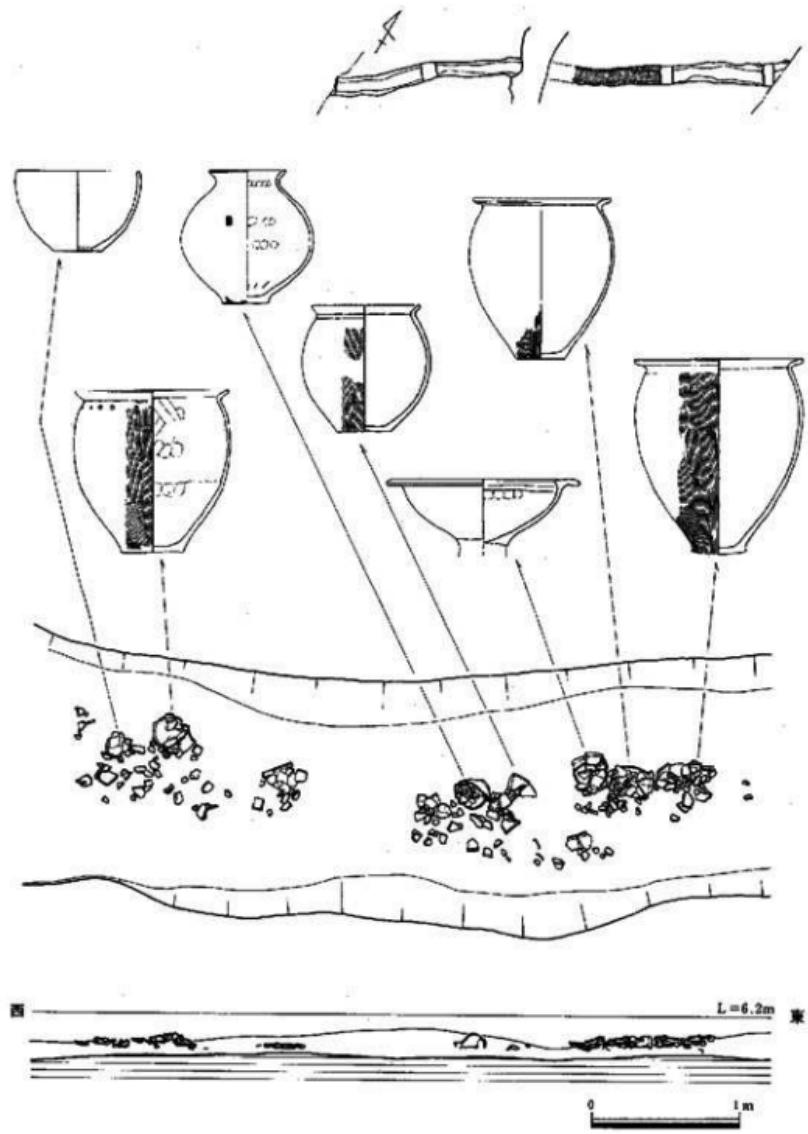


Fig. 16 2号碑遺物出土状態 (縮尺1/40)

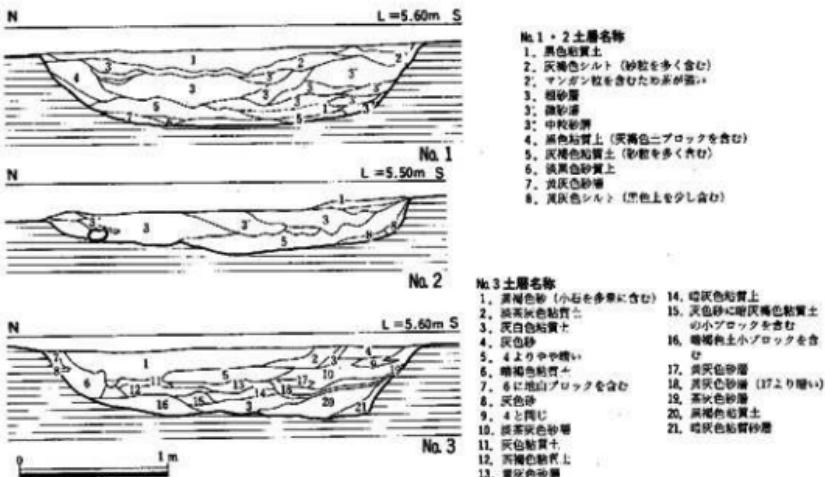


Fig. 17 3号溝断面土層図 (縮尺1/40)

おらず凸凹が著しく、数条もの水流の跡をとどめている。西側ではそのために構壁と底に青灰色粘土と黄褐色粘土を貼り付けて修復を何度も行っている。この溝から出土する遺物の時期は、弥生時代前期から古墳時代初頭までであるが、溝底部から出土する土器には土師器は無い。土師器が出土する層は第15層までである。溝北東部の第8層の黄褐色粗砂層、及び第15層の暗灰色砂層上では、溝の東側肩から投棄された状態で一群の土師器を出土した。これにはミニチュア土器も伴っており、溝祭祀が行われたものと思われる。器種には壺、甕、器台、高壺、小型丸底壺、ミニチュア土器がある。弥生式土器は土師器が出土した層の下位から出土し、特に溝底にある数条の水路跡にへばり付いている。又、溝底にある窪み状のPitにはやはり祭祀を行つており、小形の甕、大形の甕、器台が出土している。この溝は金屑川から水を引くための導水路の役目を果していると考えられる。弥生時代後期初頭に築かれた後、砂層の堆積が著しいため導水路としての機能を短期間に失い、単なる水路化したものであろう。古墳時代の祭祀遺物の上層には砂層が存在しないので、古墳時代初頭の祭祀が行われた直後には埋没してしまったものと思われる。

5号溝 (Fig. 4)

7号掘立柱建物の北側梁行に沿って検出した東西方向の溝である。全長4.3m、溝幅30cm、深さ6cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土で、3号・7号掘立柱建物の柱穴覆土と相違がない。7号建物との位置関係から雨落ち溝的な役目をもつものと思われる。遺物の出土はない。

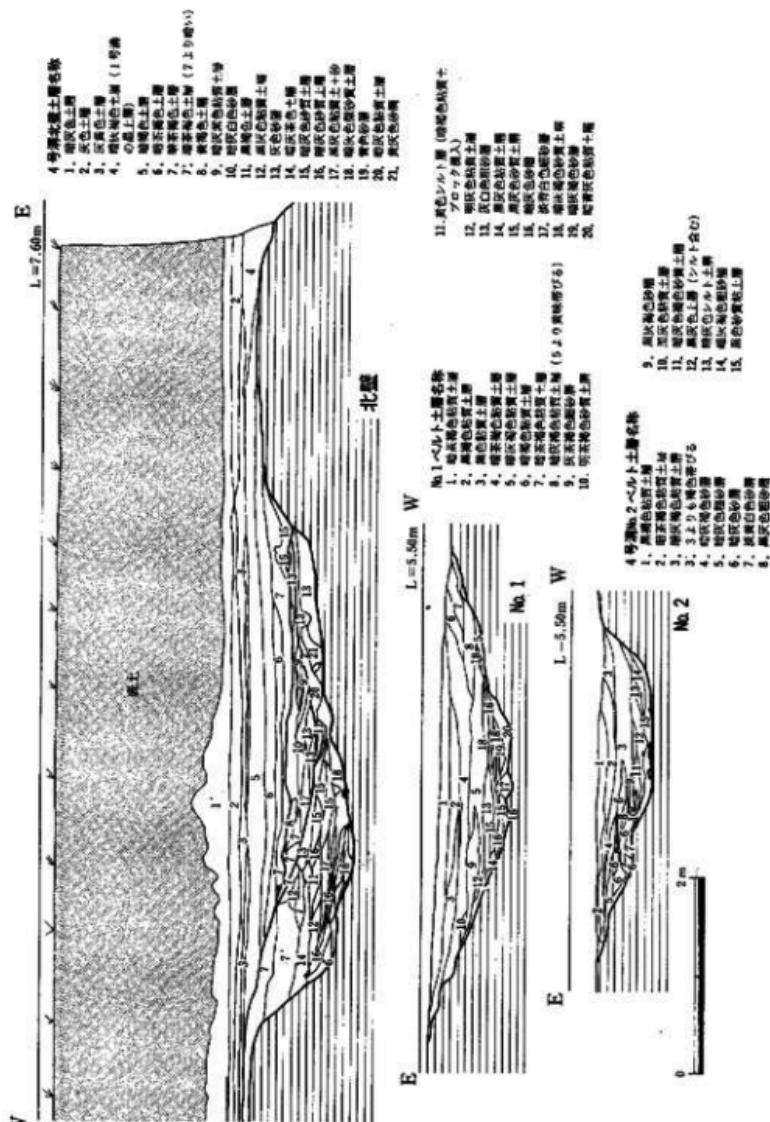


Fig. 18 4号 sondage layer diagram (Scale 1/60)

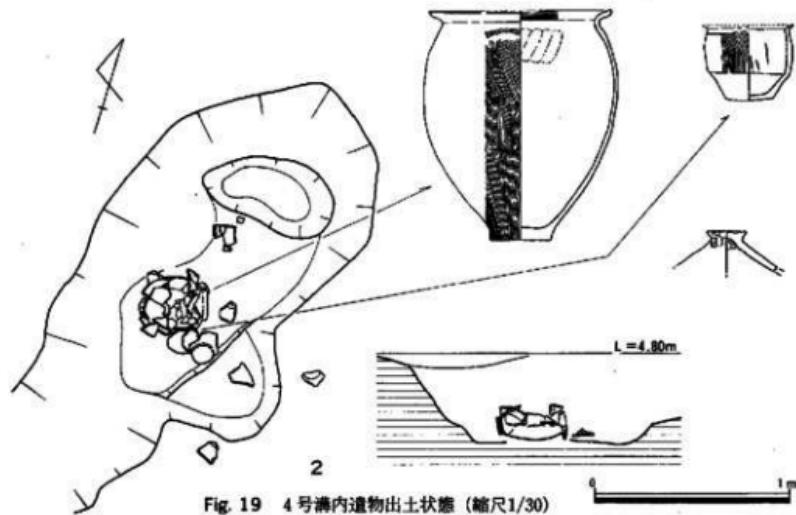
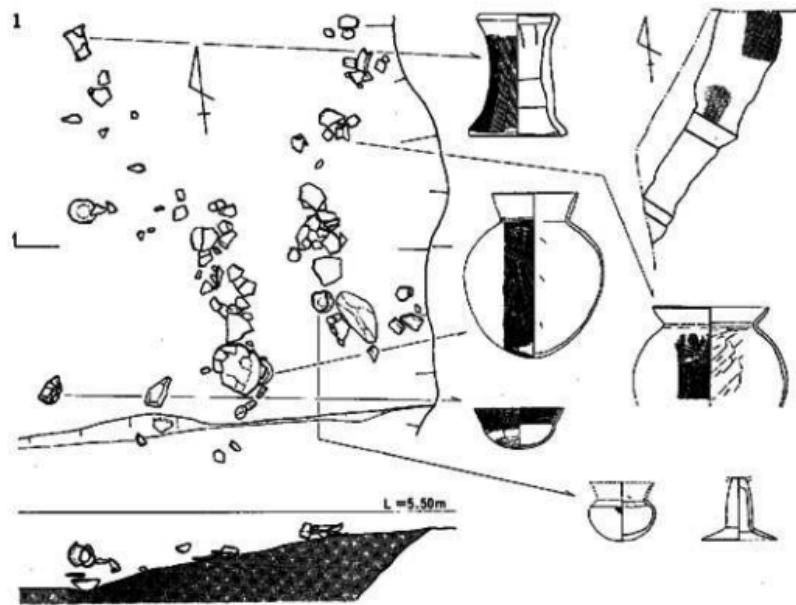


Fig. 19 4号溝内遺物出土状態 (縮尺1/30)

6～8号溝 (Fig. 4, 20)

溝幅は6号が40cm、7号が110cm、8号が80cm、深さは6号が6cm、7号が31cm、8号が44cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土か、又は茶灰色粘質土である。溝全長は6号が3.2m、7号が3.5m、8号が4.7mである。機能については不明。中世の時期であろう。

9号溝 (Fig. 4)

1号溝の南側に接続しており、1号溝と有機的な関係をもっている。矩形に曲がる溝で、幅は0.6～1.8mを、深さは20～25cmを測る。覆土は暗灰色、又は黒灰色粘質土である。1号溝との接合部は溝幅が広く、溝底は凸凹している。1号溝への導水路とも考えられる。或いは館周辺では畑作、又は水田經營が行われる例もあるので、農耕に関係する用水路とも考えられる。

10～15号溝 (Fig. 4)

溝幅、及び深さも一定しておらず、しかも13号と15号に至っては二つの溝に分岐するなど溝としての機能には疑問がある。13号・15号溝の覆土は黒褐色土と黄褐色粘質土の混合土である。10～12号溝の覆土は黒灰色砂質土である。

(5) 掘立柱建物

著しい削平のため遺構の遺存状態は良好ではない。建物は合計9棟検出したが、主軸方向では二つのグループに分けられる。Aグループは1号・2号・4号・7号・9号建物で、ほぼ南北方向の建物である。Bグループは3号・5号・6号・8号建物で、東西方向の建物である。Aグループは中世に、Bグループは弥生後期～古墳時代に比定できる。

1号掘立柱建物 (Fig. 21, PL. 6)

2号建物と重複しているが先後関係は不明。1号・2号建物は建て替えによる重複である。梁行2間、桁行6間の側柱だけの建物で、南側梁行は17.6尺、北側梁行は18.5尺、桁行は西側28.6尺、東側は28.4尺である。南側の梁間が狭く、歪みのある建物で、主軸方向はN 4°Eである。柱穴径は35～45cm、柱根径15～18cm、深さ30～60cmを測る。

2号掘立柱建物 (Fig. 21, PL. 6, 7)

梁行2間、桁行3間の側柱だけの建物である。梁行は5.64mで、各柱間平均は9.4尺、桁行は8.58m、各柱間平均は9.5尺である。主軸方向はN 1°Eである。覆土は1号建物同様に暗茶褐色

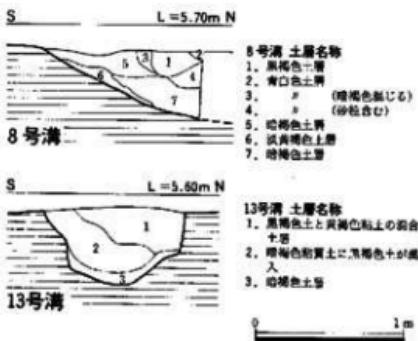
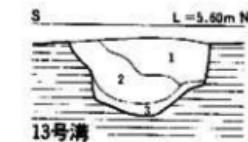


Fig. 20 8号・13号溝土層断面図 (縮尺1/40)

8号溝 土層名稱
1. 黒褐色土層
2. 白色土層
3. p (暗褐色灰じる)
4. p (砂粒含む)
5. 暗褐色土層
6. 黄褐色土層
7. 暗褐色土層

13号溝 土層名稱
1. 黒褐色土と黄褐色粘土の混合土層
2. 暗褐色粘土に黄褐色土が混入
3. 暗褐色土層



0 1m

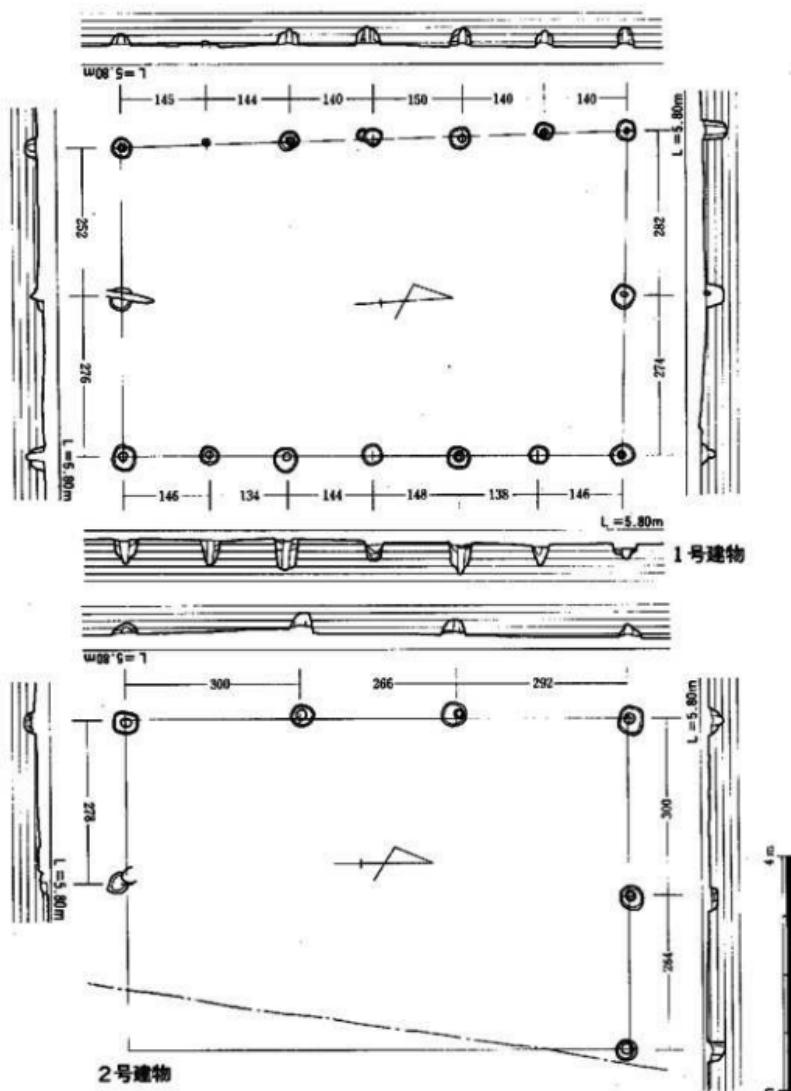


Fig. 21 1号・2号掘立柱建物 (縮尺1/100)

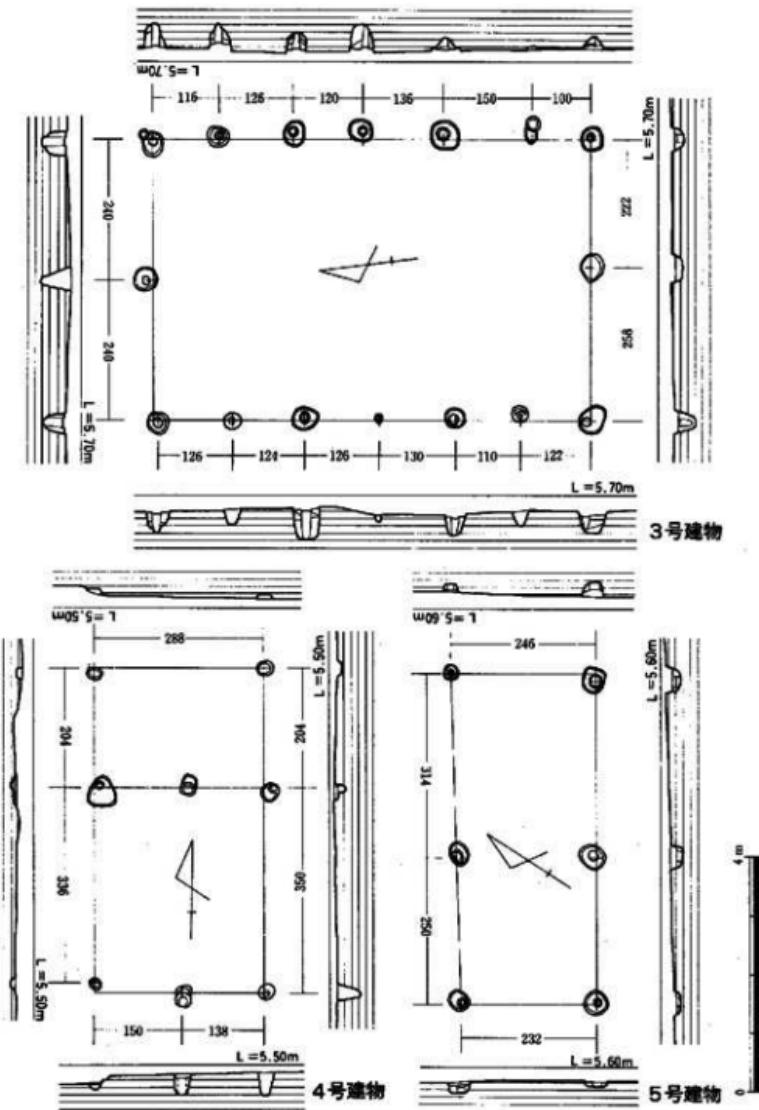


Fig. 22 3号～5号据立柱建物 (縮尺1/100)

粘質土である。柱穴径34~48cm、柱根径18~19cm、深さ10~38cmを測る。

3号掘立柱建物 (Fig. 22, PL. 7)

北側に1間幅の庇が付設する梁行2間、桁行1間の建物である。主軸方位をN 7°Eにとる。梁行は4.8m、桁行7.47m、庇幅2.04mを測る。梁間平均は4.8尺である。柱穴径50cm、柱根径16cm、深さ44cmを測る。覆土は黒灰色粘質土である。主軸方位は中世の建物群とほぼ同一であるが、覆土が相違しており年代幅はあるものと思われる。

4号掘立柱建物 (Fig. 22, PL. 8)

梁行2間、桁行6間の側柱だけの建物である。主軸方向をN 1°Wにとる。梁行は2.88m、桁行は東側5.5m、西側5.4mである。各柱間平均は梁間4.8尺、桁間3尺である。覆土は暗茶褐色粘質土である。柱穴径は48cm、柱根径は16cm、深さ50cmを測る。

5号掘立柱建物 (Fig. 22, PL. 8)

梁行1間、桁行2間の建物で、主軸方位はN 5 7°Eにある。梁行は南西側が2.31m、北東側が2.46m、桁行は5.64mを測る。桁間平均は9.4尺である。柱穴径4.4cm、柱根径22cm、深さ26cmを測る。覆土は黒色粘質土である。

6号掘立柱建物 (Fig. 23, PL. 8)

1号溝に切られているため正確な規模は不明。梁行1間+ α 、桁行2間+ α である。主軸方向はN 35°30'Wである。梁間は2.46m、桁間は5.07mを測る。桁間平均は8.5尺である。柱穴径52cm、柱根径21cm、深さ34cmを測る。覆土は黒灰色粘質土である。

7号掘立柱建物 (Fig. 23, PL. 7)

4号・9号掘立柱建物と切り合っているが、先後関係は不明である。梁行2.91m、桁行は東側4.44m、西側4.17m、桁間平均7.2尺を測る。柱穴径38cm、柱根径16cm、深さ48cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。

Tab.2 第9次調査掘立柱建物計測表

(単位: cm)

番号	規格 桁×梁	方向	柱 行		梁 行		方位	床面高 (cm)	備考
			東	西	北	南			
1号	6間×2間	南北	東 852	西 858	東 28.4	西 28.6	南 528	北 555	南 17.6 北 18.5
									N 4°E 46.3
2号	3間×2間	南北	858		28.6		南 278	北 564	南 9.2 北 18.8
									N 1°E 36.1
3号	1間×2間	南北	東 747	西 738	東 24.9	西 24.6	480		南 16
									N 7°E 35.6
4号	2間×6間	南北	東 565	西 540	東 18.5	西 18	288		南 9.6
									N 1°W 15.8
5号	2間×1間	東西	564		18.8		東 246	西 231	東 8.2 西 7.7
									N 57°E 13.5
6号	2間+ α ×1間+ α	東西	東 507		東 16.9		246		東 8.2
									N 35°30'W 12.5
7号	2間×1間	南北	東 444	西 417	東 14.8	西 13.9	291		南 9.7
									N 11°E 12.5
8号	1間×1間	東西	255		8.5		231		南 7.7
									N 60°E 5.9
9号	1間+ α ×2間	南北	486		16.2		東 201	西 240	東 6.7 西 8
									N 83°W 10.7

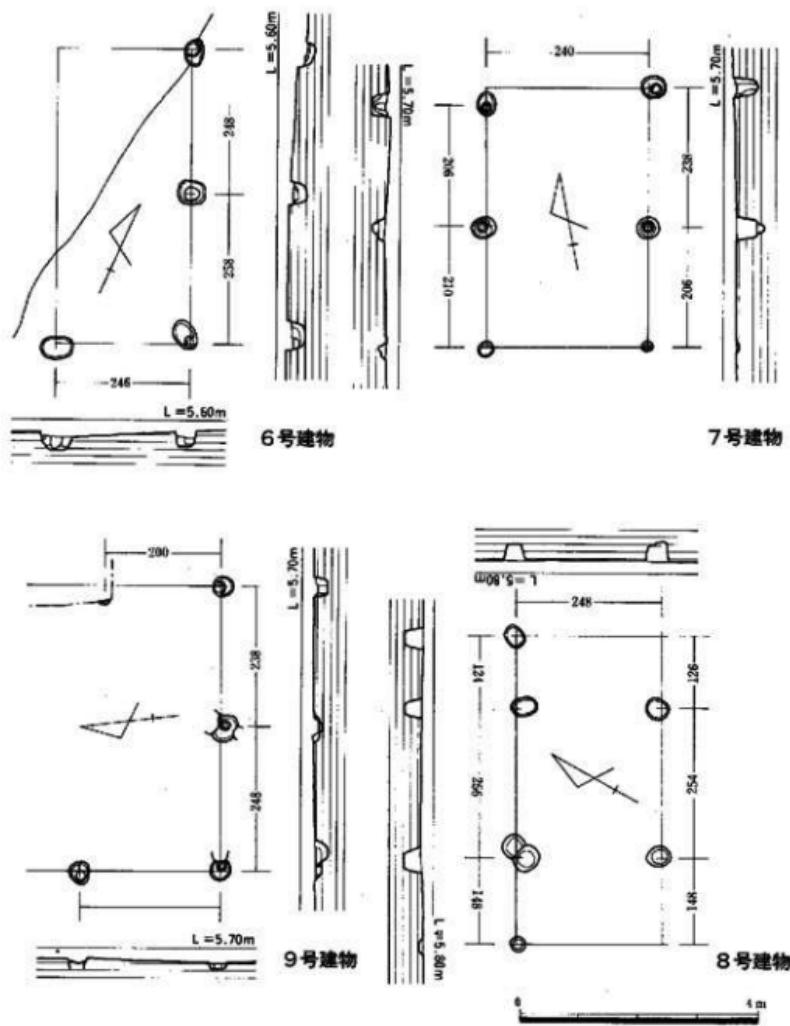


Fig. 23 6号～9号掘立柱建物 (縮尺1/100)

8号掘立柱建物 (Fig. 23, PL. 8)

著しい削平を受けている。梁行1間、桁行3間の規模であるが、北東側と東側の各1間分は

幅が狭いため、建物の両側に庇が付設した構造が考えられ、主体となる1間×1間の建物は梁行2.55m、桁行2.31mを測る。北東側の庇幅は1.24m、南西側は1.48mである。覆土は黒灰色粘質土である。

9号掘立柱建物 (Fig. 23)

境界地にあるため規模は不明。4号掘立柱建物と切り合うが、先後関係は不明である。梁行2間、桁行1間+ α の側柱だけの建物である。梁行2.4m、桁行4.86m、梁間平均7.3尺を測る。主軸方位はN83°Wである。柱穴径は44cm、柱根径16cm、深さ24cmを測る。覆土は暗茶褐色粘質土である。建物の復元規模は4号建物と同じく、2間×6間の規模と考えられる。

3. 遺物各説

遺物は主として1号～4号溝から出土した。住居跡や土壤からの出土は少く、これらの土器は細片にすぎないため図示し得ない。遺物の少ない遺構については遺構各説の中で、或る程度の時期を考えているので参考にされたい。

(1) 表土出土遺物 (Fig. 25)

耕作土、及び床土の除去作業に際して、近世陶磁器や中国陶磁器が出土している。

青 磁

碗(5) 遺構面出土。底径6.0cmを測る。青緑色釉を厚目に施し、外底部はカキ取っている。体部外面には片彫りの蓮弁を施す。内底部中央に印文を施すが図柄は不明。見込には沈線がある。胎土は灰色である。焼成は良好で、外底部は茶褐色を呈している。

染 付

碗(28) 伊万里系統である。18世紀のくらわんか茶碗で、焼成が甘いため灰色釉は風化している。釉は外底まで施す。疊付はカキ取りである。体部外面には草花文や雲文を施し、体部下位に1条と高台外面に2条、内面見込に1条の團線を施す。

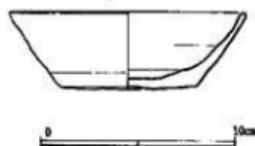


Fig. 24 1号土壤墓出土遺物 (縮尺1/3)

(2) 土壤墓出土遺物 (Fig. 24, PL. 20)

土師器

壺 口径12.0cm、器高4.0cm、底径6.9cmを測る。ヘラ切りの底部である。体部はヨコナデ調整、内底は渦巻状のナデである。胎土に砂粒を含む。黄褐色を呈する。

(3) 1号溝出土遺物 (Fig. 25~27, 37, PL. 18~20)

白 磁

碗 (1・7・8) 1は口径18.0cmを測る。体部は丸味を持ち、口縁端部は丸くおさめる。ややくすんだ乳白色釉を厚目に施すが、焼成が甘いため溶けきっていない。又、小さな気泡がある。陶器質で、胎土は灰白色である。7は底径6.6cmを測る。玉縁の口縁部を有した碗である。内面はやや黄味を帯びた灰白色釉を施す。内底見込みに沈線が1条巡る。8は底径7.7cmを測る。灰色を帯びた乳白色釉を厚目に施す。気泡が多い。疊付と外底は輪状に攝取っている。胎土は二次熟のため褐色を呈す。焼成は軟質である。1・8は明代のもので、同一個体の可能性がある。

四耳壺 (10) 底径7.7cmを測る。緑味を帯びた灰白色釉を施す。高台、及び高底部は露胎である。胎上は灰白色である。

青 磁

碗 (2~4・6・9・11) 2は口径14.9cm、現存器高6.0cmを測る。体部外面上位に雲文、下位に退化した蓮弁を施している。体部下位と内面見込みに沈線を施す。灰緑色釉を厚目に施す。胎土は灰色で、釉は焼成が甘いため溶けきっていない。3は高台径6.5cmを測る。緑灰色釉を施すが、外底と疊付は露胎である。内底にはヘラ描きの花文と櫛描き文を施す。胎土は灰白色である。4は底径5.7cmを測る。緑灰色釉を高台外面まで、やや厚目に施す。外底は露胎である。内底には片彫りの文様を施す。内底の貫入は粗い。6は高台径5.5cmを測る。灰緑色釉を高台外面まで施す。外底は露胎で、内底には同心円状の貫入がある。胎土は灰青色である。6は高台径4.6cmを測る。青灰色釉を、高台外面まで厚目に施す。築蓮弁の体部をもつ器形である。貫入は粗い。胎土は灰青色である。11は高台径7.0cmを測る。疊付は尖り氣味である。外面のカンナ目は粗い。釉は白濁色であるが、胎土が灰色のため灰濁色を呈する。外底まで施すが、外底と高台内側は攝取っている。内底には、3ヶ所の粘土目の目痕がある。2は明代、11は李朝の青磁である。

器台 (12) 高坏とも思われるが、器台として報告する。脚部は円柱状を呈し、径は3.5cmである。現存高2.9cmを測る。緑灰色釉を薄目に施す。釉が溶けきっていない。陶質で、胎土は灰白色である。

陶 器

鉢 (13) L字形に屈折した口縁部を有する。内面下半に灰釉が施される他は露胎である。胎土に砂粒を含む。ヨコナデ調整である。中国製品である。

擂鉢 (24・25) 褐釉陶器である。内外面は水引き調整である。24の内面には7本単位の条線を施す。内底は使用のため磨滅する。25の内面には、11本単位の条線を施す。いずれも胎土に砂粒を含み、焼成良好。24は暗茶褐色を、25は茶褐色を呈する。備前焼の第IV期に属する。

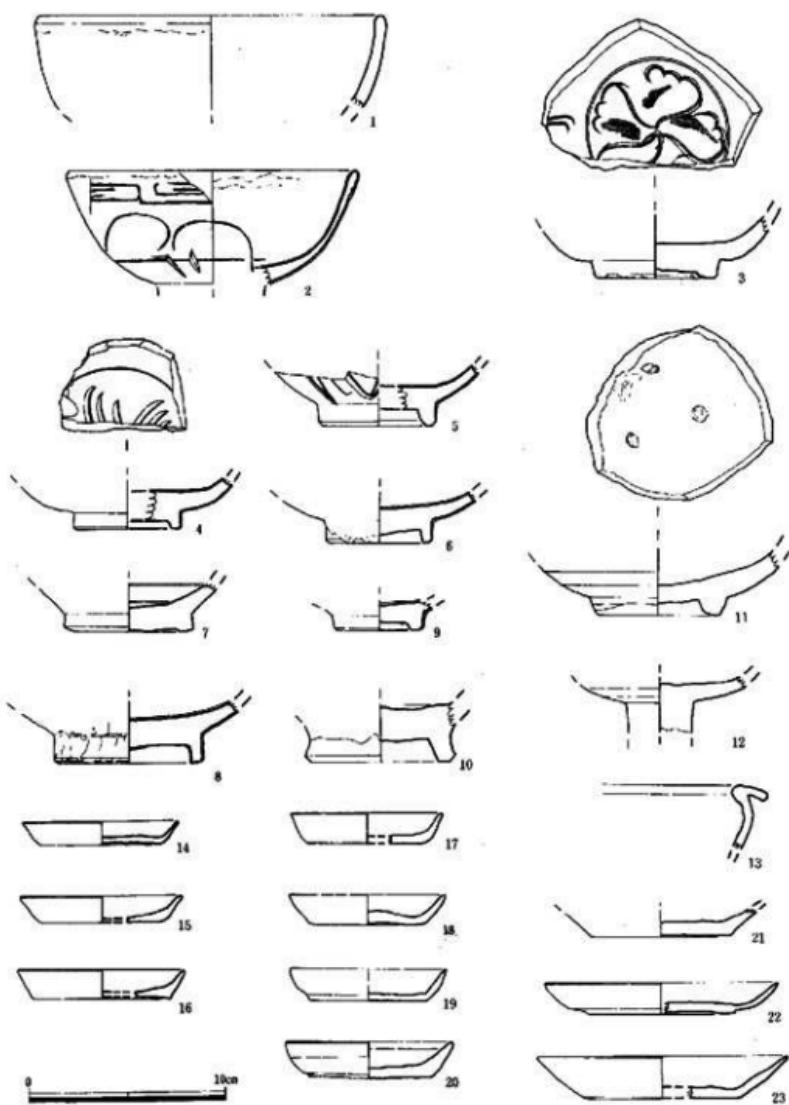


Fig. 25 1号溝出土遺物 (縮尺1/3)

1号溝

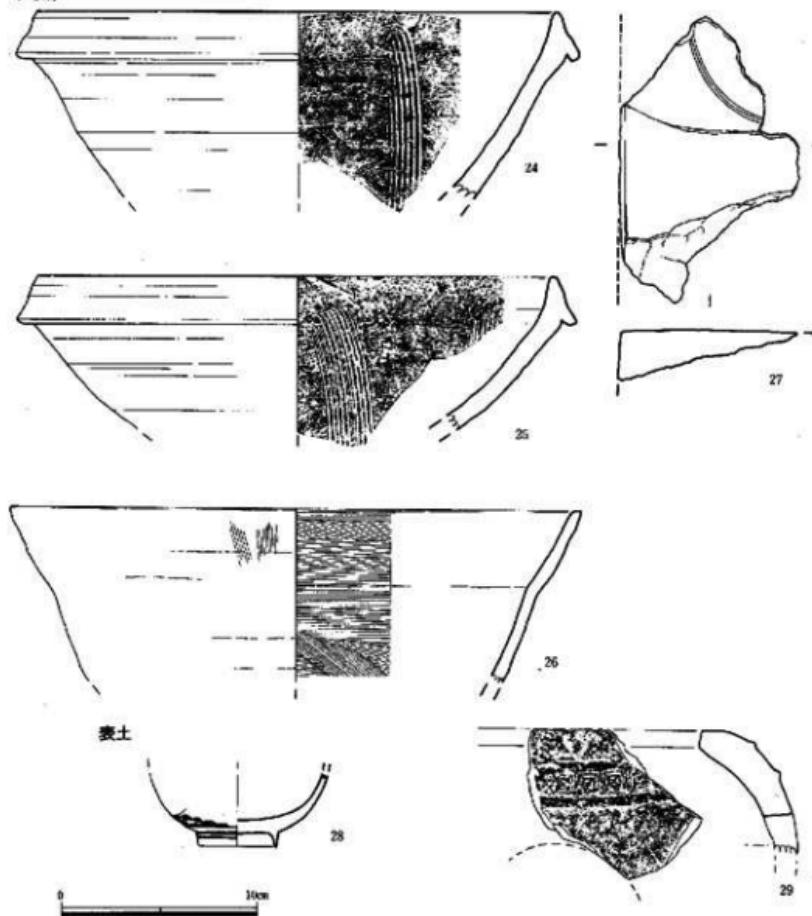


Fig. 26 1号溝、表土出土遺物（縮尺1/3）

土師質土器

捏鉢（26） 口径29.4cm、現存高9.0cmを測る。体部と口縁部の境は内側に稜を有している。内面はヨコハケ調整、外面はヨコナデ調整である。外面に媒が厚く付着している。焼成は良好で、褐色を呈する。

瓦質土器

火舟(29) 体部は丸味をもち、口縁部が大きく内寄する。体部中位に円形又は、半円形の透しがある。外面上位には2本の突帯があり、その間に雷文の印文を施す。外面は黒色研磨である。胎土に砂粒を含み、胎土は暗茶褐色を呈する。

土師器

皿(14~20) 全て糸切り底である。口径は7.8~8.5cm、器高1.2~1.6cmを測る。底径と口径比は大きくなない。いずれも胎土に砂粒又は、微砂を含む。18~19の胎土には雲母粒子を含む。14・15・17~20は黄灰色、16は黄褐色である。

坪(21~23) 全て糸切り底である。22は器高が低く、口径12.0cm、器高1.6cmを測る。22・23は底径と口径比が大きな器形である。23は口径13.0cm、器高2.2cmを測る。21は口径12.0cm、器高1.6cmを測る。胎土に砂粒を含むが、23には雲母粒子を含む。21・23は灰黄色を、22は暗黄灰色を呈する。

土製品

土錘(120) 有孔土錘で、全長3.7cm、最大幅0.9~1.1cm、孔径0.3cmを測る。胎土に砂粒を含む。

石製品

板碑(27) 残片である。碑面は面取り整形されており、梵字を囲む篆研彫りの円形圖帶が残っている。大粒砂岩製である。外面に媒が付着している。

木製品

杭(30) 現存長56.4cm、中程の径3.2~3.3cmを測る。先端から29cmの長さまで丁寧なケズリを行い先端部の尖銳化を行う。他の部分は節を丁寧に削る。材質は不明である。

木樅(31) 腐植が著しいため柄の取り付け部分が不明だが、柄穴が無いので枝を柄部として利用したものだろう。全長19.8cm、最大幅6.5cm、下端径5.0~5.5cmを測る。両端の小口が使用されているが下端は刃物による調整痕がある。両端小口部は黒色に変色する。材質は不明である。

下駄(35~37) 35・36は連子下駄、37は差歎下駄である。35は現存長17.7cm、現存幅6.5cm、台部の厚さ1.5cm、齒の現存高0.8cmを測る。緒穴はノミによる穿孔で、隅丸方形を呈す。径1.5cmを測る。台部表面は炭化し、全体に摩滅が著しい。36は差歎露卵下駄である。現存長18.7cm、台部最大幅7.0cm、厚さ0.9cm、齒の現存高3.6cm、厚さ3.2~3.7cm、現存幅7.0~7.6cmを測る。齒の幅が台部幅よりも大きい。緒穴はノミによる穿孔である。前緒穴は1.2×1.5cm、後緒穴は1.2×1.6cmである。37は長さ22cm、現存幅6.0cm、台部最大厚3.7cm、齒部の柄は1.4~1.7cm、深さ2.3cmを測る。胴部は丸味をもち、先端が細くなる台部で、台底縁辺は面取りしている。台表の中央に2ヶ所の方形の楔穴がある。長さ1.3×1.3cmを測る。緒穴は二段に

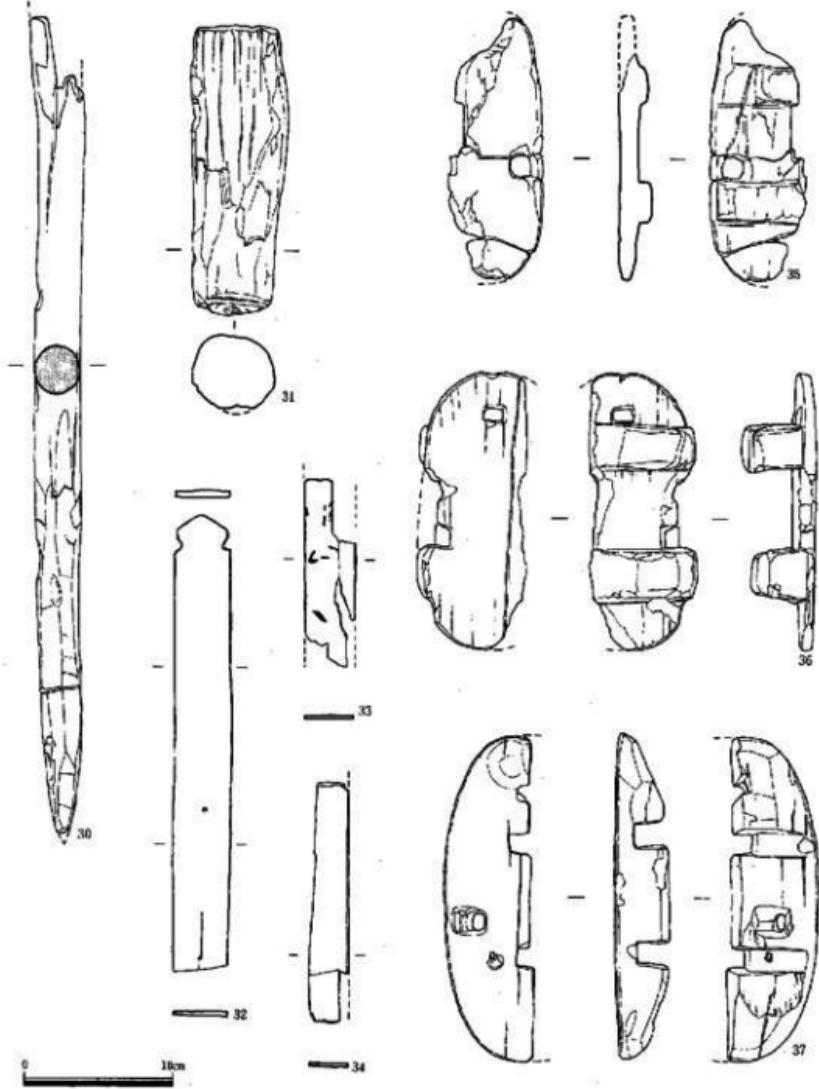


Fig. 27 1号沟出土遗物(木器) (缩尺1/4)

なっており、一段目の形状は方形である。穿孔穴の形状は前緒穴が円形、後緒穴の形状は隅丸長方形である。前緒穴は長さ1.4cm、径1.1cm、後緒穴は $2 \times 2.4\text{cm}$ 、径 $0.8 \times 1.2\text{cm}$ である。後緒穴の下に補修孔がある。これは鉄製釘を打ち込んだものである。材質は不明である。

呪 隅

墨書き木札（32～34） 33は墨痕が残るが字体は不明である。32は墨痕が消え、墨書き部分のみが浮き出している状態である。字体を判読するのは困難である。圭頭を作り出し、その直下に梵字を印している。字体には「南無……」や「鬼」字の他、星形記号が認められる。木札の下端は切り揃えられるが、2ヶ所に釘痕が残っており門口などに打ち込まれていたものと思われる。33の現存長12.8cm、幅3.4cm、2の長さ31.6cm、幅3.9cm、4は現存長16.4cm、現存幅は2.8cmを測る。

漆 器

いずれも破片であり、且つ保存状態が悪いため焼、又は皿の区別はつかない。個体数は約10点あるが、その内、碗と考えられるものは3点である。漆塗布の方法は同じであるが、大部分は外側が黒漆、内面は赤漆である。1点だけが、外側が赤漆塗布である。彩文は内面黒漆塗布後、赤漆によって草花文を描くものが1点ある。

自然遺物

溝内から多数の自然遺物が出土した。例挙すると、最多を占めるのが松ボックリである。個数は約408点にのぼる。その他果実類としては桃核、梅核、菱の実、数珠の実等がある。又、女竹（綾竹）を多く検出し、孟宗竹もわずかに出土した。松ボックリは、溝底の3ヶ所に集中しており、溝内側に少なくとも3本の松の木が存在した事になる。更に女竹の集中する部分もコーナー部に限られるため館内の植生を考える資料となり得る。

(2) 2号溝出土遺物 (Fig. 28～30, 37, PL. 21～23)

数点の弥生時代前期～中期の遺物を除くと、すべて後期のもので、器種は壺、甕、鉢がほとんどである。

弥生式土器

壺（39～46・63） 39はくの字形に外反する口縁部と丸味を帯びた胴部を持つ。口径12cm、器高20.6cm、胴部最大径は中位にあり、径は20.2cmを測る。外面はタテハケを施した後ナデ消し、内面はナデ調整で仕上げている。また内面には指圧調整痕が残り、底部には擦痕が数条確認できる。全体に淡黄褐色を呈する。前期の土器である。40・41は逆L字形に屈曲する口縁部と直線的に立ちあがる頭部を持つ。40は胴部下半を欠いているが、復元口径11.0cm、現存器高10.6cmを測る。41は口頭部の破片で、復元口径20.6cmを測る。41は頭部に三角突包を1条貼付し、40に較べると口縁部の屈曲が鋭く、長い口縁部を持つ。外面の調整は40がタテハケ、41

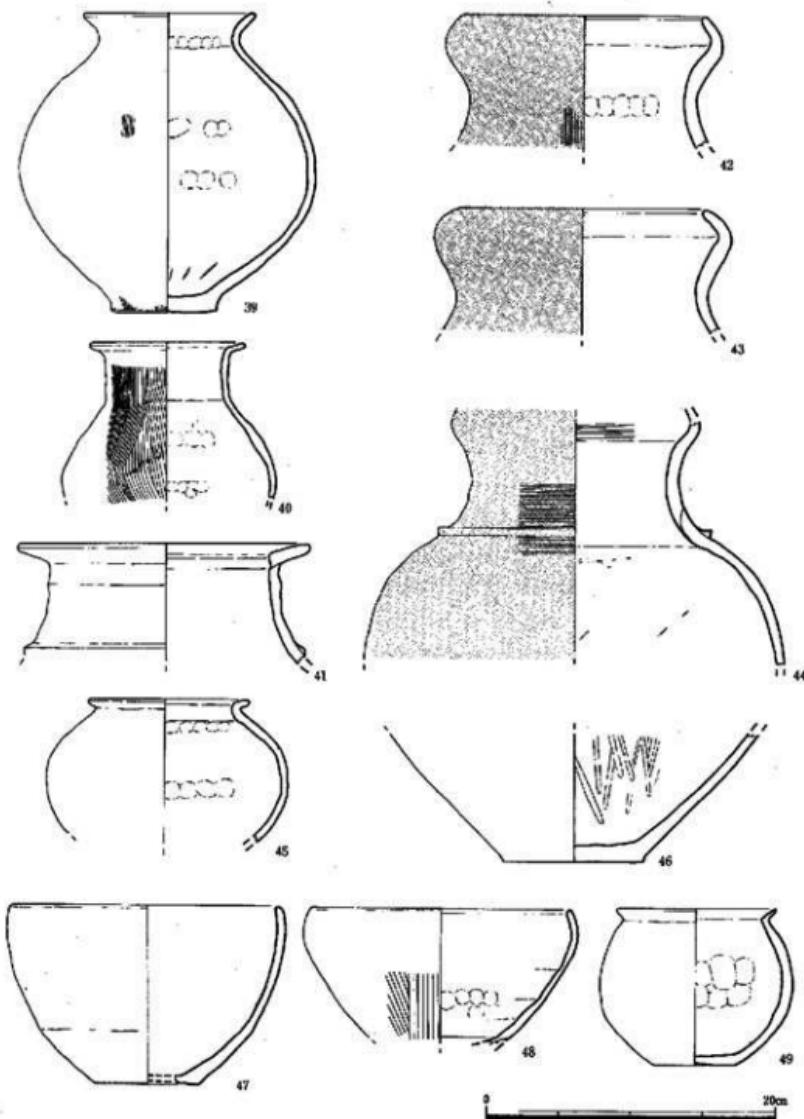


Fig. 28 2号墓出土遗物 (缩尺1/4)

は磨滅のため不明である。内面はナデ調整で、40の内面には指圧痕を残す。40は淡橙色、41は淡黄褐色を呈する。焼成は40が良好で、41はやや軟質である。40・41共砂粒を含む。42～44は袋状口縁を持つもので、42・43は口頸部、44は口縁部を欠いた胴上半分の破片である。外面に赤色顔料を塗付している。復元口径は15.0～17.0cmで、3点ともほぼ同じ形態であるが、43がやや内弯度が強い。また、44は肩部に断面三角形の突帯を一条貼りつけている。調整は42が外面タテハケ、43はナデ、44はハケ状施文具によるヨコナデ調整である。内面は口縁部にヨコナデを施している他は、いずれも一部に指頭圧痕を残したナデ調整である。全体的に44の土器が最も作りが丁寧である。42・44は第4層の黒色土から、43は第2層から出土している。45は胴の張った短頸壺で、口径11.6cmを測る。短い口縁部は強く外反する。器厚は0.6～0.8cmを測り、この器形の土器としてはやや厚い。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。黄褐色を呈する。46は底径10.0cmを測る。壺の底部片で、外面は丁寧なナデ、内面は板状工具によるナデで仕上げている。淡黄褐色を呈する。第4層から出土した。63は鉢になる可能性もある。胴上半部を欠損し、底径7.0cmを測る。調整は外面はタテハケで、内面はナデ調整である。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

鉢(47, 48) 内弯気味に立ち上がる体部を持つ。47は丸味を帯びており、口径19.0cm、底径7.4cm、器高12.5cmを測る。48は口縁直下まで直線的に外傾し、口縁部は緩やかなカーブを描き内弯する。復元口径18.8cmを測る。調整は47が内外面共に丁寧なナデで、外面に黒斑がある。48は外面体部下半がタテハケ調整で、他の部分はナデである。47・48共に内面に指圧痕を残す。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。47は溝底の土器溜から、48は第3層から出土した。

甕(49～57, 59～61) 49・57は第2層、61は第5層、その他はすべて土器溜からの出土である。土器溜から出土した甕はくの字状の口縁部を呈する。長胴のAタイプ(50～55)と、Aタイプに比べ口縁部が短かく器高が低くなるBタイプ(59, 60)に分れる。Aタイプの甕は口径21.6cm～27.7cm、器高24.8cm～30cm、底径8.4cm～9.8cmを測る。口縁部の形態により更にa, bの二種に分れる。a(50, 52)は、口縁部がくの字形に外反し、頸部内面の屈曲部がシャープである。b(51, 53, 54)は、aに較べ口縁部の立ち上がりが弱く、L字形に近いもので、頸部内面の屈曲はゆるやかである。55は口縁部立ちあがりは強いが、内面の屈曲はゆるく、丸味を帯びbタイプに近いものと思われる。また、これらの甕は胴部の最大径が上位にあり、口縁部のすぼまりが強いものと、最大径が中位にあり、すぼまりの弱いものに分れる。aタイプの甕は後後に属する。外面の調整は磨滅しているが、他はタテハケ調製である。内面は54がタテハケ調整である。他はナデ調整で、指圧痕を残す。Bタイプの甕は胴部最大径が中位にある。21は口径14.8cm、器高17.0cm、底径7.8cmを測る。調整は外面はタテハケ調整で、一部ナデ消している。内面はナデ調整で、指圧痕を残している。色調はA・B共淡黄褐色を呈し、焼成は、53・54が良好で、他はやや軟質である。胎土には砂粒を含んでいる。56・51は第2層か

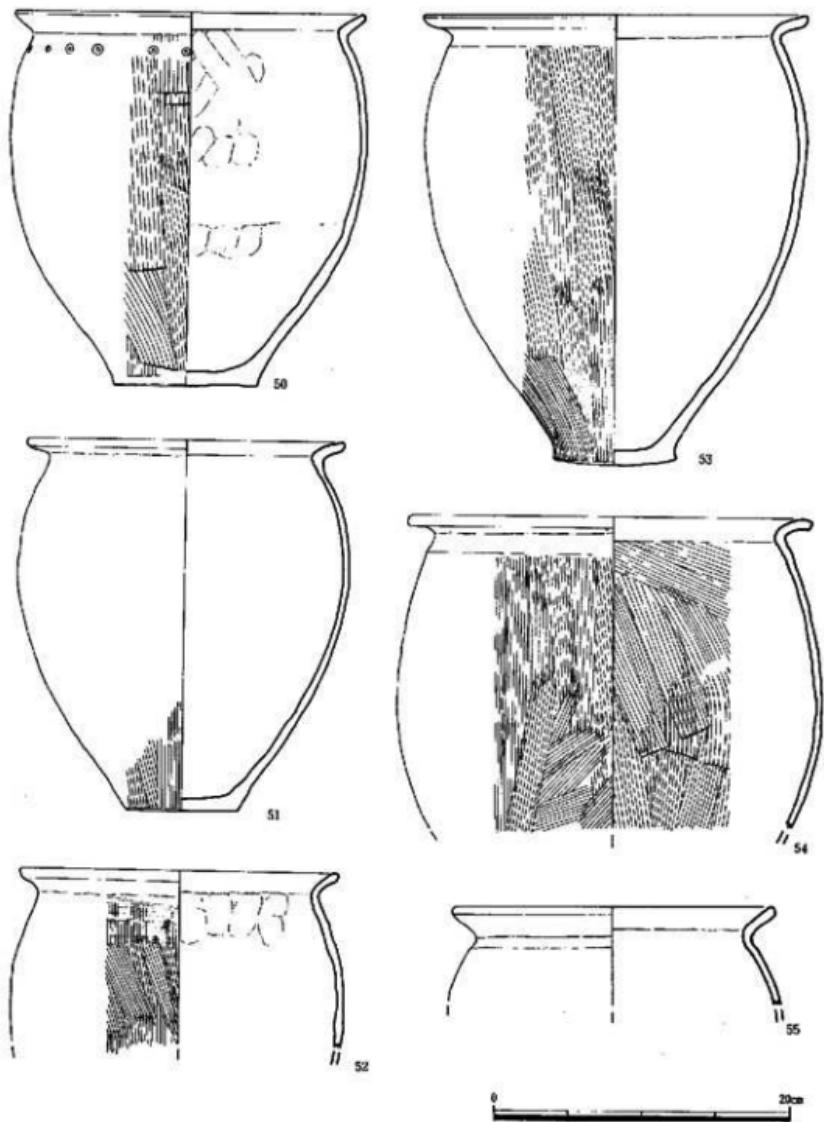


Fig. 29 2号溝出土遺物 (縮尺1/4)

うの出土である。56は逆L字口縁で、頸部は直線的に立ち上がる。内外面共に磨滅しており、調整は不明である。淡橙色を呈する。57は先に述べたBタイプに属するもので、復元口径18.2 cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はナデである。明橙色を呈し、焼成は甘い。61は臺の底部破片である。底径9.2cmを測る。外面タテハケ、内面ナデ調整である。淡黄褐色を呈する。

高坏(58) 逆L字形の口縁部と半球形の体部を持つ。復元口径26.4cmを測る。内外面共にナデ調整で、明赤褐色を呈する。土器溜から出土した。

器台(62) 器壁の厚い小型の臺である。上半分を欠損しており、現存器高6.4cm、底径10.5 cmを測る。内外面共に指圧調整で、黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

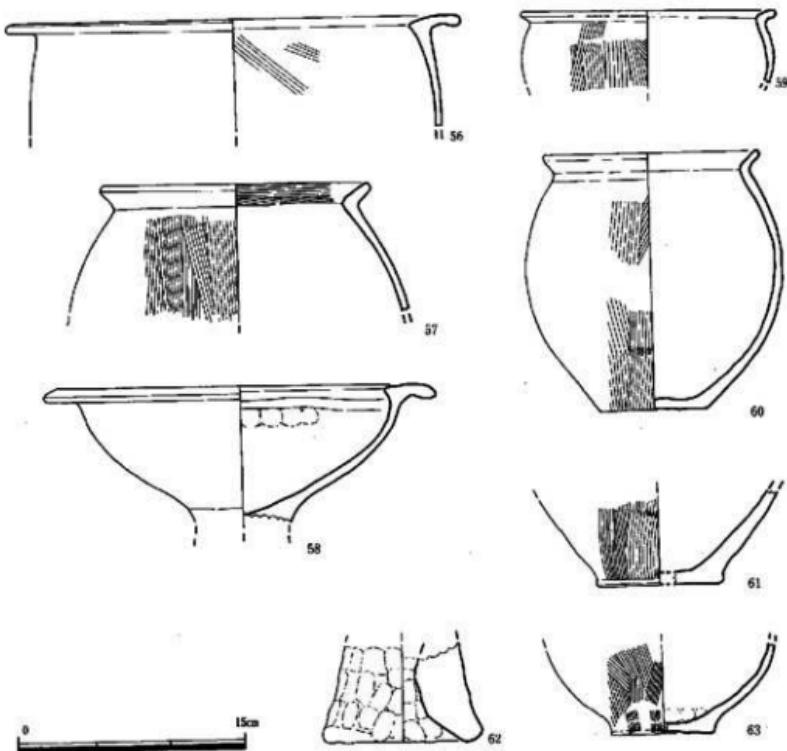


Fig. 30 2号溝出土遺物 (縮尺1/4)

土製品

ミニチュア土器 (123) 鉢形を呈し、体部は直線的に開く。端部は細く、尖り気味である。口径4.2cm、器高2.5cm、底径2.8cmを測る。調整は内外面ナデ調整で、内面には指圧痕を残す。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

石製品

石鏡 (119) 第2層出土で、半分以下を欠く。現存長1.3cm、最大幅1.0cm、最大厚0.4cmを測る。黒曜石製で、やや透明感がある。

(3) 3号溝出土遺物 (Fig. 31~33, 36, 37, PL. 23~27)

遺物は各層から溝遍なく出土した。弥生時代後期、及び古墳時代前期の遺物がほとんどである。
弥生式土器

器種は壺、甕、鉢、蓋がある。

壺 (64~68・70・71・74) 64は逆L字状の口縁部を持つ。頸部と肩部の境に断面三角形の突帯を一条張りつけている。頸部外面にはタテハケを施した後ナデ調整を加え、肩部外面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整である。内面は唇面の剝落が著しく、不明である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。第2層から出土した。65~68は袋状口縁をもつもので、65と66は長頸壺である。65は口縁部と頸部の境に断面三角形の突帯を一条張りつけ、外面、及び内面口縁部に赤色顔料を塗付している。65と66はともに頸部をナデ調整、口縁部はヨコナデ調整で仕上げている。口径は65が8.2cm、66が8.0cmである。67は口縁部を欠くが袋状口縁をもつと思われる壺である。ともに頸部と肩部の境に断面三角形の突帯を一条張りつけている。67は外面がタテハケ調整、内面がナデ、及びハケ状施文具によるヨコナデ調整である。68は口縁部外面がタテハケの後ナデ消し、肩部は丁寧なナデ調整である。又、口縁部内面はヨコナデ調整、頸部はヨコハケ、及びナデ、肩部はヘラ状施文具によるナデ調整である。67・68は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は65がやや軟質の他は、すべて良好である。67・65は第3層、66・68は第1層から出土した。70・74は短頸壺である。共に短かく外反するくの字口縁を有する。70は内外面丹塗りで、口縁直下に3ヶ所の穿孔を施す。70は口径11.0cm、74は口径14cm、器高11.0cm、底径8.3cmを測る。短頸壺としたが、鉢に近い。調整は70・74とともに内外面ナデ調整で、内面に指圧痕を残す。74は淡黄褐色を呈し、2次的に火を受け外面には煤が付着している。70は第2層、74は最下層から出土した。

蓋 (69) 短頸壺の蓋と思われ、径12.6cmを測る。対称部分にそれぞれ2つずつの穿孔を施す。外面はナデ、内面はヨコハケ調整で、淡橙色を呈す。焼成は良好である。最下層から出土した。
甕 (71~73) 71は脚付上器になる可能性がある。72は先にあげたAaタイプであるが、頸部のすぼまりが小さく、体部は直線的に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、体部外面は71がナデ、72

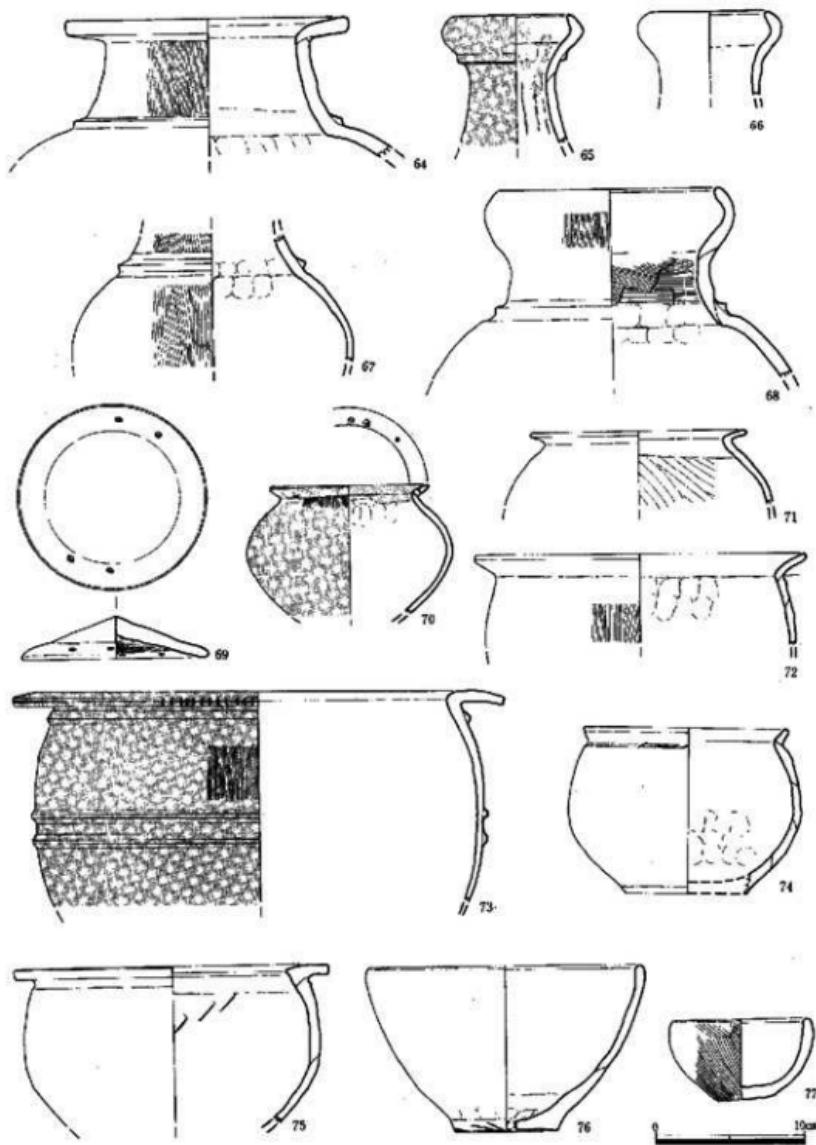


Fig. 31 3号墓出土遗物 (缩尺1/4)

はタテハケ調整である。内面はナデ調整で、体部内面には指圧痕を残す。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。73は逆L字形の口縁部で、長い口唇部を持つ。中期中葉の甕である。体部は緩やかに丸味を帯び、口縁部直下に一条、胴部中位に2条の三角突帯を貼付する。外面に丹を施している。72は復元口径23cm、73は33.4cmを測る。第3層から出土した。

鉢 (75~77) 75は溝底、76・77は第3層から出土した。77は球形の体部を持つ鉢で、75は逆L字形の口縁部を有する。75は復元口径21.4cmを測る。77は復元口径9.4cm、器高5.4cm、底径3.5cmを測る小型品である。76は内弯気味に大きく外上方へ開き、口径18.6cm、器高11.3cm、底径7.0cmを測る。調整は75・76が内外面ナデ調整で、77は外面タテハケ、内面ナデ調整である。淡赤褐色～淡黄灰色を呈する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

石製品

石錠 (118) 現存長1.7cm、最大幅1.2cm、最大厚0.3cm、重さ5.5gを測る。中央部の調整は粗い。良質の黒曜石である。

勾玉 (121) C字形の勾玉である。現存長1.9cm、最大幅1.3cm、孔径0.3cmを測る。頭部、尾部の小口は平坦に面取りを行う。側面は研磨によるケズリを施す。表裏面は研磨調整である。表面は淡茶褐色を呈している。材質は鉄石英製であろう。

土器器

器種は壺、甕、高坏、器台、鉢壺がある。

壺 (80) 80は外反する二重口縁を持つ山陰系土器である。復元口径17.8cmを測る。胴部は丸味を帯び、頸部は強く外反する。頸部と口縁部の境には断面三角形の突帯が一条巡り、口縁部は直線的に外反する。頸部には貝殻による有軸羽状文を施す。胴部外面はヨコハケ、口縁部及び頸部はヨコナデ調整である。胴部内面はヨコ方向に近い斜位のヘラケズリである。淡黄灰色を呈し、焼成は良好である。

甕 (78・79・81~86) 78と79は二重口縁をもつ。直線的にやや外に開く口縁部とその下に断面三角形の突帯を一条巡らし、短い頸部に至る。79は口縁端部を内側へつまみ出している。胴部は78がやや直立ぎみに伸びるが、79は外に開いている。口径は78が23.6cm、79が21cmである。調整はともに口縁部がヨコナデ、胴部が外面ハケ調整、内面ヘラケズリであるが、78はハケの後ナデを加えている。78・79とも第1層出土である。82・83・85・86は布留系統の甕と思われる。球形の胴部とくの字形に外反する口縁部を持つ。口縁部の形態により、直線的に外方へ開く甕 (80・85) と内弯気味に丸味を帯びて立ち上がる甕 (83, 86) とに分れる。口縁端部は85が丸くおさめているが、その他の甕は内側へつまみ上げている。口径は10.0cm~20.8cm、器高は82が15.6cm、83が約20cmである。調整は口縁部ヨコナデで、85は内面にナメのハケを残す。内面はヘラケズリで、外面は82・83・85の頸部下から体部上半にかけてハケ調整、86はナデ調整である。82の肩部にはヘラ描きの波状文を1条施す。83はハケ調整の上にナデを加

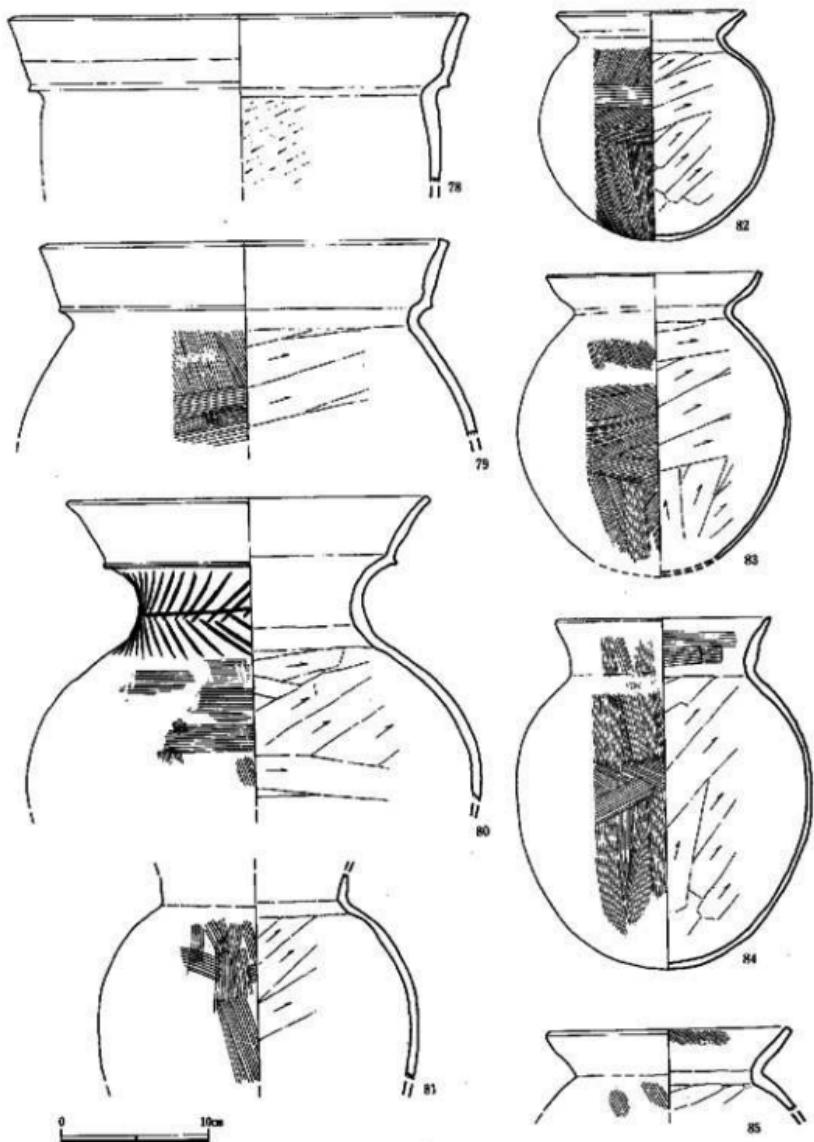


Fig. 32 3号溝出土遺物 (縮尺1/4)

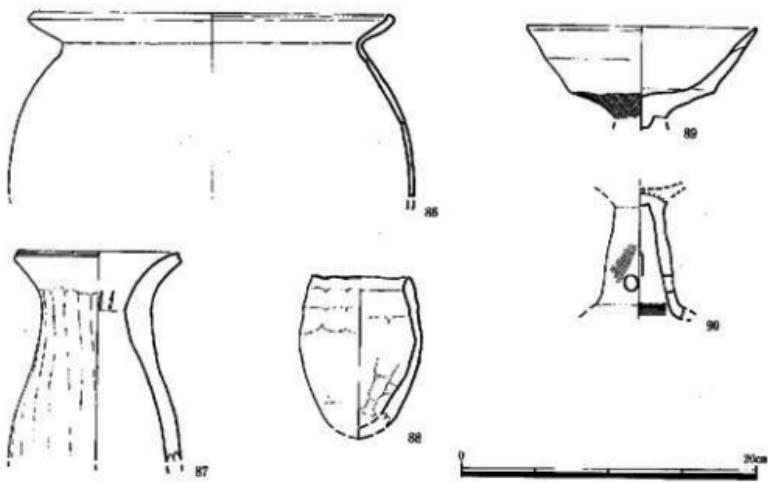


Fig. 33 3号溝出土遺物（縮尺1/4）

えている。体部下半には、共に板状具によるタテナデ調整がみられる。黄灰色～黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。82・85・86が第1層、83は最下層からの出土である。83・86は高く直線的に立ち上がる口縁部と、長めで球と云うよりは卵形に近い胴部を持つ。81は口縁端部を欠いているが、84は薄く尖り気味である。在地系の甕と思われる。調整はいずれも外画がハケ目、内面はヘラケズリ調整で、82・83はハケ目が細かく、84はやや粗い。又、84は口縁部内面にもハケ目を施している。色調は黄褐色を呈し、第1層の出土である。

高坏（89、90） 坏部と筒部を1点ずつ図示した。89は第2層、82は第1層から出土した。89は口径16cmを測る。口縁部は直線的に外上方に開く。外面は胴部屈曲部以下にタテハケ、屈曲部より上にヨコナデ調整を施す。明橙色を呈し、焼成は良い。90は筒部の破片で、全体的に直線的で細身である。筒部の下位に4ヶ所の円形の透しを設ける。孔径は1cmを測る。色調は明赤褐色を呈し、胎土に少量の砂粒を含む。

器台（87） 外反する口縁部から外面は丸味を持って胴部に移行する。内面は口縁部と胴部の境に稜を有す。口径は11.6cmを測る。また口唇部には沈線を一条施す。外面はケズリ気味の荒いタテナデ、内面は丁寧なナデ調整を施す。頸部内面には絞痕を残す。暗橙色を呈し、焼成は良好である。

壺壺（88） 全体的に緩く内弯する。底部は消失するが小さな丸底であろう。器厚0.4～0.8cmを測り、壺壺の中ではやや薄く、器形もやや特異である。口縁端部は先細りする。両面とも2次焼成を受け、赤変している。焼成は良い。

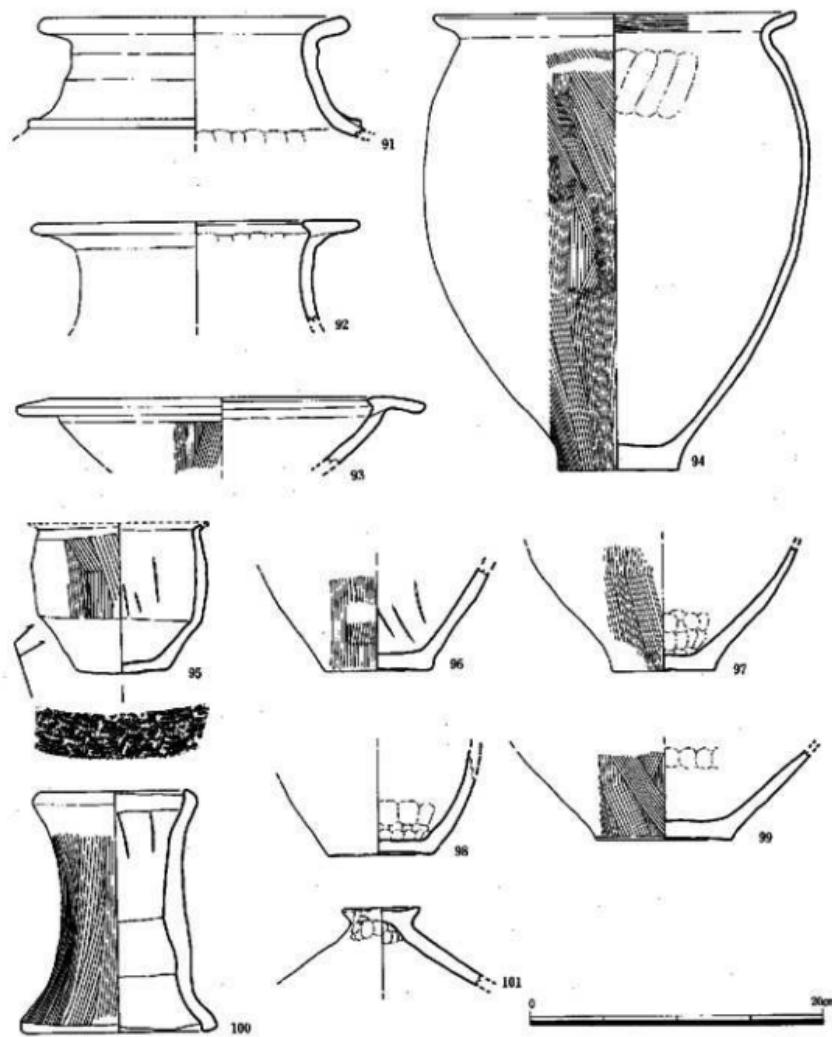


Fig. 34 4号沟出土遗物 (缩尺1/4)

土製品

ミニチュア土器(122) 口径4.2cm, 器高3.2cmを測る。体部は丸味を持ち、口縁部には3~4mm幅に若干の厚みをつけて整形し、口縁部を意識している。指圧痕が残り、内面と外面に炭素の吸着がみられる。胎土に砂粒を含み、暗黄色を呈する。

(4) 4号溝出土遺物 (Fig. 34, 35, 36)

大きく上層と下層に分けることができ、上層からは土師器、及び弥生式土器が多く出土し、下層からは弥生式土器のみが出土した。

弥生式土器

後期の土器を主とする。その他数点の中期の土器とともに突蒂文系土器が数点出土した。突蒂文系の土器は小片のため図示できなかった。

壺(91, 92, 98) すべて溝下層より出土した。91は逆L字形ぎみの口縁部を持つ。頸部との境は明確な稜を持たない。頸部はほぼ直線的に内傾し、頸部と肩部の境には断面三角形の突帯を一条巡らす。復元口径21.1cmを測る。口縁部はヨコナデ、頸部以下はナデ調整で、内面には指圧調整痕が残る。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。92はT字形口縁を有するが、全体にややメリハリを欠く。復元口径22.5cmを測る。外面はナデ調整である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。98は壺の底部破片であるが、その形態から長頸壺になると思われる。底径7.4cmを測り、調整は内外面ともナデで、内面には指圧痕を残す。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

壺(94~97, 99) すべて溝の下層から出土した。94は口径25cm, 器高31cmを測る。くの字形に近い口縁部を持つ。内面には明確な稜を持たず、先述したAbタイプにあたる。底部は外面がやや直立ぎみである。外面には8本前後を単位とするタテハケを施し、内面はナデ仕上げである。黄灰色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。95は小形の変形土器で、外反する短い口縁部を持つ。胴部下半に屈曲部があり、屈曲部より上はほぼ直立し、下位は底部に向ってすぼまる。屈曲より上の外面にタテハケを、内面にヨコナデを施す。屈曲部より下の外面には、土器成形の際にいた籠状の圧痕があるが、明確ではない。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。96・97・99は壺の底部破片である。96・99は外上方へ直線的に、97はすぼまった底部から丸味を帯びて、体部へと移行する。調整は外面ハケで、内面はナデである。96は内面に板状具の間隔で擦痕を残す。

壺(108) 第3層出土である。球状の体部と細い頸部を持つ。底部は欠損しているが、丸底になると思われる。体部から頸部へは屈曲して移行し、内外面に稜を有する。調整は内面ナデ、外面はタテハケ後ナデ調整である。頸部内面には指圧痕を残す。黒灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

4号溝

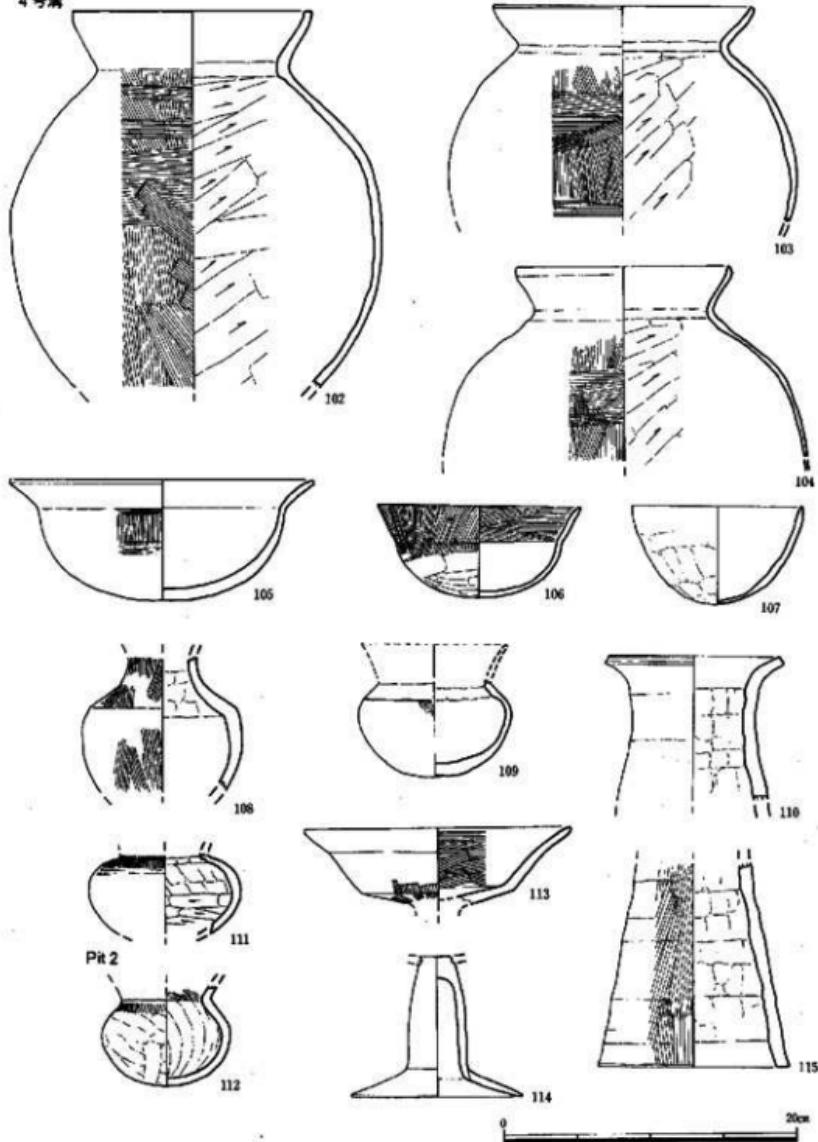


Fig. 35 4号溝・pit出土遺物 (縮尺1/4)

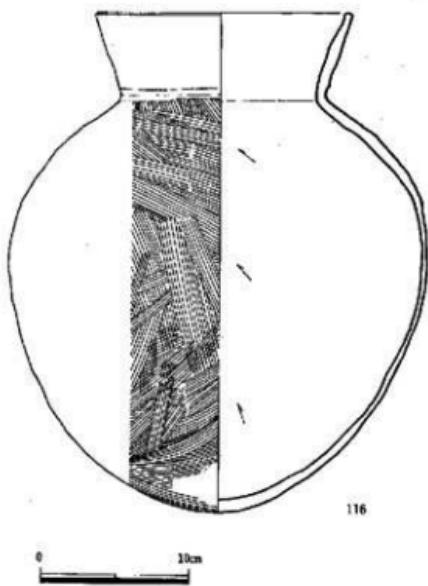


Fig. 36 4号溝出土遺物 (縮尺1/4)

は外面ハケ、内面はヘラケズリである。暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

甕 (102~104) いずれも布留式土器系統の土器である。102は底部を欠損するが、口径16cm、現存の器高26cmを測る。球形の体部を持ち、口縁部は102・103が直線的に外上方へのびるに對し、104はやや内弯気味に立ち上がる。端部はいずれも内側へつまみあげる。103・104は体部下半で欠損するが、103は口径17.9cm、104は口径15cmを測る。調整は口縁部ヨコナデで、内面はヘラケズリ、外面はハケである。ハケの方向は102が不定方向で、103・104の胴上半部にはヨコハケ、下半にはタテハケを施す。103・104は肩部にヨコナデ調整をし、ハケ目を消している。102・103は淡黄褐色、104は淡橙色を呈する。胎土に砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

鉢 (105~107) 105と106は頸部で屈折し、外に開く口縁部を持つ。105は口径20.4cm、器高8.2cmで口縁部は外反する。外面はハケ目、内面は荒れがひどく不明である。淡黄褐色を呈する。106は口径14.0cm、器高6.2cm、口縁部はハケ目を施し、胴部はヘラナデ調整である。黒色を呈する。107は底部から口縁部まで緩やかに内弯する。ナデ調整である。淡黄褐色を呈する。

高坏 (113~114) 筒部はわずかに丸味を持つ。底部径11.8cmを測る。筒部と裾は急角度で広

器台 (100) 上層の土器群から出土した。後期前半の器台である。口径11cm、器高16cm、裾部口径13.1cmを測る。口縁部、及び極端部はヨコナデで、外面口縁直下はハケ目、内面はナデ調整である。淡橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。

蓋 (101) 下層の土器群からの出土である。握り部を有する蓋で、口縁部へは直線的に移行する。内外面はナデ調整で、握り部内外面には指圧痕を残す。灰褐色を呈し、胎土は砂粒を含む。

土師器

壺 (111, 116) 111は第3層、116は上層土器群の出土である。111は小形丸底壺で、口頭部を欠損する。胴部最大径は胴部上位にある。116は口径17.3cm、器高33.6cmを測る。口縁部は直線的に開く。111は外面がタテハケ後ヨコナデ、内面はヘラケズリである。116

がる。両面ともナデ仕上げである。坏部の口縁部はゆるく屈折する。両面はハケ調整である。
 器台 (110・115) 110は口縁部片で、口唇部に沈線を一条施す。全体が緩やかに外反する。口径は24.4cmを測る。内面はナデで、指圧調整痕が明瞭に残る。外面は磨滅のため不明である。
 115はほぼ直線的に伸びる胴部下半の破片である。復元底径13.2cmを測る。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

石 器

石鎚(117) 第2層出土である。現存長2.1cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cm、重さ8.5gを測る。片方の腹折りを欠く。丁寧な調整である。漆黒の黒曜石であるが、気泡が多く、灰黒色の筋が入る。

(5) ピット出土遺物 (Fig. 35, PL. 27)

土師器

壺(109) P 2より出土。口縁部を欠失する。胴部最大径は8.8cmを測る。体部の形状はやや扁平な球に近い。外面は頸部にタテハケが残るほかはヘラナデ調整、内面はヘラケズリを施す。

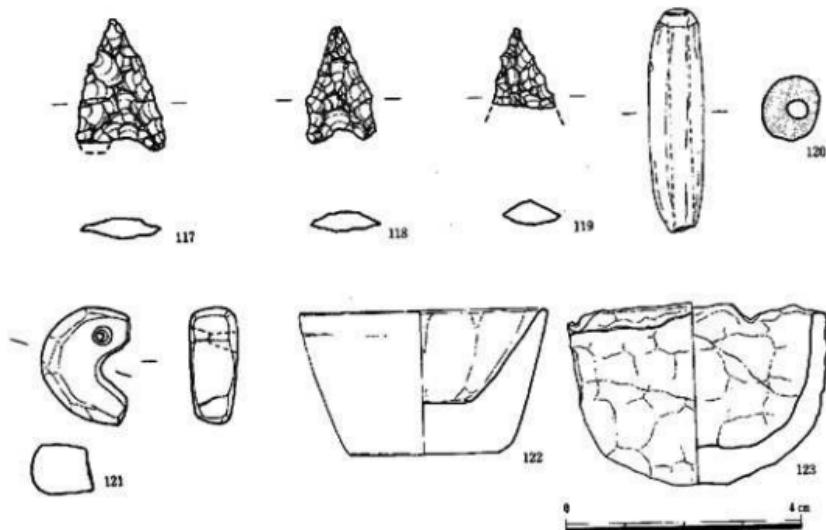


Fig. 37 出土遺物 (縮尺1/1)

第4章 まとめ

原遺跡第9次調査の成果については前述の通りであるが、調査地区は縄文時代晚期から中世末期に及ぶものである。弥生時代～古墳時代の遺構は削平を受け、遺構として把握できたのは溝状遺構や、掘立柱建物などにとどまった。2号～4号溝から出土した弥生時代後期及び古墳時代初頭の土器は一括資料であり、のちほどで検討したい。中世は前時代に比べ残存状態が良好であり、早良平野に割拠した中世小名主層の居館と見做すことができる。以下に、1、「中世の遺構と遺物」、2、「弥生時代後期土器について」、3、「古墳時代初頭の土器について」検討したいと思う。

1. 中世の遺構と遺物

居館跡の年代を検討するにあたって、先ず遺物について詳細に述べたい。

遺物は土師器皿・壺・青磁・碗・皿・陶器・鉢・擂鉢・土師質土器・鉢・瓦質土器・火舍、木製品は下駄・漆器椀・呪符等を検出した。但し、これらの遺物は庶民一般に使用されたものとは考え難く、特に漆器椀や呪符などは特定の階層にのみ占められた遺物である。壺は底径と口径比の差が著しく、器高は高いものと低いものの2種がある。壺は口径12.1～13.0cm、器高1.6～2.2cm、底径7.8～8.8cmを測る。皿は口径8.0～8.6cm、器高1.2～1.8cm、底径5.6～6.4cmを測る。大宰府史跡觀世音寺子院金光寺の調査では、II期の整地層及び腐植土層(14世紀中頃～15世紀初頭)^{註2}、III期の黒色土層・黒灰色土層から良好な資料が出土しており、又、北九州市の白岩西遺跡においても近似する時期の土師器の資料があるので両者を合せて考えたい。大宰府史跡のII期、整地土層、腐植土層の土師器皿はa、b、dの3種があり、壺はa、bの2種がある。a種は口径8.2～8.4cm、底径6.0～6.4cm、器高1.1～1.3cm、壺bは口径11.6～12.8cm、底径7.0～8.6cm、器高3.0～3.5cmを測る。III期の黒色土層・黒灰色土層は、皿aは口径8.4～8.8cm、器高1.3～1.4cm、底径5.6～7.3cm、壺bは口径12.9～13.8cm、器高2.4～3.2cm、底径7.6～7.9cmを測る。上記の皿の内、皿bは法量や器形からみて、当該出土の皿とは合致しない。又、壺aは底形と口径比が小さいもので、口径が13cmを軸とするものであり、当該出土の壺と合致しないので、ここでは省いて考えたい。

大宰府史跡分類の壺b一すなわち、口径と底径比の大きな器形であるがII b～III bにかけて器高が低くなり、底径が小さくなる傾向をもっている。この傾向は白岩西遺跡でも同様な傾向が云われており、IV、V類の15世紀中頃～後半の時期からVI期の16世紀前半～中頃までの間に、口径11.4～13.0cm、器高2.4～3.3cm、底径4.6～6.4cmを測るが、全体に口径、及び器高の減少のきざしがみられる。当該地検出の土師皿、壺の数量が少ないため、比較するには無理があ

るが、当該地出土の壺は、大宰府史跡67次調査の壺II bより器高が低く、III bに比べると口径は近似するが、口径と口径比は小さい。皿はII bに対して器高が低く、口径と底径比は大きく、III aに近い法量の値をもっている。これらの土師器に伴う陶器、24・25は備前焼系の摺鉢であるが、この鉢は室町時代のIV期に比定されるが、後半期のものである。又、土師質鍋26は頭部内面に穂を有しているが、III期の黒灰色土層に確実に伴っている。又、輸入陶磁器の内、青磁碗(2)は金光寺II期の腐植土層に伴っているが、出現期は15世紀初頭を前後するものである。皿(11)は李朝であり、15~16世紀代と考えられる。

よって、これらの溝遺物のうち最も古いものは12世紀後半の青磁や白磁をも含み、新しいところでは、白磁(1)や李朝青磁(11)に代表され、16世紀段階までの幅をもっている。しかし、土師器の皿と壺を見る限り、12世紀~14世紀代にさかのぼるものではなく、やはり15世紀初頭から16世紀中頃までの段階を考えられる。よって、1号溝の時期は最終末の段階を16世紀中頃と考えた方が良いが、この溝に囲まれた館の成立は15世紀を前後する時期にさかのぼり得る。

福岡市内に於ける漆椀の出土例は少なく、現在知られているだけでは、有田遺跡、石丸・十郎川遺跡⁵、下山門乙女田遺跡⁶、原遺跡⁷、博多遺跡群⁸、多々良込田遺跡等がある。木製品自体が条件によっては遺存し難いことを考えれば他にも当然出土しても良い地域がある。有田遺跡では16世紀の漆内より出土した。又、石丸・十郎川遺跡では低湿地の第6層から7点出土している。内外面黒漆を塗るもので、内面に赤漆を塗る1点がある。又、内面に赤漆による文様を描くものも1点ある。高台が低く、体部が丸味をもつなど原遺跡例に近似する。下駄や曲物、杓子が伴う。共伴する土師器は大宰府史跡67次調査の腐植土層出土の土師器壺より器高が深いものと、SK601より口径が大きいものを含んでおり、14世紀前後~15世紀までの段階が考えられる。石丸乙女田遺跡では1点出土し、外面は黒漆を塗布し、外面には赤漆にて鶴のモチーフを描いている。共伴した土師器には口径と底径比が大きい器形の壺を含んでおり、14世紀~16世紀の幅が考えられる。又、差歛下駄が共伴する。博多遺跡群では、漆器椀は13世紀後半から14世紀の段階に出現すると云われ、17世紀の段階に於いても近世陶磁器と共に出土する。多々良込田遺跡では2点出土しており、1点は丸底で厚手の椀である。この椀は内外面に黒漆を塗布している。他の1点は薄手で、内外面に黒漆を塗っており、赤漆による文様が施されている。現在のところ、6遺跡に限られるが、13世紀代にさかのぼるものは2例しか無い。一般に漆椀の出現は鎌倉武士の地方守護、地頭などの官任により、もたらされると云われているので、博多は中世の貿易港であり、又、九州平定の拠点であるから、その出現はさかのぼる可能性がある。広く普及する時期は、石丸・十郎川遺跡や原遺跡に代表されるように14世紀~15世紀の段階に入つてからであろう。この段階では輸入陶磁器が極端に減少する時期でもあり、木製椀や漆器の出現と無関係ではないだろう。

館跡の規模は調査区が限られたため把握し得ないが、造構としては、1号溝と5棟の掘立柱

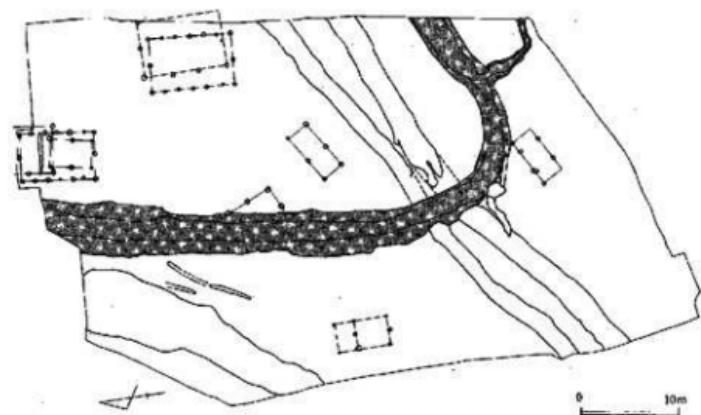
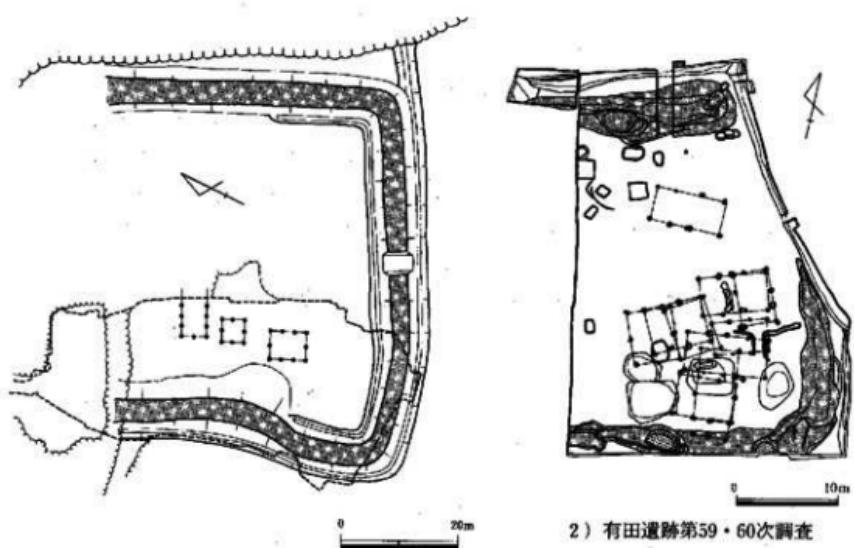


Fig. 38 中世遺構配置図（縮尺1/1,000, 1/600）

建物に限定される。溝は幅4～5mを測り、矩形に巡るもので、東側が浅くなる。この部分には更に細い溝が2重に矩形に巡っており、出入口を想定させる。建物は全て南北方向に主軸を揃えて配置されており、切合から、少なくとも3回の建て替えが行なわれている。館跡は金屑川によって形成された沖積台地の西南部寄りに位置し、西側の金屑川とは非常に近い距離にある。又、条里に伴って金屑川から引かれた水路が東側に流下しており、この両者に開まれた位置にある。濠内には金屑川から水を引き込み、又、自然地形による2重の防衛施設をもっていたものと思われる。しかし、有田遺跡で検出されたような200m四方に及ぶ大規模な濠や郭は軍事的な要素が強く、原遺跡の場合は屋敷としての感が強い。有田遺跡第59次調査では溝によって方形区画された集落、又は館跡を検出したが、西側が室見川に接した台地縁辺の制約された位置にある。推定では南北の幅30m、東西の長さ80mで、約2,400m²の大きさである。この館の建物は規模が小さく、且つ、整然とした配置はみられないが、13世紀～15世紀の輸入陶磁器を豊富にもち、又、茶臼などの出土から名主層の館跡と考えられる。

諸岡遺跡では、周開を濠で巡らし、三邊に上塗を築いた館跡が検出されている。この館跡は沖積台地に立地し、14世紀後半に造営され、16世紀中頃まで継続されている。館は、南、西辺土壁の一部と、その範囲内が残されていたにすぎないが、旧地形の復元によって館内は南北約50m、東西約55mの矩形の平面形が想定されている。この規模は有田遺跡第60次調査の館跡の規模に近いものであり、原遺跡においても同様な規模が考えられる。建物の配置は現状では具体的に述べることは差し控えるが、主屋としての機能は考えがたい。

2. 弥生時代後期土器について

出土した弥生式土器は少量の前・中期の土器を除くと、すべて後期に位置づけられるもので、ここでは後期土器群について簡単にまとめてみる。

後期土器群は、1～4号溝より壺・長頸壺・甕・鉢・器台・蓋が出土した。数量的分析は行っていないが、量的に特に傑出した器種はない。壺は袋伏口縁を持つものと、いわゆる短頸壺がある。長頸壺も含めて、袋伏口縁の形態はほぼ同形態を呈している。袋部のカーブは比較的ゆるやかで、両面とも明瞭な稜を持たない。頸部は長く、穏やかに外反する。肩部が残っている破片をみると、肩の張りはやや強く。数点を除いて外面に赤色顔料を施している。これらの特徴は、武末純一の分類によると壺形Ⅰ類土器にあたり、鹿部東町土器群出土土器に近似する。^{E10} 短頸壺は短い口縁部に略球形の胴部を有するもので、49、74は胴部があり張らないこと、及び全体の作りが若干粗雑なため鉢にいれても良いかもしない。口縁部の形態は急角度で外に開き、胴部の張りは強い。底部は不明であるが、明確な平底を呈するものと思われる。この器種群についての編年的位置づけはさほど明確ではないが、口縁部の形態を他の器種と比較した

場合、後期前葉に位置づけられるものと考えられる。

鉢は2形態ある。底部から口縁部まであまり屈曲せず内弯するものと、短い外傾する口縁部を持つものである。後者は先述したように短頸並ないしは寸づまりの壺の形態に近い。前者を見れば口縁端部は丸くおさめ、底部は外弯^{註12}ぎみに立ち上がる。底部の形態は常松氏の云うA類にあたる。やはりこれも鹿部東町等土器編に類似例がある。一方後者の形態は、口縁部の内面に明瞭な稜を持つくの字形口縁で、底部は前者と同じA類のものとやや上げ底ぎみのもの、すなわち常松分類のA類のものがある。

壺は、文中で2類3型式に分けた。再度述べると次の通りである。

A類…くの字状の口縁部で長胴なもの。

a…口縁部がくの字形に外反し、頸部内面の屈曲部がシャープなもの

b…aに比べ口縁部の立ち上がりが弱く、L字形に近いもので、頸部内面の屈曲は緩やかである。

B類…A類に比べ口縁部が短く器高が低い。

底部の形態はいずれも平底を呈する。Ab類に属する53の土器はやや凸レンズ状に近いが、これは土器がやや雑なつくりのため、本来は平底である。底部の立ち上がりはAa類が若干外弯するか直線的に開き、Ab類は外弯する。B類は直線的に開く。以上の特徴から、その編年的位置づけはAb類が常松編年の第I式、武末編年のIa期に属するものと思われる。但し、54の土器等は中期の様相をほぼそのまま継承し、或は中期末に入れるべきかもしれない。Aa類、及びB類は常松編年の第II式、武末編年のIb期に相当する。また、壺のうちFig. 29の50の土器には、頸部に棒状施文具による列点文が施されており、北部九州では類例を聞かない。その系譜として他地域の土器（例えば山陰）を考えるべきかもしれない。

器台は1点出土した。口縁部、底部ともに端部をつまみ出しており、ほぼ上下対称形を成す。中期後半の形態に近いが器壁が厚く、口縁端部の形状等から前原町三雲遺跡等の例を参考にすると、後期前半に位置づけられよう。^{註4}

蓋は数点出土したが、短頸壺の蓋と壺の蓋で、いずれも中期的な土器であるが、前者に於いては器高が中期のものより高く、後者に於いては把手部の器厚が厚くなり、後期初頭～前半に位置づけられるものであろう。

後期の土器編年については、本文中に引用した他にも幾多の論文があり、細部では異同があるものの特に初頭～前半の土器群については、鹿部東町土器編を初期とし、以後小笹遺跡、久保長崎1・2号住居跡へと続いていることに異論はない。当遺跡の場合、溝からの出土遺物で、2号溝及び4号溝の一部では良好な出土状況があるものの、大半は流れ込み的状況であることから、いわゆる一括遺物としてそのすべてをくくれない面がある。そこで、各器種ごとに先の

編年観に照らしあわせると、いずれも後期初頭から前葉におさまることが判明した。しかし、各器種ともその多くは中期的な器形を維持したものが多い。又、当該期の鉢類の形状を明確にしたとともに、籠の圧痕を施したと思われる異形の壺は、56の土器との共伴は疑いなく、その時期をおさえられ、後期前半の土器群に新たな資料を追加したといえよう。

以上、出土遺物の時期を検討したが、その結果、弥生時代後期の溝である2号溝と4号溝下層は、最下層土器層よりいずれも後期初頭の土器群が良好な状態で出土しており、この溝の利用は後期初頭に始まったと考えられるであろう。

3. 古墳時代初期の土器について

いわゆる古式土器は、3号溝と4号溝上層よりまとまって出土した。しかし、3号溝と4号溝では、その土器群の構成に差が認められるため、ここでは別個に見てみよう。

3号溝で主体を成すのは壺、壺とともに外來形土器である。いわゆる山陰系土器と布留式系統の土器が出土した。山陰系土器は壺1個体と壺2個体以上が出土した。いずれも外形する二重口縁を有するものである。壺は口縁部がかなり外傾し、胸部はおそらく球形に近い倒卵形を呈すると思われる。頸部には貝殻腹縁の刺突による有輪羽状文を施す。壺は2点図示しているが、口縁部の形態にさほどの差はないものの胴部の形態が異なり、78は直線ぎみ、79は丸味を持っている。

山陰系土器については、山本清氏を嚆矢として、その編年と細分化が進んでいるが、なかでも、藤田憲司氏による5期編年⁵¹がよく引用され、それに従った赤沢秀則氏の5期編年⁵²がある。当遺跡出土のものは、口縁部の外傾度、壺形土器の球形化等の様相から第V期に相当するものと思われる。同じくV期に属する島根県松本1号墳出土の壺に近いが、頸部の丸味、肩部の張り等若干の相異が見られる。又、図示した壺の2点のうち胴部が直線的なものは類例に欠け、やや特異である。

原遺跡群では、第4次調査（原深町遺跡）でも多くの山陰系土器が出土しており、当遺跡同様5期に属するものである。市内に目を転じると、西新町遺跡、藤崎遺跡等で多くの山陰系土器が出土しているが、その大半がV期のものでわずかに数例だけII期～IV期に属する。V期に於ける山陰系土器の流行が当地にも及んでいたことを示している。

布留式系統の壺は少なくとも4個体出土している。略完形に近い30、31の2点はいずれ球形の胴部とくの字形に外反し、30はやや直線的に外に開くものの、ヘラ描きによる波状文が認められ、布留式系統に属する。柳田康雄氏のII⁵³a期に属すると思われる。34は口縁部をつまみ上げて口縁部全体をやや内弯させているが、胴部がやや長く、調整もナデ調整でやや異質な土器である。

在地形の土器として、壺、甕、器台、高坏があるが、壺、甕の占める割合は外来形土器に比べて少ない。いずれも常松幹雄氏の編年のVI器、柳田編年のIIa期に属するものと思われる。

一方4号溝は、3号溝の器種にさらに小形壺、鉢が加わる。小形壺はいわゆる小形丸底壺と系統不明の土器(72)1点があるが、72は類例に欠き、ここでは古師器として扱ったが弥生式土器の可能性も否定できない。小形丸底壺は図示していないものも含め4点の出土で、75の肩部がやや張る以外はいずれもほぼ同じ形態を示す。いずれも口縁部を欠失しているため明確ではないが、口縁部がさほど伸びないと推定され、柳田編年のIIa期に属するものと思われる。大形壺は1点のみの出土で口縁部がやや長めの在地系の土器である。甕はいずれも口縁端部を内側へつまみ上げた布留式系統のものであるが、3号溝出土のものと比べ頸部内面に平坦部を形成し、明瞭な稜を持ち、胴部はやや幅広いなどの差異を有する。全体的な特徴は、ほぼ3号溝出土甕の編年と大差ないものと思われるが、若干の時期差、及至は系統の違いを考えるべきかもしれない。また、4号溝では3点の浅鉢が出土した。詳細な編年的位置づけについては明確ではないが、71は外面の調整が異なるが、塚堂遺跡B地区出土のものに酷似している。高坏は受け部に深みが無く、裾部に強い屈曲を有し、IIb期に相当する。

以上、3号・4号溝の土器群を器種別に概観したが、両溝の時期についてはほぼ同一の時期で、柳田編年のIIa期、4世紀中頃に位置づけられる。但し、4号溝は高坏がやや後出様相を呈し、甕も3号溝とは器形上の差があることを考えると3号溝に遅れる可能性がある。3号溝で出土した山陰系土器が4号溝では出土していないことは非常に暗示的である。

- 註1 高倉洋彰他「宝台遺跡」 1970 日本住宅公団
註2 九州歴史資料館「大宰府史跡」 昭和55年度発掘調査報告書 1981
註3 北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室「白岩西遺跡」 北九州市埋蔵文化財調査報告書第43集
1985
註4 間壁忠彦、根子「備前鏡ノート(3)」 倉敷考古館研究論集5号 1968
註5 吉岡完祐編「十郎川一福岡市早良平野石丸・古川遺跡」 住宅整備公団 1982
註6 福岡市教育委員会が昭和60年度発掘調査 置木氏御教授
註7 福岡市教育委員会が発掘調査 大庭氏御教授
註8 福岡市教育委員会「日々良遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第20集 1972
註9 福岡市教育委員会「諸岡遺跡第14・17次調査報告」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984
註10 武末純一「遺物の検討(1)。弥生土器」「九州縄貝白駒車関係埋蔵文化財調査報告—XX—」 福岡県教育委員会 1977
註11 日本住宅公団「鹿部山遺跡」 1973
註12 常松幹雄「北部九州におけるいわゆる山陰系土器」「九州考古学第60号」 1986
註13 福岡県教育委員会「三雲遺跡III」 1982
註14 山本 清「山陰の土師器」「山陰文化研究紀要」 6号 1965
註15 藤田嘉司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行關係」「考古学雑誌」 64-4 1979
註16 亦沢秀則「島根県下の状況」「弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について」 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986
註17 福岡市教育委員会「原深町遺跡」 1981
註18 福岡市教育委員会「西新町遺跡」 1982
註19 福岡市教育委員会「藤崎遺跡」 1982
註20 柳田康雄「三世紀の土器と鏡」「古文化論集」 下巻 1982

図 版 PLATES



調査員、作業員一同



(1)調査区北半全景（南から）



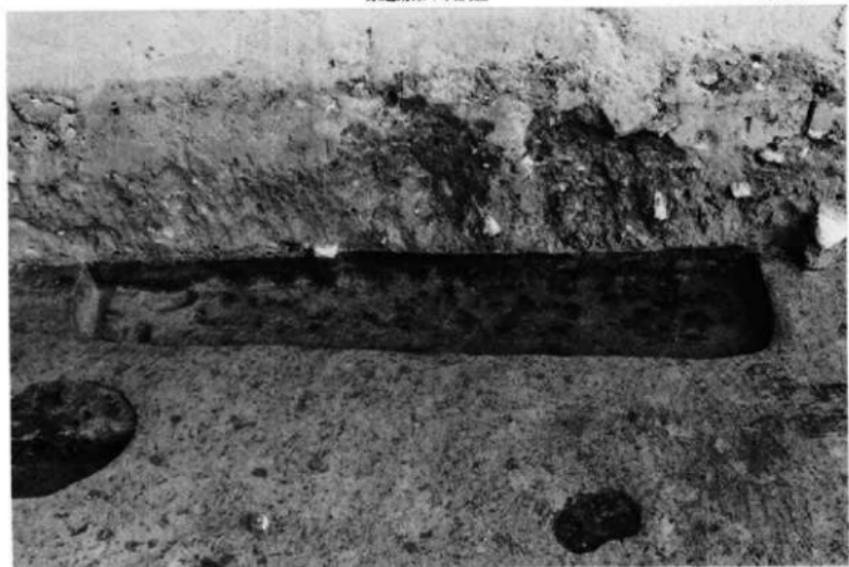
(2)調査区北半全景（北から）



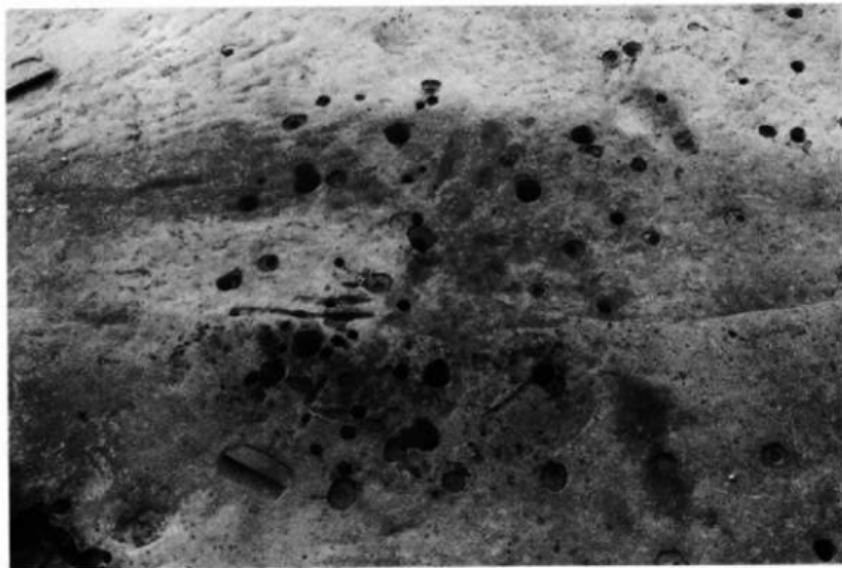
(1)調査区南半全景（北から）



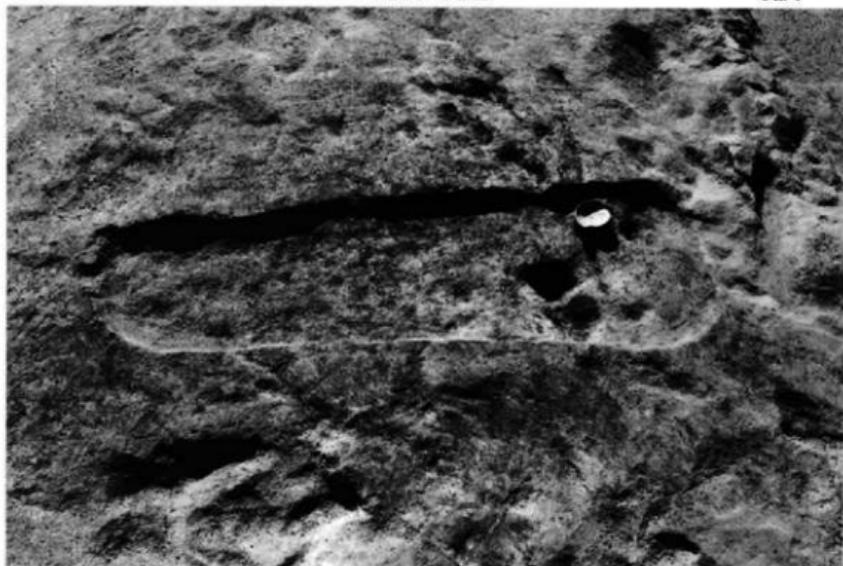
(2)調査区南半全景（東から）



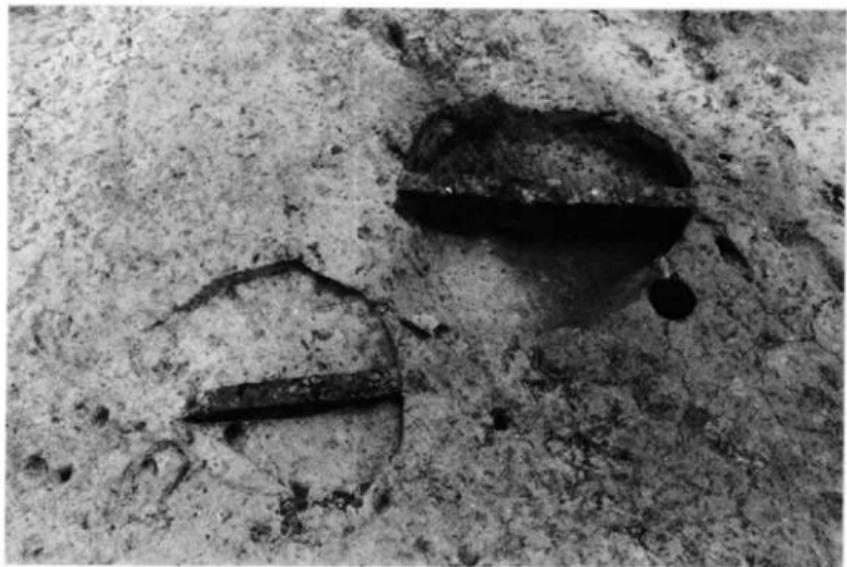
(1) 3号住居跡（南から）



(2) 1号・2号住居跡（東から）



(1)土壤墓（西から）



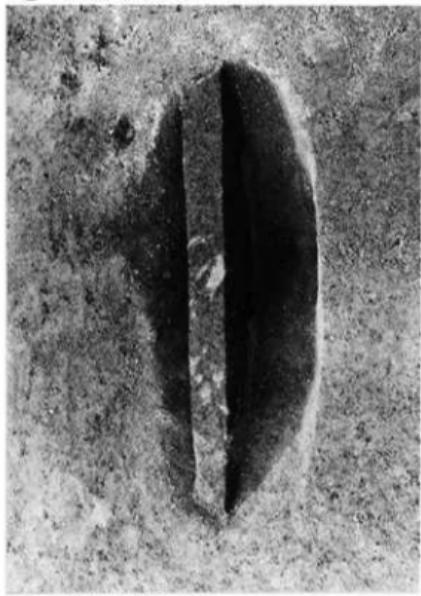
(2)2号・3号土壤（北から）



(1) 8号土壙（北から）



(2) 6号・7号土壙（東から）



(3) 18号土壙（北から）



(4) 21号・22号土壙（北から）



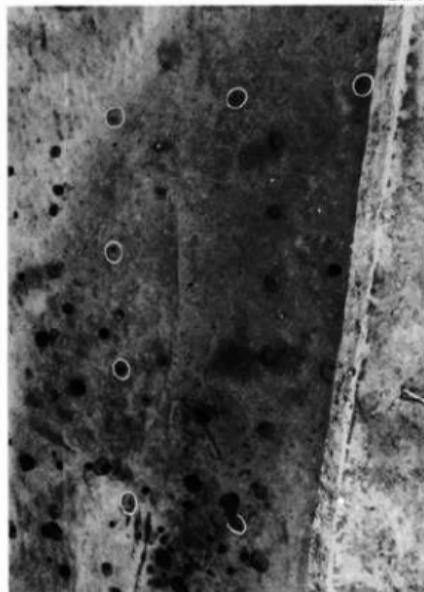
(1)環濠、及び掘立柱建物群（南から）



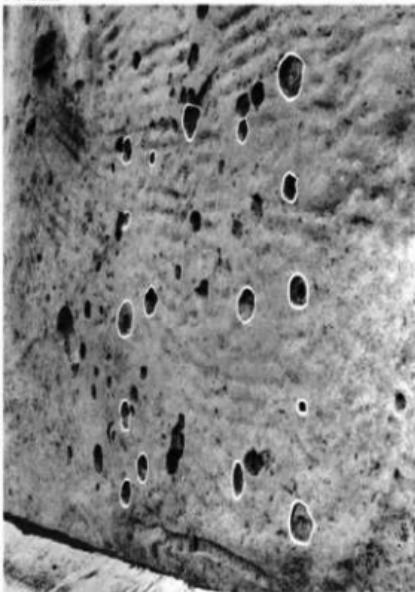
(2)一帯・2の環濠構造物（東から）



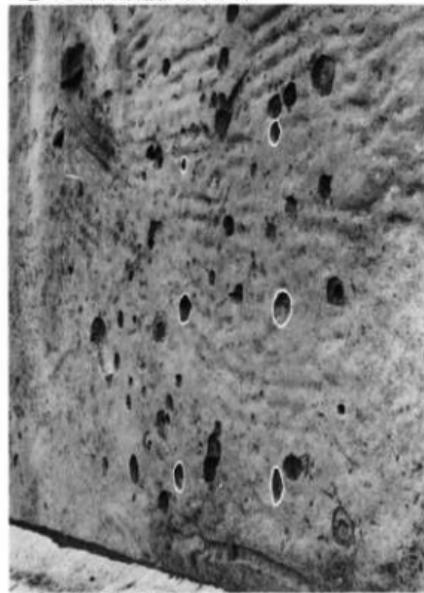
(3)一帯・2の環濠構造物（東から）



(1) 2号櫛立柱建物 (東から)



(2) 3号・7号櫛立柱建物 (西から)



(3) 7号櫛立柱建物 (西から)



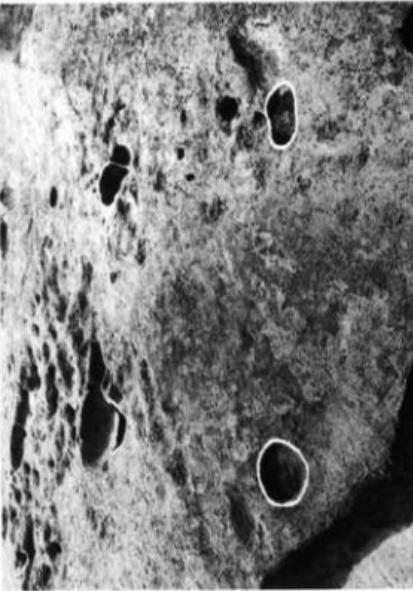
(1) 4号掘立柱建物（西から）



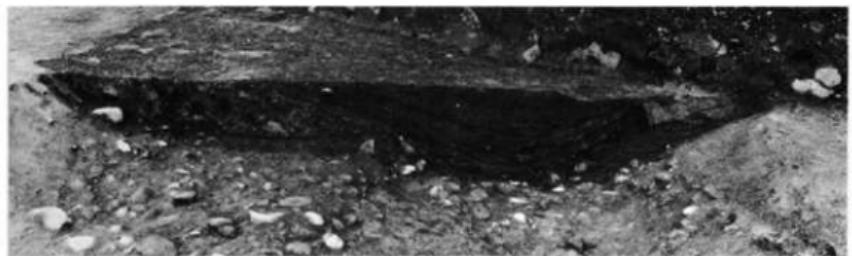
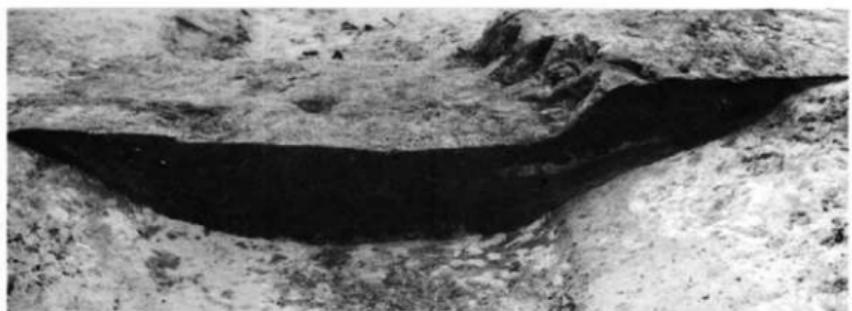
(2) 5号掘立柱建物（北から）

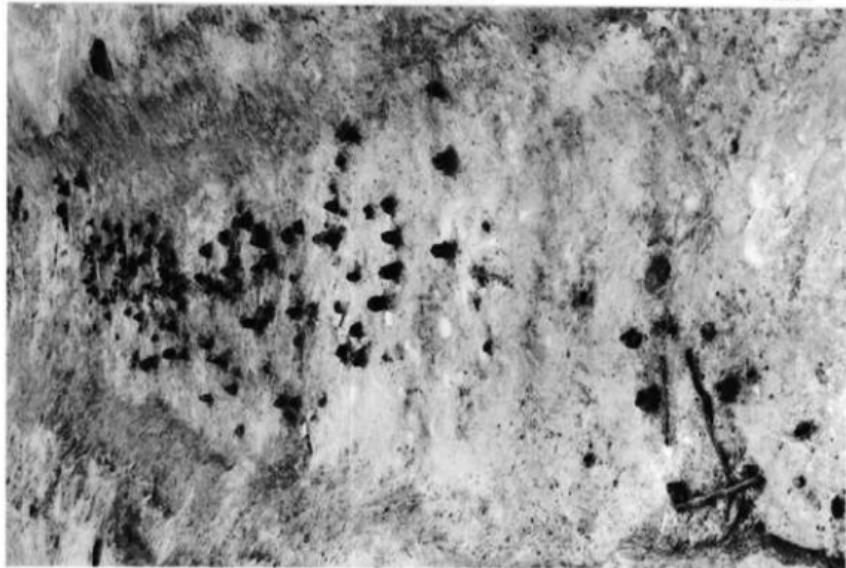


(3) 6号掘立柱建物（西から）



(4) 8号掘立柱建物（東から）





(1) 1号溝内松ボックリ出土状態（南から）



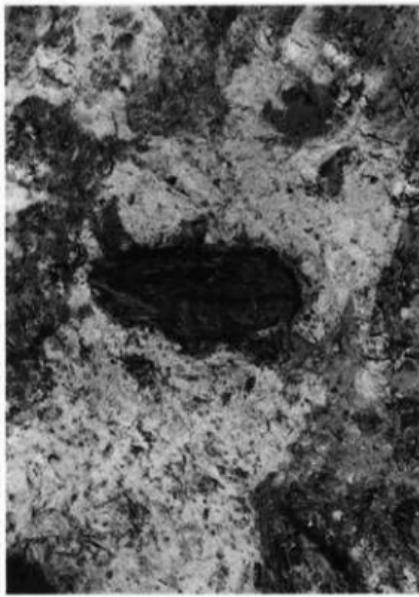
(2) 1号溝内松ボックリ出土状態



(3) 1号溝内漆器碗出土状態



(1) 1号井内下部出土状態



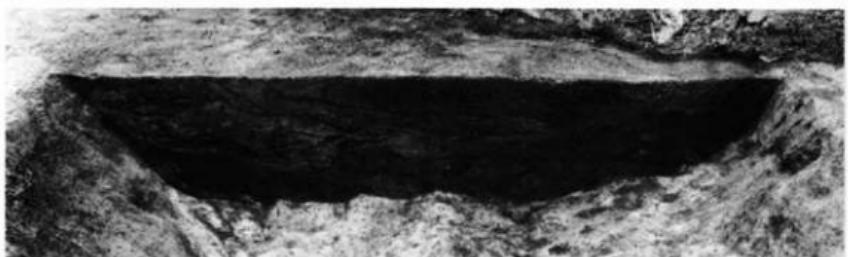
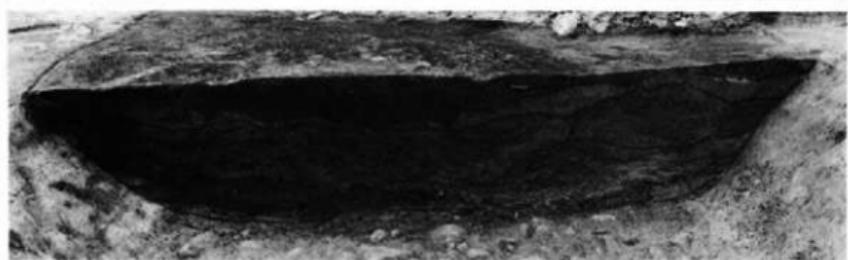
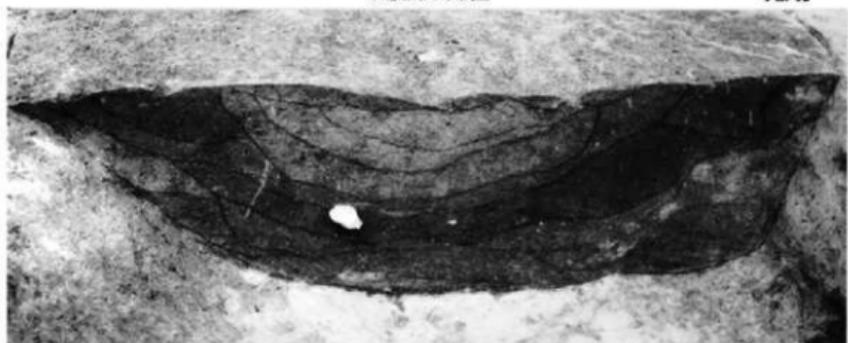
(2) 同下部出土状態



(3) 同下部出土状態



(4) 同木製品出土状態





(1) 2号・3号溝(西から)



(2) 2号・3号溝(東から)



(3) 2号溝遺物出土状態(西から)



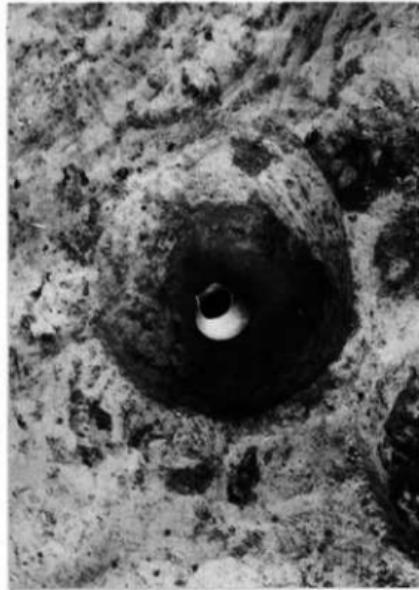
(4) 3号溝遺物出土状態(東から)



(1) 3号溝遺物出土状態（北から）



(2) 3号溝勾玉出土状態（北から）



(3) P.2 内尊出土状態（西から）

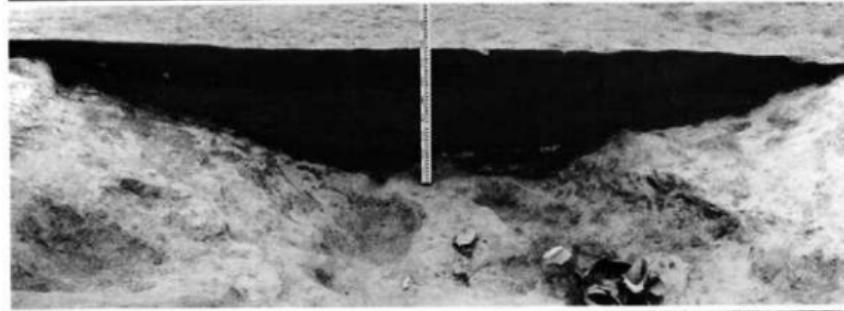


(4) 1号土壇鉢形馬蹄出土状態（西から）

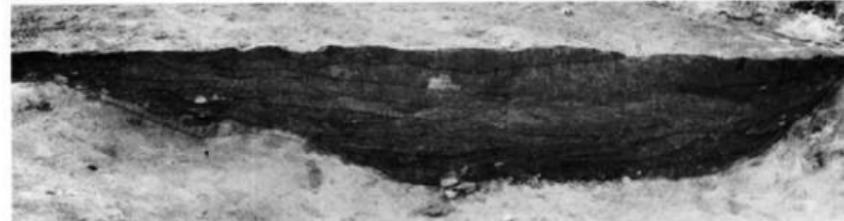
(1) 4号溝北壁土層状態(南から)



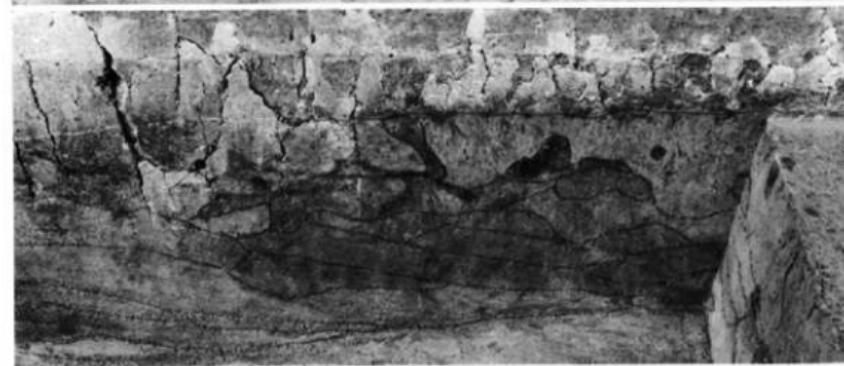
(2) 4号溝1号畦土層状態(北から)



(3) 4号溝2号畦土層状態(北から)



(4) 沖積地堆積状態(南から)





(1) 4号窯 (西から)



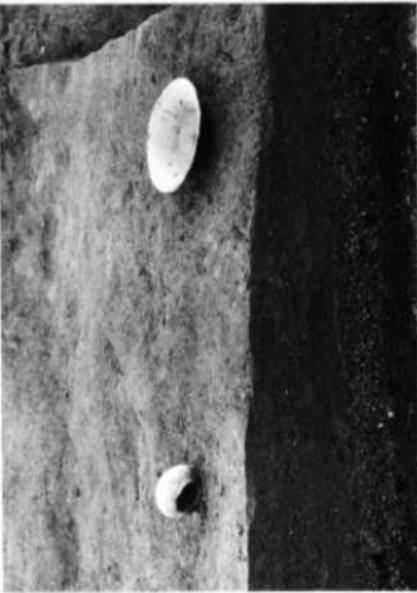
(2) 同窯底部附近内遺物出土状態 (南から)



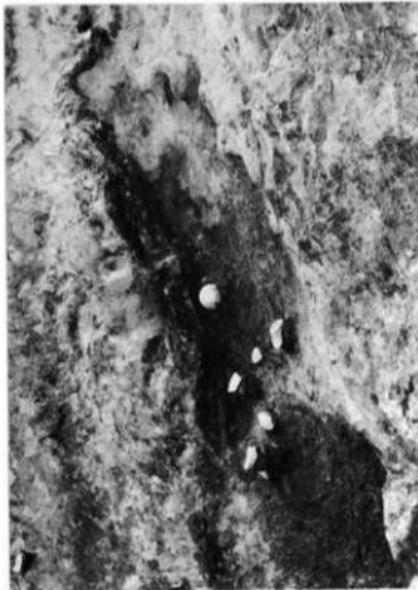
(3) 同窯内部内遺物出土状態 (南から)



(1) 4号溝上層遺物出土状態（西から）



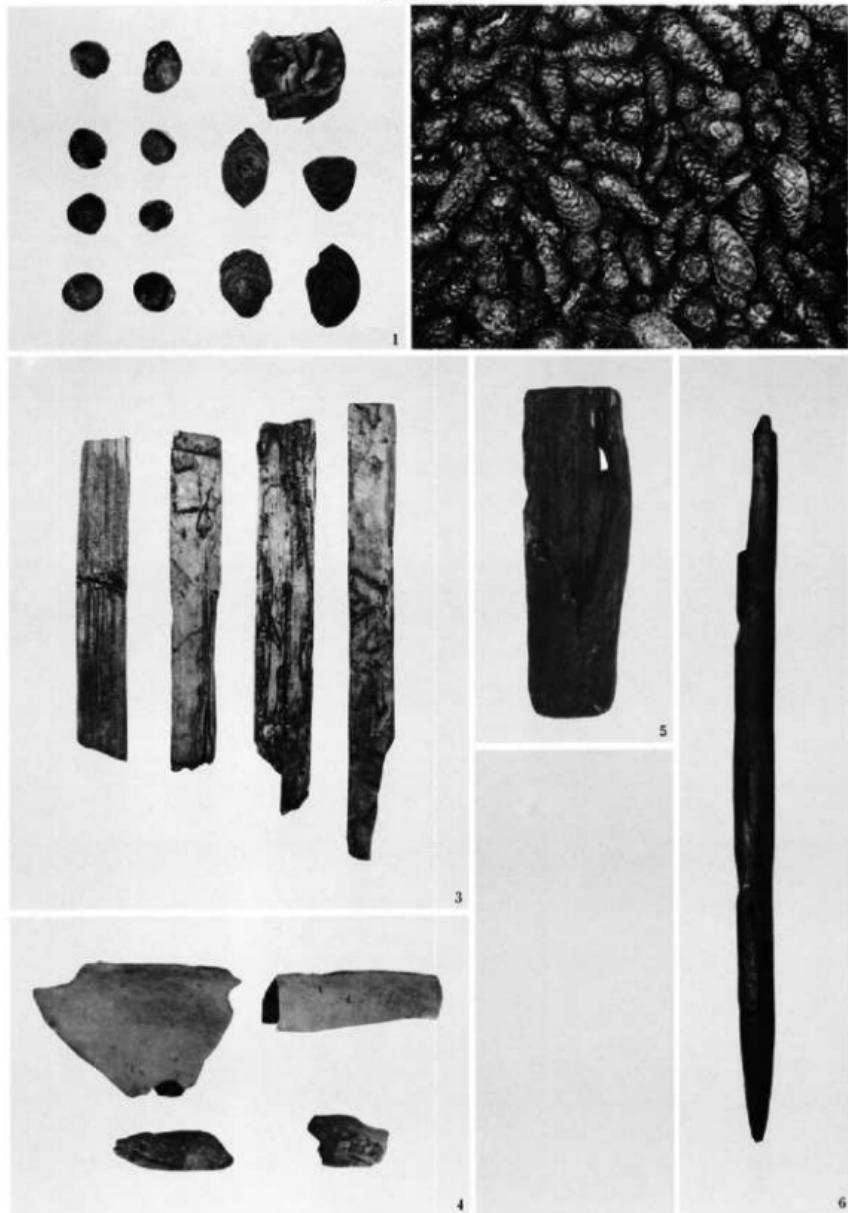
(2) 同上層系配遺物出土状態（西から）



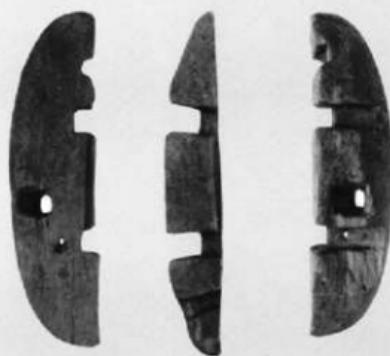
(3) 同溝底遺物出土状態（西から）



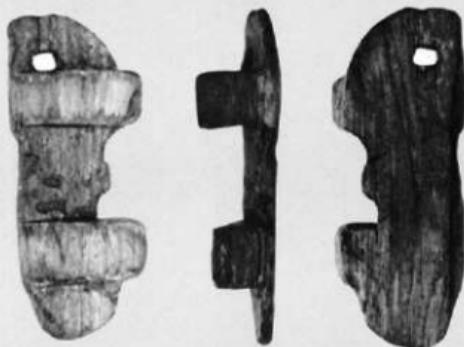
(4) 同溝底遺物出土状態



1号溝出土遺物（1～6）



1



2



3



4

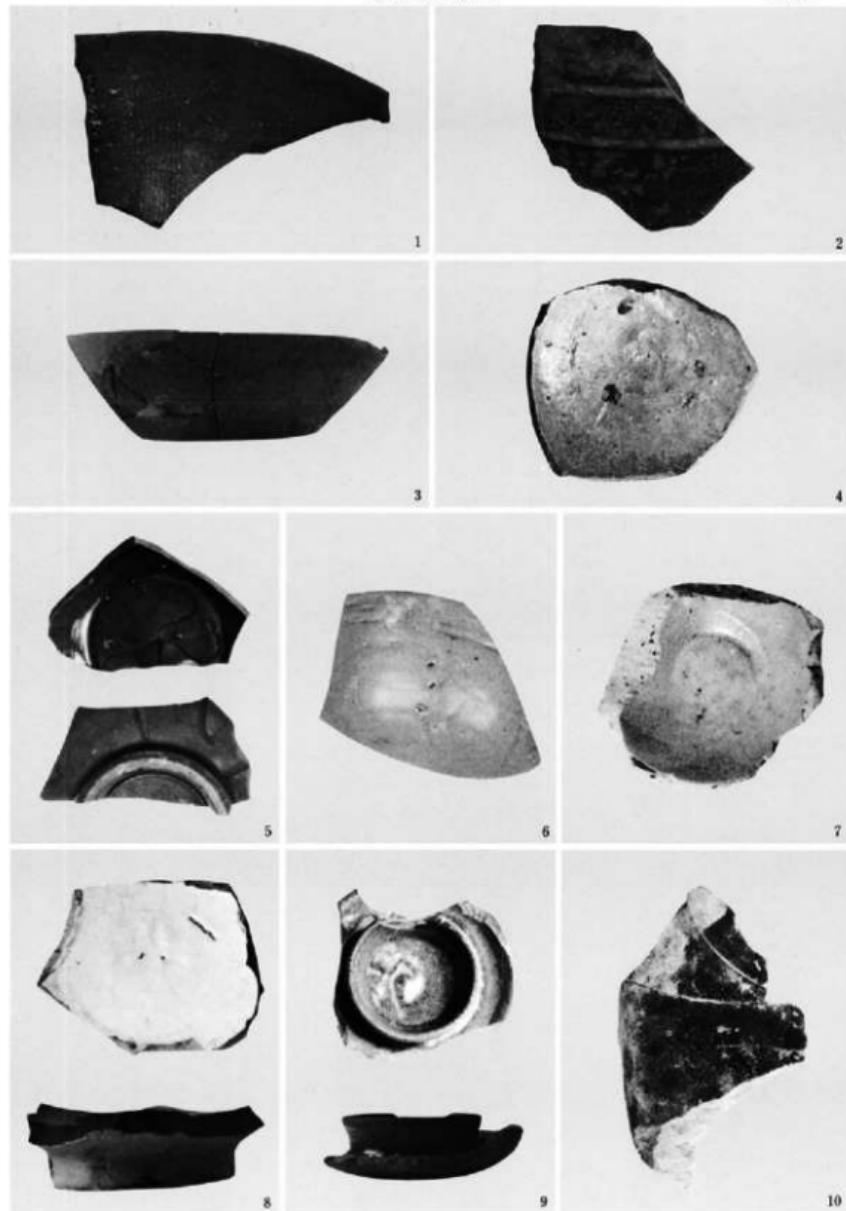


5



6

1号溝出土遺物（1～6）



1号溝出土遺物（1～10）



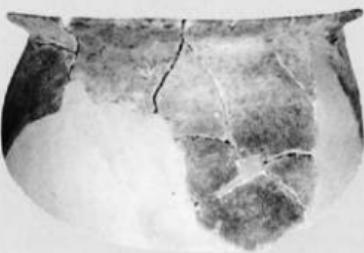
1



2



3



4



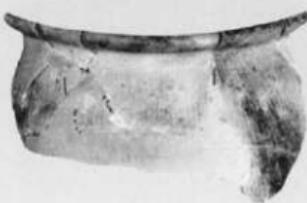
5



6

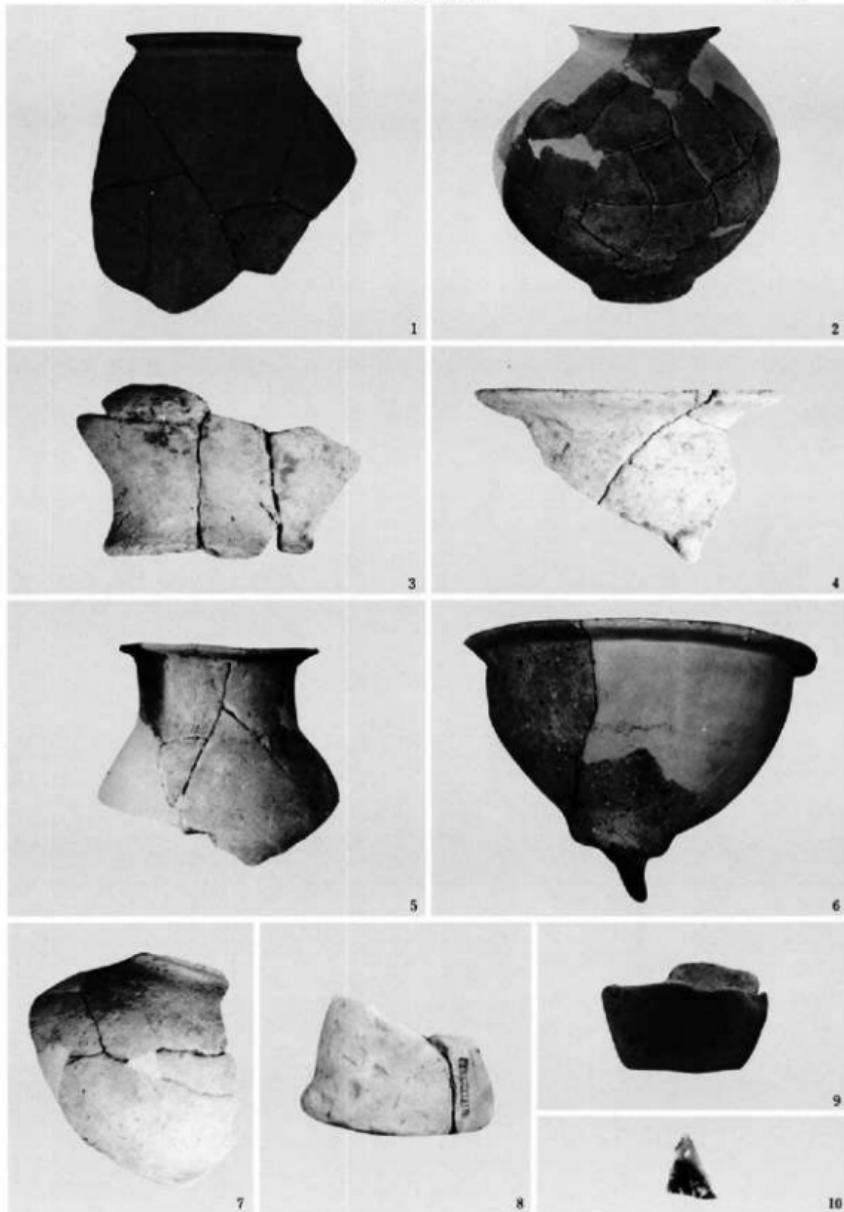


7

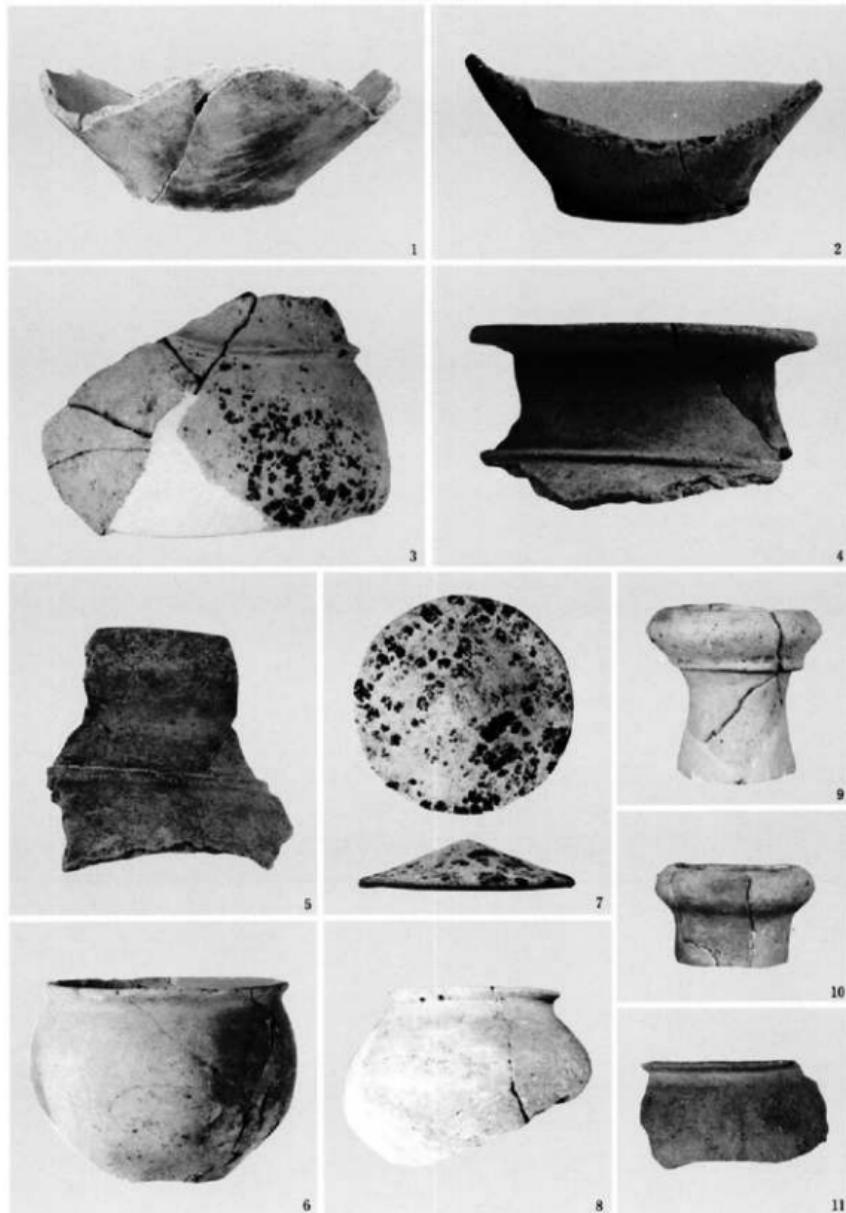


8

2号溝出土遺物（1～8）



2号溝出土遺物（1～10）



2号溝、3号溝出土遺物（1・2は2号溝、3～11は3号溝）



3号溝出土遺物（1～12）



1



2



3



4



5



6



7

3号溝出土遺物（1～7）



1

2



3



4

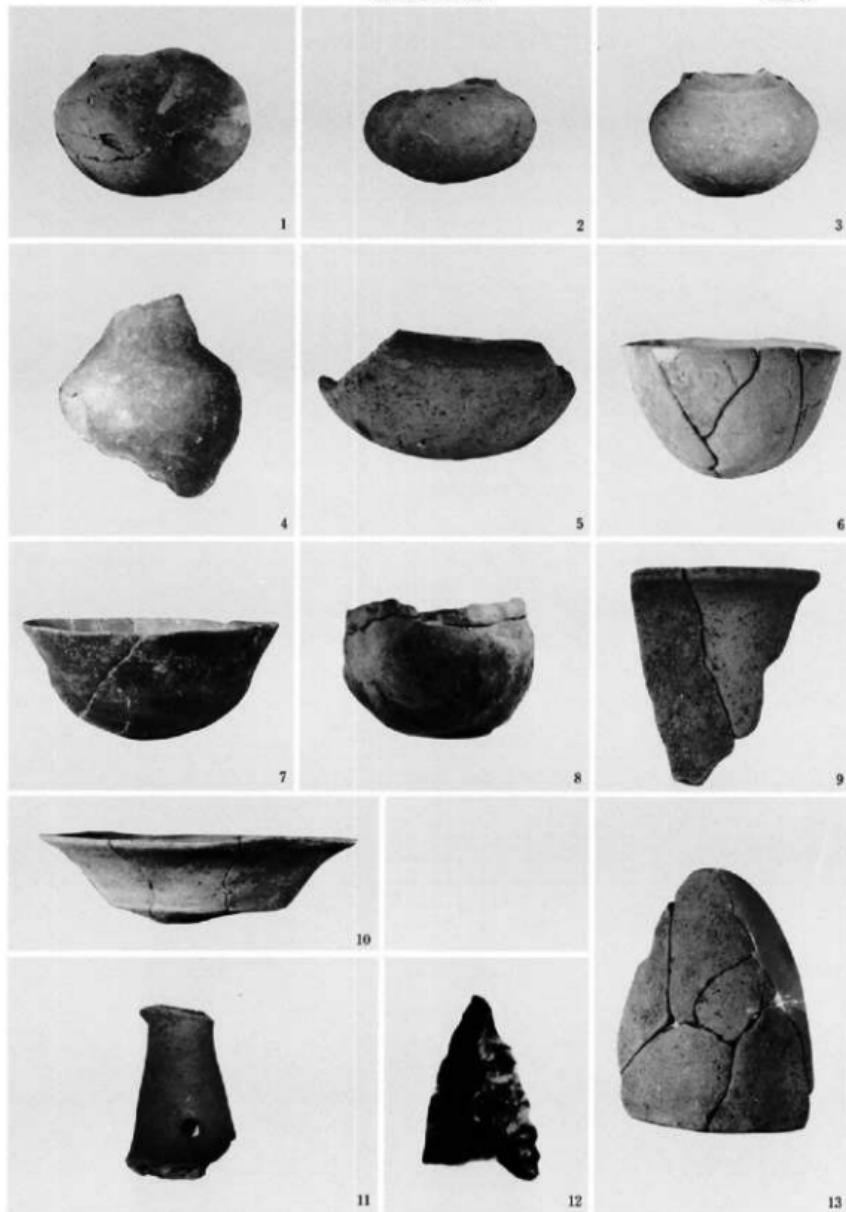


5

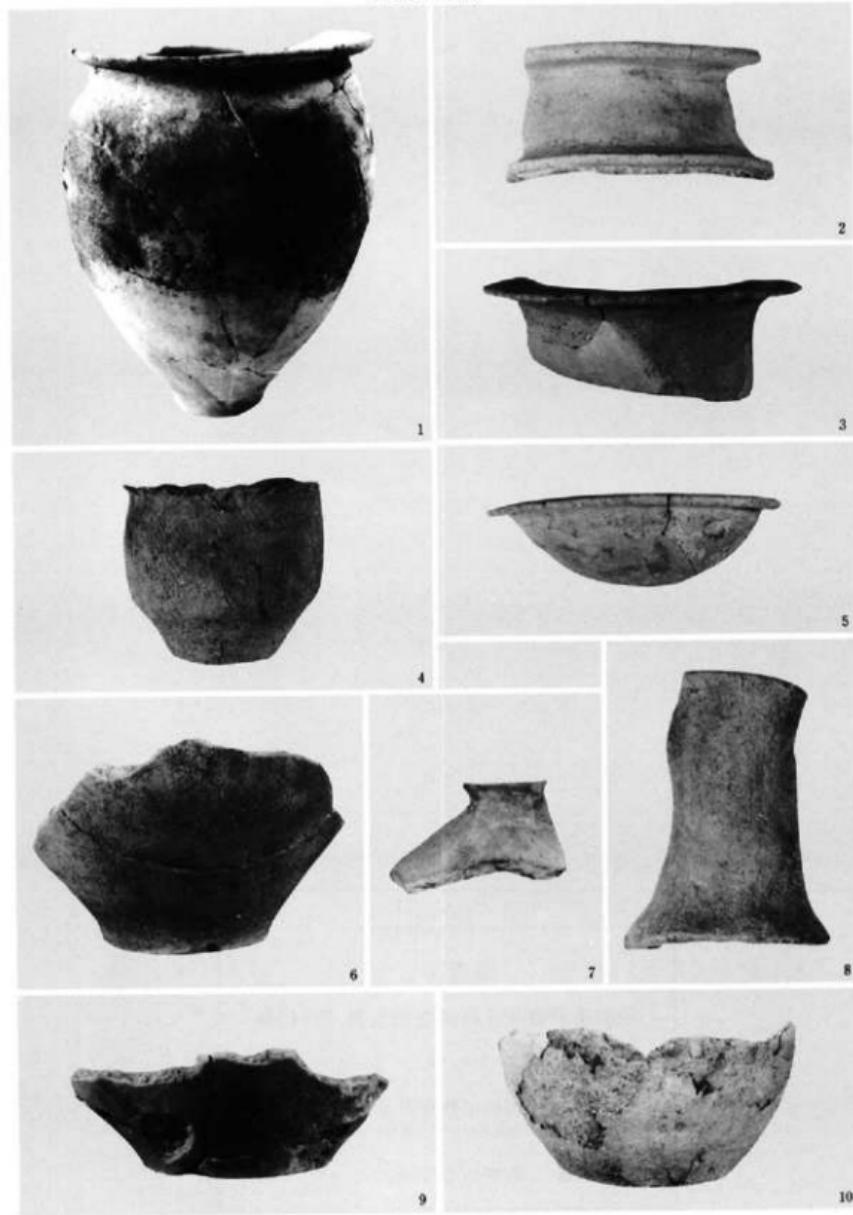


6

3号溝、4号溝出土遺物（1・2は2号溝、3～6は4号溝）



3号溝、4号溝、pit出土遺物（8は3号溝、1・2・4～13は4号溝、3はpit出土）



4号溝出土遺物（1~10）

原遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第140集

1986年 (昭和61年) 3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-7-23

印刷 (有)松古堂印刷

